
光龍記 ~ The Shining Blader's ~

ライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光龍記〜The Shining Bladers〜

【Nコード】

N0789P

【作者名】

ライ

【あらすじ】

この世界には、数々の名武器が存在し、さらには人知を超越した不安定で不規則な特殊能力まで登場する。

主人公・はとつりゅう覇道龍は、名刀・そうりゅう蒼龍の使い手。ある日、龍は後の仲間にして永遠の好敵手となる、くろかり黒斬大虎に出会った…。

序章 2つの名刀 (前書き)

基本本人の視点で進行していきます。駄文かもしれませんが、読んで下さい。

序章 2つの名刀

- ガギイン -

鉄同士のぶつかる音が灰色の空に鳴り響いた。

俺は目の前に居る男にちょっとした感心を抱いていた。

「強いな。名は？」

「黒斬大虎（くろざり
たいが）」

「そうか。俺は霸道龍」

「良い名前じゃねえか」

「そいつはどうも」

俺の持つ刀は名刀に分類される。

名は『蒼龍』

刃は鉄を斬り裂き、刀身は光に翳すと蒼く輝く当に二つと無い刀である。

その蒼龍がこの男の強さに震えている。否、それだけではない。

男の持つ刀にも震えている。

この震えが臆病風に吹かれたものなのか、武者震いなのかは俺には分からなかった。

だが、そんな事はどうでも良かった。

蒼龍^{コイツ}が震える程の刀が存在したのだから…

「その刀、名刀か？」

「よく分かったな…コイツの名は『鋼虎^{こつが}』これに気付いたってことは…お前の刀は？」

「蒼龍」

「へえ、あの蒼龍をこの眼で拝めるとは…どつりで強いわけだぜ」

「お前が言うかよ」

「フツ…違いねえ」

辺りが静まり返る。暫くの沈黙の後、2人同時に踏み出す。

黒斬は恐ろしい速さで俺の懐に踏み込んで来た。鋼虎の刃が俺を襲う。

蒼龍で受け、その刀身を上へ押し上げ、横腹に向かって斬りつける。これはかわせない！

「ギーン…」

「黒斬、お前出来るな」

「そりゃ、お互い様の様だが？」

黒斬は俺の攻撃を避けきれないと判断し、鋼虎を地に突き刺して防いでいた。

即座に鋼虎を抜き去ると、今度はお返しと言わんばかりに俺の腹を鋼虎で突いてくる。

体を捻って受け流し、鋼虎の刀身を踏みつけて更にお返しで黒斬の右肩を蒼龍で突く。

利き腕である右を潰したが、黒斬は鋼虎を左手に持ち替えて右手で蒼龍の刀身を掴んだ。

俺はとつさに距離をとろうとした。が、それより速く鋼虎が肉を斬り裂いた。

「ぐはあ！」

「残念…両利きなんだよ」

俺は地に伏せ、絶賛出血中の腹を手で抑えた。痛みに苦しみながら、横目で黒斬をチラリと見る。

黒斬は肩に刺さった蒼龍を抜くと俺に投げた。

「さあ…立てよ。」

決着^{ケリ}点けようぜ」

先に立ち上がった黒斬が、俺に立ち上がるよう促してくる。

「これで…幕引きだ」

言って俺はヨロヨロと立ち上がり、蒼龍を拾い上げた。手に力を込

める。

そして、黒斬より少し遅れて走り出す。

「秘剣・大獣爪！」
ひけん・だいじゅうそう

鋼虎の刀身が巨大な爪と成り、襲い掛かってくる。

「必殺剣・蒼天波！」
ひっさつけん・そうてんは

蒼龍を蒼白い光が覆い、光り輝いた。

2つの剣技がぶつかり、辺りは白い光に包まれた。

序章第2話 辺境の村

光が消え、視界がはつきりしてくる。俺も黒斬も仰向けで倒れていた。

「参ったな…大獣爪が砕かれちゃった」

「お前こそ、蒼天波を破りやがって…引き分けだな」

「そついつことにしといてやるよ。霸道龍」

「なあ、俺は今から村に帰るけどお前も来るか？」

「良いのか？」

「ああ。俺の村の人達は優しい人達ばかりだ。それに、傷の手当てもしたいしな」

「じゃあ、言葉に甘えさせて貰うぜ。」

「よろしくな。大虎」

「こちらこそ、龍」

俺は大虎を抱き起こし、村への帰路を急いだ。俺の村は刀の国、刀とうの外れにある小さな村。この名も無き村で俺は育った。

俺の父は「伝説の剣士ソートマスター」の1人、霸道はとう剣聖けんせい。

今は、刀の王として、城に住在中だ。

俺と母は城を出て、この村で生活している。
別に父の事が嫌いなわけじゃない。城が窮屈なだけである。

村の人達が俺を見るなり、次々と声をかけてくる。

「お帰り龍君、ってどうしたの！？その傷」

「こつちの子も結構な深手だぞ…」

「手当てをしなければ」

この村の人達は、自分達の事をそつちのけで他人の事を思いやれる、
とても優しい人達だ。

行き過ぎた言い方をすれば、お人好し「過ぎる」である。

「あ…ありが…とう…頼むよ」

それだけ言つのが精一杯で、その後、目の前が真っ暗になった。

目が覚めると、見慣れた天井が目に留まった。

「俺の家…か…」

痛みを堪えながら、ゆっくりと身体を起こす。

その時、大虎が横に座った。

「良い村だな。他人の俺をここまで気遣ってくれるなんて」

「だろ？」

大虎の身体には完璧なまでの処置が施されている。

「俺の村と似ている…いつも、みんな優しく暖かい。でも今は、他国との戦で立ち入り禁止なんだ」

「…！」

黙って聞いていた俺ははっと我に座った。

「それは、国境付近の>ラムド<という村か!？」

「ん?ああ…そうだけど…どうかしたのか？」

「今朝、母さんが>ラムド<へ行くって…言っていた…」

それを聞いた大虎の形相が変わった。

「マズイ!早く行くぞ>ラムド<へ!立ち入り禁止とはいえ、流れ弾で死なないとも限らねえ！」

「くそっ!何故俺は気付かなかったんだ！」

俺と大虎は村を出て、>ラムド<へ向かった。

傷を手当てした直後だったために、走るのは身体にこたえるが、大事な人を失う痛みには変えられない!

幸いな事に母は>ラムド<付近の森の中に居た。

「母さん！無事みたいだね…」

「どうしたの？龍…そんなに慌てて…」

「どうしたもこうしたもないよ！今、その村で戦闘があってるんだ。だから、早く逃げて！」

「あゝ、だから入れなかったのね…」

家の母は事の重大さを理解しているのだろうか？

「とにかく、ここは危ないから、村に帰ってて」

「あなたはどうするの？」

「ちょっと様子を見てから、すぐに帰る」

「分かった。必ず、生きて帰りなさいよ」

「勿論」

俺と大虎は、立ち入り禁止という看板が掛かっているゲートを突き破って>ラムド<へ入った。

序章第3話〈ソードハンター〉

>ラムド<は酷い荒れようだ。
立ち並ぶ家が全て炎に包まれている。

俺達はその景色に圧倒されていると、黒いコートを着た集団が目の前に現れた。

「何者だ？ 貴様等…」

「我等は、刀を狩る者、ソードハンター…お前等の名刀も直に手に入れる。覚悟しておくことだ…」

「今、かかって来い！」

大虎が鋼虎を抜き、ハンターの1人に斬りかかった。
それをいとも簡単にかわし、ハンターは炎の中へ消えた。

「くそっ！ 何だっつてんだ一体！？ 刀を狩る者？ 知るかそんな奴ら…
おい龍、お前何か知らないか？」

「いや、何も…そうだ、一度、城へ戻ろう。父さんなら何か知ってるかもしれないしな」

「じゃあ、行くか…」

俺の父が住んでいる>刀<の城。いつ見ても相当なデカさだ。

「父さん…ソードハンターって組織について何か知らない？」

「龍、お前、何故ソードハンターのことを知っている？」

「ついさっき、>ラムド<って村で会ったから。何か知ってるんだね？」

「ああ…名刀を狙う集団だ。私達「伝説の剣士」ソードマスターが5年程前に滅ぼしたんだが、また出てこようとは…」

父の顔は険しかった。

「龍、そして大虎…よく聞いてくれ。私はこの城を離れるわけにはいかない。お前達でソードハンターを倒すのだ」

「分かったよ。父さん」

「しゃーない。「伝説の剣士」ソードマスター様の言うことだ…やらねえわけにもいかないな」

「それじゃあ、北の街>ヴィリオミール<に行かないか？ここなら旅の準備もしやすいし、俺の情報屋も居る」

「そうか、なら道案内宜しく、ってここから…5分！？近いな…じやあ行こうか」

大虎は>刀<の住人なのに>ヴィリオミール<を知らないのだろうか…。

>ヴィリオミール<は>刀<の中で一番大きな街だ。大体の物はここで揃える。

「おーい、居るかー？」

龍は如何にも怪しい感じの建物の前で誰かを呼んでいる。

すると、中から男が1人出て来た。

「いらっしやーい、おや、龍じゃないか。どうしたんだ今日は？」

龍は声を小さくして言った。

「ソードハンターについての情報が欲しいんだ」

「ソードハンターだと!？」

情報屋も声を小さくした。

「何故そんな事を？」

「今日会ったんだ。何でも良い…情報をくれ」

「アイツ等は名刀を集めて何かを企んでいる。何を企んでいるかは知らないが…。下っ端はそうでもないが、幹部やボスは恐ろしく強いぞ。殺^やり合うなら、覚悟を決めた方が良い」

「大丈夫。俺の強さは知ってるだろ？それに今回はコイツも居る」

俺は大虎に自己紹介を促した。

「黒斬大虎だ…宜しく」

「俺はしがない情報屋さ。宜しくな…大虎」

「でも、そんなに強いなら後もう一人ぐらい仲間が欲しいな…誰か適任は居ないか」

「それなら丁度良い奴がいる。おい、サクヤ、コイツ等の旅と一緒にやって行ってくれねえか？」

情報屋が言つと、建物の中から少女が出てきた。歳は俺達とあまり変わらないようだ。

「話は大体分かりました。春風サクヤ（はるかぜさくや）と言います」

俺は、女の子だったからだろうか、少し驚いたが、この情報屋の言うことだ。疑う余地は無いと確信していた。

「宜しくなサクヤ。俺は霸道龍、こいつは…」

「黒斬大虎」

「宜しくお願ひします。龍さん、大虎さん」

こうして、後に英雄となる霸道龍とその仲間達の旅が始まった。

本編第1話 龍の敗北

俺達はハンターがまだ>刀くに居るといふ情報を得、西の町>ラビルソくへ向かっていた。

>ラビルソくは豊かな自然に囲まれた町で、めいしん迷森と言われる森が>ラビルソくを取り囲んでいる。
一度この森に入ったら二度と出てこれないと、噂までたったほどだ。
勿論、俺は信じない。

噂の森までやって来た。樹木が鬱蒼と生い茂っている。

「手分けして探すか？」

大虎の提案を、俺は否定した。

「いや、バラバラのところを狙われたらマズイ…固まって動くのが良いだろ？」

「そうですね、相手の力が解らない以上は。それに、帰って来れないかもしれないし」

サクヤが味方に就いてくれた。大虎は皮肉っぽく笑っている。

「なんだ？サクヤ…あんな迷信を信じてるのか？」

「え…ええ…まあ一応」

「分かったよ。じゃ、入るぞ…龍、サクヤ、準備は良いか？」

「ああ」

「いつでもどうぞ」

俺達は迷森の中へ入った。

流石に町の中に身を隠したりはしないだろうという俺の読みは正解。森に入って5分くらいの所に、倉庫があった。

こんなに町に近い所に建ててあるところを見ると、アイツ等は少なからずも迷信を信じているのだろう。

何故、それがハンターのアジトだと分かったのだったのか？

倉庫の看板に「ソードハンター」と書いてあったらだ。

「…バカなのか？」

「バカなんだろう？」

「バカですね…」

3人の意見が一致したところで声をかけてみる。

「誰か居ませんか？」

倉庫の扉が開き、中から3人のハンターが出て来た。男なのか女なのか、フードを被っているせいで解らない。

「誰だよ？こんなところに用は無い筈だろ！？」

それを聞いた大虎が口を開いた。

「いやいや、アンタ等に用があるんでね…ソードハンターさん」

ハンターもハンターだ…用が無いって解ってんなら、最初から出て来るなっつんだ。

そんな事を思いながら、大虎の言ったことを聞いていた。

「俺達に用？…あ、お前等の腰の刀もの！俺達によこせ！」

蒼龍と鋼虎を見たハンター共が、眼の色を変えて飛びかかって来た。

「あゝ、やっぱりそうなっちやいます？…龍！」

大虎は俺の名を呼び、鋼虎を抜刀した。

「ああ…やるか…サクヤはさがってる。」

蒼龍を抜刀する。

「そ、その刀、まさか蒼龍ですか！？」

サクヤが驚いている。

「そうだけど、知ってるのか？」

「知らない方がおかしいと言われますよ」

知らなかった…蒼龍ってそんなに凄い刀だったのか…

「へえ、そうだったのか…まあいい…さっさと片付けますか」

大虎の横に並び、蒼龍を構える。

ハンターは3人同時攻撃を仕掛けてきた。

蒼龍と鋼虎を交差クロスさせるように重ね、3本の刀を受け止める。

そして、あの技を繰り出す。

「秘剣・大獣爪！」

「必殺剣・蒼天波！」

地響きと共に、3人を吹き飛ばした。気絶しているため、無駄な血を流さずに済んだ。

「す、凄い…！」

サクヤは地面に座り込んでいる。腰を抜かしたのだろうか…。

「こんなナマクラで俺に勝てるわけねえだろ！」

大虎は、ハンターの持っていた刀を放り投げながら言い放った。

「ここはハズレの様だな…。龍、サクヤ、別の場所を探そうぜ」

そう言うと、大虎は歩き出した。と、その時、木の陰から2人のハンターが現れた。

「あらま、向こうから出て来てくれたぜ…龍！コイツ等気絶しねえ程度にとっちめて、別のアジトの場所、聞き出そうぜ」

「お！ナイスアイデア！」

俺と大虎は1分もせず、その2人を斬り伏せた。そして、アジトの場所を聞き出そうと歩み寄るが、それを阻止するように次々と別のハンターが現れる。

「チイ！コイツ等何人いるんだよ！」

20人程を斬ったところで、ハンターは出て来なくなった。

「2人共、大丈夫ですか？」

サクヤが心配そうに駆け寄って来た。

「だ…大丈夫だ…ハア…ハア…もう片付いたのか？」

「油断はするなよ…また出てくるかもしれないぜ」

そう言った矢先、ソードハンターが現れた。今度は1人だが、他のハンターとは明らかに違うオーラを放っている。

「お前達か…俺の部下を斬ってくれたのは…」

「…！？大虎！コイツ、強いぞ…サクヤも戦ってくれ。2人じゃキツくなりそうだ」

「分かりました」

サクヤも俺達の横に並んだ。

「青二才共が：俺に勝てると思ってるのか？ソードハンターの幹部、このゴルディール・ロルカノフに」

ゴルディールが手を挙げ、さらに2人のハンターを呼び寄せた。

「殺れ！」

ゴルディールの声と共に、2人のハンターは大虎とサクヤに斬りかかった。

「雑魚共は俺とサクヤに任せろ！」

「龍さんはゴルディールを何とかして下さい！」

そう言つて大虎とサクヤはハンターに向かつて行つた。俺も蒼龍を構え、戦闘態勢をとる。

「さつさと決めさせては貰う！必殺剣・蒼天波！」

蒼く輝く蒼龍を思い切り、ゴルディールに振り下ろした。

「そんな攻撃では、俺は倒せんよ」

ゴルディールは刀を抜きつつ、受ける構えをとった。

蒼龍がゴルディールの刀に触れた瞬間、蒼天波が消えて無くなった。

「な、何！？蒼天波が…消えた！？」

俺が驚いていると、ゴルディールの刀が蒼龍を弾いた。そして、刀身を黒い光が包み、振り下ろされた。

「あんこくせん暗黒斬！」

なす術も無く斬られ、地面にうつ伏せに倒れ込んだ。

「が…！ハア…ア…」

息をするのもキツイ。

「お前は俺にはまだ勝てぬ…また日を改め、挑んでくるがいい」

ゴルディールは森の中へ消え、俺は立ち上がる力も無く、無様に倒れていた。

完全に俺の負けだった。

本編第2話「風を従える刀」(前書き)

タイトルと関係無いところも書いてますが、ご了承ください。

本編第2話 風を従える刀

「ん…ここは…？」

ゴルディールに負けた後、意識が無くなった俺はここが何処なのか分からなかった。

どうやら建物の中の様だ。

ベッドの上に寝かされていたと気付くのはもう少し後のことである。

「龍、良かった…気がついたのか」

「大丈夫みたいです」

横を向くと、大虎とサクヤが心配そうに俺を見つめていた。

「どうしたんだよ？そんなに心配そうな顔して…」

「どうしたじゃねえだろ…あんなに重症のお前を見たのは初めてだぜ。何があった？」

「かなり深く斬られてましたよ？ゴルディールはそんなに強かったですか？…」

「ああ…強かった…。アイツの刀に刀身が触れた瞬間、蒼天波が消え失せた」

「蒼天波を…消し去る…ですか！？あれ程の技を消し去る刀なんて

…」

「それだけじゃない。アイツに斬られた瞬間、全身の力が抜けていったんだよ…いや、吸い取られると言った方が良いかもな。感覚的に」

「吸い取る…ですか…」

サクヤは顎に手を当て、何やら考え込んでいる。

「何か知ってるのか？サクヤ…」

「はい。確証はありませんけど…“触れたものの力を吸い取る”刀が有るって噂を聞いたことがあります」

「“触れたものの力を吸い取る”…か…。じゃあ、蒼天波は消えたんじゃないかって」

「吸収されたってことか…」

「俺の力も、アイツの刀に吸収されたってわけだ。だから、俺はあの時立ち上がれなかったのか」

「厄介だな…触れたら駄目なんだろう？どうやって倒すんだ？」

大虎が俺に聞いてくるが

「分からん」

としか俺は答えられなかった。

「ただ…」

「ただ？」

「吸収した力を、本来の力に上乗せして攻撃出来るのかということ
が分からなくて…それが出来るなら、大虎の言ったとおり、本当に
アイツの刀に触れられなくなる」

「確かに、そんなアホみたいなカウンターを使えるなら俺等に勝ち
目はねえ…」

「どうします？」

サクヤの問いに、俺は答えを直ぐ導き出した。

「当然、リベンジしに行くさ」

龍はベッドから起き上がり、歩き出した。俺とサクヤは龍が明らか
に無理していると気付いていたが、あえて手助けはしなかった。

・翌日・

新たに目的地を決め、歩いていた。今度の目的地は南の>サウスタ
ウンくだ。

「なあ、どうして南だけ>サウスタウンなんだ？他はちゃんとオ
リジナルの名前があんのに…」

と俺に聞いたのは大虎だ。

「確かにそうだな…名が思い浮かばなかったんじゃないのか？でも、名があるだけ良いだろ？俺の村、名前無いんだぜ？…」

「そうだったな、悪い…。そういえば、ずっと気になってたんだが、サクヤは>ヴェリオミール<の出身なのか？」

「いいえ。私の出身は>刀<の隣国、>オラル<です
「何でまた>刀<に來たんだ？」

「龍さんと同じです。ソードハンターの情報が欲しくて」

「サクヤもソードハンターを追ってたのか…」

大虎が意外そうな顔をした。

「はい。>オラル<には1本の名刀があつて、それを奪うために、ハンターは>オラル<を滅ぼしたんです…だった1本の刀の為に…
仇を伐つ為に>刀<に渡り、情報を集めていたら、龍さん達に会ったんです。」

なる程…情報屋の“ちょうどいい”ってのはこの事だったのか…。

「ひでえ話じゃねえか…龍、サクヤを助ける意味でもハンター共を潰してやるつぜ」

「当然だ。仲間を助けるのに理由なんか要らない」

「ありがとう…こんな仲間思いな人達に出会えて、私は幸せ者です」

サクヤは感動を隠しきれない様で、目に涙を浮かべていた。

サウスタウンは、刀くの中でも落ち着いていて静かな町だ。“この町は”好きだ。

聞き込みをしていると、花屋の店主が情報をくれた。

「この前、その家に黒いコートを着た“人達”が入って行くのを見たよ」

と言つて、店主は花屋からさほど離れていない家を指差した。

「本当か！？ありがとう、助かったよ。ついでにどれでも良いから花を1つ貰おうかな」

「毎度。また来てくれよ」

「ああ…直にな」

店主から貰った花を片手に、俺達は“例の家”にやって来た。さつき、店主がハンターを見たと言った家だ。

恐る恐るドアを開け、中に入る。

人は住んでいない様だ。その証拠として、床にほこりがたまっている。

しかし、ほこりの中に足跡を見つけた。

店主の言っていたことはどうやら本当らしい…まあ、別に疑ってた訳ではないが…。

「おい…龍、サクヤ、ちょっと」

大虎が俺とサクヤを呼んだ。大虎は部屋の隅にしゃがみ込んでいる。

「どうかしたのか？」

「見るよ…ここだけほこりが無い。しかも、足跡がここに集まっている」

確かに大虎の言うとおり、隅に四角くほこりがない場所があり、その周辺には足跡が集中していた。

「まるでこの場所を目指しているみたいですね」

「と、いうことは…大虎、サクヤ、さがっててくれ」

「何か分かったのか？」

「多分、この下に隠し階段がある」

龍が床を蒼龍で突き刺し、上へ持ち上げる。すると、床の四角い部分の外れ、隠し階段が現れた。

「用意周到なことじゃあねえか」

「敵もバカじゃないみたいだな」

その言葉を聞いたサクヤがすぐさま口を挟む。

「でも、昨日の“あれ”は…」

「ああ、バカだった…」

俺と大虎は声を合わせた。

階段を降りると、ひととき大きな空間が広がっていた。

「ここが見つかるとは…悪いが死んでもらおう」

そう言つて奥からハンターが1人出てきた。

「返り討ちにしてやるぜ」

俺と大虎が刀を抜こうとするのを、サクヤが制した。

「待ってください。ここは私が」

「お、おい！サクヤ？」

サクヤが刀を抜き、ハンターに向かって行く。

刀身をにわかには風が包み込んでいるのが分かる。

ハンターはサクヤに攻撃を仕掛けるが、サクヤは悉く受け流している。

そう、まるで“風にも乗っている”かの様に。

「どうしました？この程度ですか？」

「チィ！このっ！」

ハンターはサクヤに一撃を当てられず、イライラしているように見える。

そんな中、甘く入った一太刀をサクヤは受け止め、言った。

「風流刃…」

サクヤの刀の刀身から竜巻が起こり、ハンターを吹き飛ばした。

壁に叩きつけられたハンターは、苦悶の表情で起き上がり、サクヤを探すが、見つけられずにいる。
それもそのはず…サクヤは…

「なっ…何処へ!?ぐあ!」

お前の後ろに居たんだから…。

柄の部分で首の後ろを突かれ、ハンターは気絶していた。

「凄いな、その刀」

大虎はサクヤの刀に興味津々である。

「これは『雷風』、あなた方と同じ名刀です」

「やはりな」

「気付いてたのか? 龍…」

「刀身が風を帯びてる刀なんてそうそう無いからな」

「これが>オラル<にあった名刀なのか？」

「いえ、これは情報屋から貰ったんです。“俺は喧嘩得意じゃないから”って」

アイツ、そんな事言ってしつかりサクヤに“力”を与えてやる。油断できない奴だ…

「あ、奥に祭壇みたいな所が」

サクヤが指差した方向には、確かに祭壇のような台があった。その台の上に置かれている物は…

「！サクヤ、これ、『真天』じゃないのか？」

サクヤが駆け寄って来る。

「た、確かに真天です…“天候を操る”名刀が何でこんな所に？」

「しかし、何故そんな刀ものがこんな所に？」

「さあ…でも思わぬ収穫じゃねえか。ありがたく貰っておこう」

「龍、真天これはお前が持ってる」

「良いのか？」

「私も賛成です。龍さんが持っていて下さい」

「分かった」

そう返事したが、内心俺は少し不安だった。

本編第3話「リベンジと企み」（前書き）

こんにちは、ライです。

更新遅くなってすみません。なにぶん学生という忙しい身分でして…。

これからも更新しますのでよろしくお願いします。
それでは第3話をどうぞ。

本編第3話〜リベンジと企み〜

さて、これで俺の持つ刀は蒼龍と真天の2本になったわけだが、蒼龍と真天（コイツ等）を使いこなすには骨がいらそうだ。

「もうここに用は無い筈だ。行こうぜ、龍…ゴルディールにリベンジするんだろ？」

「ああ」

リベンジなんて言葉で飾ってはいるが、実際のところ只の復讐と違くないのではないか。

やられたからやり返す。本当にそれで良いのか…

俺達は>ラビルソ<にゴルディールが未だに潜伏している事を知り、>ラビルソ<へ引き返した。（どうやって知ったかは、省略）
途中、迷森めいしんの中を通って来たが、それ程迷いはしなかった。

「おい！ゴルディール！」

森の中の開けた場所に1人ただず佇む大柄な男。ゴルディール・ロルカノフである。

「おや？君はこないだの少年ではないか…本当にまた挑んで来てくれるとはな」

「自分で挑んでこいって言うておいてそれか？」

「スマンスマン…。また、やられに来たのかと思ってしまったね」

「その言葉、忘れるなよ？」

「忘れんさ。君を倒してトドメを刺すまではな」

同時に刀を抜いた。

しかし、“触れたものの力を吸収する”刀への対抗策を考えてはならず、避けるばかりになってしまった。

「どうした、少年！避けてばかりでは俺には勝てぬぞ！」

「その、力を吸収するなんて厄介な能力ちからを持つてる刀やうをしまつてくれたら、本気で行くんだけどなあ」

「ほお、刀ナイフの能力ちからに気付いていたのか…いつからだ？」

「やられた後だよ…斬られた時に妙な脱力感があったんでな」

「中々勘の鋭い奴だな。そう、これが俺の刀。名は『吸鬼きゅうき』…お前の察しているとおり、“触れたものの力を吸収する”刀だ」

ゴルディールが吸鬼を容赦なく振り下ろしてくる。俺はとうとう避けきれなくなり、蒼龍で吸鬼の刃を受け止めた。

「?…触つたのに、力が抜けない…」

「さあ、もつと俺を楽しませてくれ！」

俺は吸鬼の刃を蒼龍で受けながら反撃の糸口を探す。

「触れたものの力を吸収する……そうか！サクヤ、雷風を俺に！」
ハンターを倒して戻って来ていたサクヤに呼びかける。

「え…あ、はい！どうぞ！」

サクヤが雷風を投げる。俺は蒼龍を鞘におさめ、雷風を抜いた。そして…

「風流刃！」

サクヤが先程披露した技を使う。

予想通り、ゴルディールは受けた。これが狙いだ。何せ、雷風の風は…

「これしきの技で吸鬼を破ることは出来んぞ！直ぐに掻き消してくれる！」

「じゃあ、そうしてもらおうか」

「何！？」

「触れたものの力を吸収する刀…確かにスゲエけど、吸収出来る量って無限なのかなあ？」

俺は今までに無いくらいニヤリと笑った。

「雷風の風は無限エネルギーだよな？好きなだけ吸収しやがれ！！」

吸鬼の刀身に、ピキッという音と共にヒビが入り始めた。

「バカな！こんなことが！」

ゴルディールはそんな事予想もしてなかった様で、驚きを隠せないでいる。

・ピキイイーン・

吸鬼の刀身は雷風の風流刃を吸収しきれなくなり、真ん中から2つに折れた。

そのまま、風流刃でゴルディールを斬る。今度はゴルディール（奴）がなす術も無く、斬られる番だ。

「が…！あ…！」

ゴルディールは声にならない叫びを上げると、気絶してしまった。不意に力が抜け、倒れそうになった俺をサクヤが抱き止めた。

「…やった…ぜ」

意識が遠退いていく…

「勝ったんですね、龍さん…」

微かにサクヤが呟くのが聞こえていた。

「あゝあ、コイツも気絶寸前かよ。まあ、勝ったんだから良しとするか」

「とにかく、ここは退きましよう。またハンターが来ると厄介ですし」

「そうだな。サクヤ、そっちの肩」

「あ、はい」

俺とサクヤの2人で龍を担ぎ、その場を後にした。

ハンターが追って来ないのを確認し、俺が龍を見た時、龍は眼を少しだけ見開いて俺を見ていた。閉じたままの左眼は例外だが。それだけで、もう龍の意識は限界だということが分かり、

「龍、もういい…もういいんだ」

龍に言うと、龍は一度だけフツと笑い、完全に眼を閉じた。

これでハンターの一角を倒したわけだが、まだ相手の幹部の人数が分からない以上、油断は出来ない。

- >ラビルソくの宿屋にて -

「明日、>刀くを出よう」

龍の突然の提案に一瞬驚きはしたものの、俺は龍を信じると決めたから異論はない。

「分かった。何処へ行く？」

「お？すんなり賛成してくれるんだな」

「まあな…で、結局何処へ？」

「>アミラスくに行きませんか？」

サクヤが話に割って入ってきた。龍は少し意外そうな顔をしている。

「よく俺の言おうとしたことが分かったな、サクヤ」

「ええ、1番可能性が高い所から探るとしたら、あの大国アミラスしか無い
と思って」

龍とサクヤの話を聞きながら、俺は顔を綻ほころばせる。その時の俺の顔
を見ている者は居なかった。

- 次の日 -

俺と大虎、サクヤの3人は大国>アミラスくへ向かってかなりの距離を移動した。

>アミラスくは“世界で”1、2位を争う国。>刀くなんかとは比べものにならないくらい発展している。

(と言っても、インターネットや交通機関などない設定。現代の文化には遥かに劣る)

1人様子を見て来ると言っつて、先に行っていた大虎が何故か啞然とした表情で>アミラスくから出てきた。

「人が…居ない…」

「何!？」

大虎の言った事が理解出来ずにいると、サクヤが口を開いた。

「ど、どどういう事ですか!？人が居ないって…」

「どうもこうもねえ!言ったまんまの意味だよ!」

ハッと我に返った俺は大虎に聞く。

「本当なのか？」

「こんな事に嘘なんか憑くわけ無いだろ!？」

まあ、確かに大虎は嘘を憑く様な奴じゃない。だとすると…

「家の中は見たのか？」

「ああ…悪いとは思ったけど、あまりにも不自然だったから勝手に家を覗かせてもらった。」

「で？」

「やはり、居ないんだ」

俺は考えを巡らせ、ある答えに辿り着いた。

「国王に会ってみよう」

「何故だ？」

大虎が聞いてくるが、その理由は答えるまでも無い。

「国王まで行方不明なら、この国はもう終わってる筈だ。なのに“人が居ない”なんて事、ここに来るまで知らなかった。何処からか噂くらい流れてきても良いのに、噂も全く聞かなかった…つまり、国王は健在。そして、この事を隠そうとしている」

「なる程、そういう事ですか…で、>アミラス<の城は何処に？」

サクヤの問いに、俺は無言で一際目立つ建造物を指差した。

「じゃあ早速行こうぜ」

大虎は何時になく真剣な眼をしていた。

ゴーストタウンの様になった>アミラス<を、先頭をきって歩く大虎について行く途中、ボロボロになって道端に倒れている男を発見した。

方角的には城から来たようだが…。

つと、そんな事を思っている場合じゃない。この男は身体中の至る所に引つ掻いた様な傷があり、かなりの重傷の様だ。抱き起こし、呼びかける。

「おい、大丈夫か!？」

「あ…ああ…」

かろうじて喋ることの出来る口で男は返事をした。

「どうした!何があったんだ!？」

「国王の…企みを…：暴こうとして…こうなった…がはっ」

男は血を吐きながら話している。まるで、これが“最期”であるかのように…

「もう喋るな…死んじまうぞ！」

大虎が喋るのを止めさせようとするが、男は止めなかった。

「頼む…！王の企みを…止めて…くれ！」

「…分かった。俺達に任せろ」

俺は大虎と違い、恐ろしい程冷静に俺の申し出を引き受けた。

「良かった…これで…安心して…逝ける…」

それが、男の最後の一言。がっくりと首が垂れ下がり、男が動く事はなかった。

「龍、サクヤ…行くぞ。王に地獄を見せてやる」

大虎が立ち上がり、城に向かって歩き出す。

その後を追うように俺とサクヤも続いた。

城の扉の前まで来ると、流石に不審に思った兵士が刀を向けてくる。

“なんだ、人居るじゃないか”と心の何処かで思っている俺、霸道龍。

「ここが王の城だと分かっているのか？」

“プチン”と、何かが切れる音がしたため俺は恐る恐る横を見た。というか、見てしまった。

俺の横では、大虎が全身から“全てを破壊し尽くす”と云わんばかりの気迫オーラを放っている。

「王…だと？王ってのはなあ！国民を護るもんだろつが！！その護るべき国民を何処へやったあ！！」

鋼虎を抜いた大虎は兵士達を吹き飛ばしている。

「あゝららゝ」

「兵士達（アイツ等）、可哀想にな…」

「ええ…本当に…」

大虎が兵士達を全て伸した後、城の中に入る。シャンデリアの吊された天井…大理石の床…全体的に白をベースにした壁…大きくループを描いた階段…何処にでもありそうな城である。

「ようこそ、侵入者諸君…」

不意に声がする。階段に高価そうなマントを纏まとった男が立っていた。おそらく王だろう。まだ40代といったところか…。

「お前が…王か？」

そう聞いた大虎は、今にも王に飛びかかりそうな雰囲気だ。

「そうだが、私に何か用か？」

「惚けるんじゃないねえ！！俺達の用件なんか聞くまでも無いだろ！？この国の人達を使って何を企んでやがる！！」

「何処から情報が漏れたか知らんが、其処まで知っているのなら、生かして帰すわけには……いかない」

王は手に持っていたスイッチを押した。すると、床が開き、俺達は地下へ落とされてしまった。

「いって〜な〜…おい、大虎、サクヤ、無事か？」

「ああ」

「何とか…大丈夫です…！！2人共、あれを！」

サクヤが指差した先を見ると、地下をぐるっと囲む様に設置された巨大な檻…だろうか？その中に、恐らく>アミラス<の人達だろう…その人達が沢山閉じ込められている。

「どうした？国民はちゃんと居るじゃないか」

見上げると、王が上の階のフロントガラス越しに話している。

「ふざけるな！今すぐこの人達を…！」

「待て、大虎」

「龍？」

熱くなつた大虎を制して俺は王に質問をする。

「この人達を使ったその企みとやらを話してもらおうか」

「人々（これら）は只の餌だよ」

王は不適に笑い、壁にあるスイッチを押した。

本編第3話「リベンジと企み」(後書き)

どうだったでしょうか？

ゴルディール、結構簡単に倒してしまった(汗)。

結局、王の企みは明かされませんでしたね。次で明らかになります。

(なのにタイトルが「企み」とはこれいかに)

龍の閉じたままの左眼のことは後々語ります。

感想あればお待ちしています。

本編第4話〈VS野獣〉(前書き)

やっと完成しました。
では、第4話をどうぞ

本編第4話〈VS野獣〉

地下の4つある扉の内1つが開き“何か”が出て来た。そう、言葉では言い表せない様な“何か”だ。強いて言うなら、

「な、何だ！？あれは！？幾つもの動物の身体の部分パーツを繋ぎ合わせた様な…」

そう、それだ。

大虎が言ったとおり、沢山の動物を針と糸で繋ぎ合わせた様な動物だ。

ライオンの顔と身体に、6本の足は2本ずつの別の動物で尻尾の代わりに3匹の蛇が付いている。

「コイツは融合獣だ…」

「まさか、この為に!？」

「そう…国民達は融合獣コイツの餌だよ。やっとここまで成長してくれた」

「じゃあ、差し詰めその融合獣キマイラで世界転覆するってところかな？」

「まあ、間違っではないいな」

「そんな事させるか！秘剣・大獣爪!」

大虎が融合獣キマイラに斬りかかる。しかし、融合獣キマイラは発達した前足で、大獣爪が届く前に大虎を弾き飛ばした。

「がはっ！」

大虎はそのまま吹き飛び、檻に身体を叩き付けられた。

「ぐ…！何てパワーだ」

「大虎さん！大丈夫ですか！？」

サクヤが大虎に駆け寄って行く中、俺は蒼龍を抜刀し、構えた。

「サクヤ」

俺が一言だけ言うとサクヤも無言で頷き、大虎を寝かせ、雷風を抜いた。暫く俺と睨み合いを続けていた融合獣キマイラが、突然動いたかと思うと、もの凄い勢いでこちらへ突っ込んで来た。

「なっ！？蒼天波！」

とっさに蒼天波で融合獣キマイラの突進を相殺する。そして…

「サクヤ！」

サクヤに向かって一声。するとサクヤは飛び上がり、

「はい！風流刃・鎌鼬ふうりゅうじん・かまいたち！」

融合獣キマイラの頭目掛けて風の刃を飛ばした。

「ガ…！」

融合獣キマイラは一瞬仰け反りはしたものの、直ぐに体勢を立て直し、距離を取るように後ろへ下がった。遠目に見た融合獣キマイラの額には、“浅い”切り傷が出来ていた。

「鎌鼬あれを喰らって少し“切れた”だけかよ…」

「まあ、その方が倒し甲斐が有るじゃないですか!」

サクヤは上機嫌だ。初めて見たな…こんなサクヤ…。

「グ…ガ…」

つと、そんな事考えてる場合じゃ無い。融合獣キマイラは6本ある足の内2本で…立ち上がった!?!?さっきの鎌鼬(一撃)で怒らせてしまったのか?

「ガアアアアアア!」

融合獣キマイラの鳴き声が地下全体に響き渡り、壁にヒビを入れた。俺は思わず耳を塞ぐ。一方の大虎とサクヤも同じ様に耳を塞いでいる。

「あ……うつせ…な…、少しは静かにして下さいよお…」

大虎はそう言っているが、俺は実際耳が張り裂けるかと思った。

「黙らせてやる…!」

俺は蒼龍を片手で持ち、姿勢を低くした。親父に教わった剣術に自分なりのアレンジを加え、編み出したのがこの構え。これなら、上

段、中段、下段全ての攻撃に対応出来る。

融合獣^{キマイラ}が4本の腕を振りかぶり、俺に殴りかかる。その動きは単調で、単純だった。

「成る程、何も考えないで突っ込んでくるか…まあ、当然といったや当然だな。素直で宜しい！蒼龍四の方・紫龍閃^{そつりゅうしよんのかた・しじりゅうせん}！」

蒼龍を横に一振りする。刀身から紫色の光が伸びて行き、無数の棘と成り融合獣^{キマイラ}を貫いた。

「うわあ〜痛そう」

「痛いなんてもんじゃないだろ…蜂も真つ青だな、ありゃ」

穴だらけになつた融合獣^{キマイラ}を一瞥した俺は王の方に顔を向けた。

「どうする？まだやるか？」

「ぐ…ならば、これでどうだ！」

王は悔しそうな表情を浮かべ、壁のスイッチをまた押した。今度は4つ全ての扉が開き、融合獣^{キマイラ}が4体現れた。

「さあ、この融合獣^{キマイラ}達を同時に相手してみろ！」

常人なら怖くて逃げ出したくなる光景だろう。しかし、大虎はニヤリとし、サクヤは微笑んでいる。って大虎！？

「大虎、いつの間に起き上がったんだ？さっきサクヤが寝かせてた様な…」

「こんな面白い獣見せられて寝てろっていう方が無理な話だ。それに、吹き飛ばされた借りを返さなきゃ収まらねえ……」

大虎が笑顔から一変、ギロリと融合獣を睨み付けた。あの時の“全てを破壊し尽くす”気迫を出しながら……。
その気迫に気付いてか、融合獣が少したじろぎ、後退した。

「動くなよ……融合獣。大剣獣・鋼の虎！」
キマイラ
だいけんじゅう・フルメタル・ライガー

大虎が鋼虎を前方に突き出した。すると、刀身から銀色の毛並みを持つ虎が出現し、融合獣に飛びかかり、喉笛を噛み切った。融合獣の身体が硬直し、地響きを立てながら倒れた。切れた喉からヒューと空気が漏れる音が数回したが、直ぐそれも聞こえなくなつた。

「死んだな……」

そう言う大虎の顔は冷たかつた。

「2体は俺が殺る……良いな、2人共」

大虎が反論する。

「待てよ！1人で2匹はキツイだろ」

「俺は刀を2本持つてる。それにお前はもう殺つただろ？」

「ぐ……」

「サクヤ、それで良いな？」

「構いませんよ。私は倒したいだけですから、数には拘りません」

3匹の融合獣^{キマイラ}が迫る。サクヤが1匹を引き付け、俺から離れて行くのを確認すると、俺は真天を抜いた。真天の初舞台：派手に決めてやるか…

「叩き潰す…真天・氷塊雨！」
しんてん・ひょうかいう

瞬間に天井が雨雲に覆われ、その雨雲から氷の塊が雨の様に降り注ぐ。氷塊は思いのほか大きく、一瞬で2匹の融合獣^{キマイラ}を叩き潰した。そして、俺の近くにいた大虎にも…

「ん？…ちよっ！何で俺のところにも！」

「分からん。頑張つて避けてくれ」

「呑気で良いなテメーはよお！」

ドスンドスンと音を立てながら氷塊が地面にめり込む。大虎は俺に文句を言いながらも必死に氷塊を避けている。 - 済まん、大虎 - そんな事を思いながら、大虎が生きている事を願う氷塊を止ませる^や。辺りを見渡すと、押し潰されて、質の悪い絨毯の様になった融合獣^{キマイラ}3匹が横たわっていた。待てよ…3匹？

「サクヤ、融合獣^{キマイラ}は？」

「其処に…」

と言ってサクヤは潰れている融合獣キマイラの1匹を指差した。

俺としたことが、サクヤの分の融合獣キマイラも叩き潰してしまったのか…
それにしても、よくサクヤは氷塊に当たらなかつたな…

「おい！龍！」

大虎がズカズカと此方に歩いてくる。何やら不満そうな顔である。
まあ、その理由は聞かなくても分かるけどな…。

「どうした？」

俺はわざとらしく大虎に尋ねた。

「何が“どうした？”だ！お前は俺を殺す気が！？」

「だから言つたろ？“頑張つて避ける”って」

「それでもし俺が…」

「大虎、文句は後にしてくれ。どうやらラスボスの登場だ」

「融合獣キマイラが全てやられるとは…やってくれたなお前達！もう生きては帰れないぞ！」

そう言うと王は拳でフロントガラスを叩き割り、ジャンプで地下まで降りてきた。しかも、王が降りたつた地面は粉々に砕けている。

「おいおい、嘘だろ？融合獣キマイラなんかより、王マイツの方がよっぽど強えんじゃないねえのか？」

大虎が狼狽している中、俺は続けた。

「そんな事より見るよ、あの床…ジャンプだけで地面をあそこまで粉々にするんなんて、人間の業じゃない。王の“^{アイツ}本当の姿”はどんなものか見物だな」

俺の言葉を聞いた王は少し驚いた様な表情を浮かべて言った。

「たったこれだけでそこまで見抜くか…お前の頭はどうなっているのだ？」

「ちよつとばかしキレが良いだけだよ…それより、早く真の姿を見せてくれないか？」

「そんなに早死にしたいのか…良からう、見せてやる！私の真の姿を！」

王の身体が徐々にその大きさを増し、地下の天井近くまで伸びた。2つだった眼は1つになり、見るからに強靱そうな筋肉で全身が覆われている。

「あ、あれは…1つ目鬼！？」
サイクロプス

「知ってるのか？大虎…」

「ああ、確か…3つある上級種族のうちの1つだ。でも、かなり昔に絶滅したって話だが…」

「ソノトオリ…タシカニサイクロプスハ、センソウニツカワレ、ヒ

ヤクネンホドマエニゼツメツシタ。ダガ、ワタシハミツケタノダ！
ヤマノナカデコオリツケニナツテイタサイクロプスヲ…ソノサイボ
ウヲ、ジブンノカラダニトリコムコトニセイコウシタ…」

王の、いや1つ目鬼の言葉は少々聞き取りづらかった。1つ目鬼の
顎では、話すのが困難なのだろうか？

「そんな事出来るんなら、融合獣キマイラなんか使わずに自分で世界転覆す
ればいいじゃねえか」

「ワタシヒトリデハムリダ…ソレニ、キサマハナニモワカッテイナ
イゾ…」

「な、何だと!？」

「ジャマナソンザイハ、スコシデモヘラシテオキタイダロ？」

「邪魔な存在?…まさか!」

「ソウダ…コノコクミンタチハクーデターヲオコスジュンビマデシ
テイタンダ。ダカラ、ココニトジコメテ、キマイラニクワセルコト
デカズヲヘラシテイタノダヨ…」

「…ざけ…な…」

大虎はもう怒りが頂点に達しているのだろう。

「…ナニカイツタカ？」

「ふざけるなって言うてんだよ!この屑野郎!!」

大虎が鋼虎を前方に突き出した。これは…

「鋼の虎フルメタル・ライガー!! 奴を叩きのめしてやれ!!」

鋼虎の刀身から鋼の虎が現れ、1つ目鬼サイクロプスに向かっていく。しかし、1つ目鬼は片腕で虎を受け止め、頭を握り潰した。

「鋼の虎フルメタル・ライガーが、こんな簡単にやられるなんて……」

「ドウシタ? モウ、オワリカ?」

「く…!!」

「ツマランヤツダナ…デハ、コンドハコチラカライクゾ!」

1つ目鬼サイクロプスは地面を叩き割り、その破片を此方に思い切り投げてきた。

「籠、サクヤ、俺の後ろに!」

俺とサクヤは大虎の後ろに回り込んだ。

「虎ライガー!」

大虎が一声叫ぶと、頭の潰れていた鋼の虎フルメタル・ライガーが俺達の前に立ち、破片から守ってくれている。

「ホウ、ソノトラニハソンナツカイカタモアルノカ…ナラバ!」

1つ目鬼サイクロプスが走ってくる。

「！2人共、虎ライガーから離れるお！」

大虎が言ったが、遅かった。1つ目鬼サイクロプスライガーは虎を掴んで後方へ放り投げ、守りの無くなつた俺達に正拳付きを放つ。

「ぐああああ！」

1つ目鬼サイクロプスの正拳付きをモロに喰らつた俺、大虎、サクヤの3人は豪快に吹っ飛んだ。

「く…そんなのありかよ…！」

大虎が呆れたように言うが、その顔には明らかに動揺の色がでている。俺はある事を思いついた。

「2人共、先に外へ脱出してくれないか？」

「はあ！？なに言ってるんだ龍！」

「融合獣キマイラが出て来た扉を破壊すれば外に出られる筈だ。頼む…！」

「ふざけるな！仲間残して逃げろだ！？そんな事出来るわけ…！」

「分かりました。」

「サクヤ！？お前まで何を！？」

「私は…龍さんを信じます。だから大虎さんも龍さんを信じて下さい」

「俺は嫌だね…誰が何と言おうと…がはっ！」

俺は大虎の鳩尾にパンチを喰らわせた。

「りゅ、龍…てめえ…」

俺の肩を掴みながら、大虎は何か言おうとしたが、気絶してしまっ
た。

「すまない、大虎…こうするしか無かったんだ。サクヤ、大虎を頼
む。」

「はい、龍さん…必ず無事に帰って来て下さいよ」

「当たり前だろ？」

「では、風流刃・鎌鼬！」

サクヤは鎌鼬で扉を破壊し、大虎を担いで外に出ようとしたが、1
つ目鬼サイクロプスが追い討ちを掛ける。

「ニガスカ！」

「！（大虎さんが居るから避けきれない！）」

「お前の相手はこつちだあ！」

サクヤに掴み掛かろうとした1つ目鬼サイクロプスの腕を弾き、間に割って入る。
1つ目鬼が仰け反った隙に、サクヤは大虎を担いで扉の奥に消えて

いった。

「ナゼ、アノフタリヲニガシタ？サンニンナラ、ワタシニカテタカモシレナイゾ？」

「今から使う技はあの2人には魅せたくない。それに、2人に余計な力を使わせないためにもな……」

「マルデ、ヒトリデワタシヲオスト、イッテルヨウニキコエルガ？」

「そう言ったつもりだが？」

「ナメラレタモノダ…シンデ、アノヨデコウカイスルガイイ！」

1つ目鬼サイクロプスが腕を振りかぶる。

「隙だらけだ…極龍劍・龍皇破！」
はしゅうおうけんりゅうこうは

蒼龍の刀身から黒い光が溢れ、1つ目鬼サイクロプスに向かって振り下ろす。刀身から出ていた黒い光が竜の形を成し、1つ目鬼サイクロプスに襲い掛かった。

「ナ、ナンダソレハ！」

「だから言っただろ？“魅せたくない”って」

黒い竜は1つ目鬼サイクロプスの身体の半分を食いちぎり、昇天する。竜の昇天した後には、砕けた天井と蒼い空が小さく見えていた。

「バ…カナ…」

それだけ言つと1つ目鬼は、いや、王は地面に倒れ、ピクリとも動かない。1つ目鬼サイクロプスから元に戻つた王の半体はひんやりと冷たかつた。

本編第4話〈VS野獣〉（後書き）

文章下手すぎる。

文才欲しい……

誤字、脱字あれば指摘お願いします。後、感想も

それではまたお会いしましょう。

番外編（前編）〜神童〜（前書き）

今回短めになってしまいました。

そろそろ龍の過去も語っておかないといけないと思い、書きました。
新キャラ登場します。

龍の親友という設定です。では、どうぞ

番外編（前編）〜神童〜

剣術学校

それは、7歳から15歳までの8年間、刀の使い方を学ぶために、
刀の先代国王つまり霸道剣聖の父、はとうせいこう霸道聖剛が建てた学校である。

- 今から13年前 -

当時7歳だった霸道龍は剣術学校へ入学した。国王の孫であるが故に、クラスメイトから声もかけられず、先生ですら話すことを躊躇ったという。龍はこの状況が嫌いで嫌いで仕方がなかった。

考えてみれば、まだ年端もいかなない子どもが1人で居ることは、相
当な負担を龍に強いていたのだから。

しかしたった1人、龍に声をかけたクラスメイトがいた。それは2
年生になった春のこと…

「君が霸道龍君？」

「！…そうだけど、君は？」

普段から声をかけられることの無かった龍は、驚いた表情を浮かべる。

「僕の名前は雷光…らいこう疾風雷光。はやてらいこうよろしく」

軽い自己紹介の後、握手を求め、差し出された金髪の少年の手を見つめる龍の心には、満たされる様な心地よさがあった。涙が後から後から流れ、頬をつたう。雷光の手をとり、

「う、うん…此方こそ、よろしく」

入学してから2年、龍の孤独は疾風雷光によって取り払われた。その日から、2人は何をするにも一緒だった。

食事や登校時は勿論、剣術の実技試験においても必ず2人はペアを組む程の仲。しかし、刀の腕は雷光の方が上だったらしく、龍は10回やって2回勝つのがやっとだったらしい。

それから4年の歳月が流れ、龍と雷光は13歳になった。2人の剣術は拮抗し、龍は雷光と互角の勝負が出来るまで成長。その技量は>刀<国内でも話題になり、2人が模擬戦をする度に多くの観客が学校を訪れていた。模擬戦の使用武器は木刀で顔を狙ってはいけないというルールにのっとり行われていた。

そして、その年最後の模擬戦…

龍と雷光は向かい合い、互いに笑って魅せた。

「雷光…これで何回目になるのかな？」

「そうだね…僕の記憶では43回目、かな」

「俺の勝率は？」

「^{トータル}総合で15勝28敗」

「俺ってそんなに弱かったっけか？」

「いいや、僕が強いだだけだと思っよ？」

それを聞いた龍の口元が上がる。この上なく喜んでいようだ。

「その口、塞いでやるよ…行くぜ?」

「何処からでもどうぞ」

そして、審判の声。

「それでは、よーい…始め!」

先に飛び出したのは龍。一気に雷光の懐に入り、神速の連続突きを放つ。この連続突きは当時最強と謳われており、龍はこの技で校N0・2に登りつめた。N0・1は勿論雷光であり、その連続突きをもつてしても、雷光には今一步及ばなかった。

龍が攻撃の達人なら、雷光は回避の達人である。雷光は突きを全てかわし、距離をとるために離れようとするが、それを許さないのが龍だ。

雷光が後退するのに合わせて前進し追撃。

「逃がすか!」

「おや?今日は攻め方を変えて来たみたいだね、龍」

木刀を雷光に振り下ろした龍だったが、次の瞬間には雷光が目の前から消えている事に気付き、木刀を両手で持って上に掲げる。

・ドコッ

鈍い音と共に雷光の一太刀を受け止めた龍は後ろを振り返ることなく、続けた。

「やっぱり後ろに回ったか……その立ち回りの速さ、流石だな「瞬王」さんよ」

「この攻撃を読んだ君も似たようなものさ。「先読みの龍」君」「瞬王」や「先読みの龍」というのは、2人に付けられたら通り名である。

雷光はその速さから「瞬王」……そして龍は行動予測が人並みはずれたものだったため、「先読みの龍」となっていた。

龍は掲げていた木刀で雷光の木刀を弾きながら身を翻し、雷光の方へ向き直る。

2人の一連の動作を見ていた観客は、相変わらず歓喜の声を上げている。しかし、2人の耳にはその歓声は聞こえていない。

「さて、ここからが本番だ……次は本気で行くぞ」

「そうしてもらわなきゃ僕が舐められてるみたいで格好つかないよ」

2人が同時に構えをとり、走り出した瞬間……

ズドオオンという音と共に学校の方から火の手が揚がった。

2人が居るのが模擬戦を行うための闘技場であり、学校には誰も居ないのが幸いであった。

「何だ!？」

「学校からだ!龍、行けるかい?」

「誰に言ってるんだ?」

「そうだったね。皆さんは此処を動かさないで下さい!僕と龍で現状

に向かいますから！」

闘技場に集まった観客を留まらせた雷光は龍を追って学校への道を急いだ。

番外編（前編）～神童～（後書き）

この頃から龍の喋り方は大人びているんですね。それはそれで良いでしょう。では、後編で会いましょう。

番外編（後編）〜悲しみの卒業式〜（前書き）

いよいよ後編です。

やっぱり短い様な気がします。どうぞ

番外編（後編）〜悲しみの卒業式〜

龍は一足先に学校へ到着し、激しく燃えている校舎の前で色々と考えを巡らせていた。

「今日は学校には誰も居なかった。先生は全て闘技場に来ていたし…生徒にこんなまねは出来ない。こうなると、部外者の犯行とみて間違いなさそうだな」

「グアアアオオ」

急にうなり声がしたので、龍は振り返った。その目線の先に居たのは真っ黒な身体をした竜。その距離はほぼ密着に近い状態。竜が振り下ろした爪を、龍は避けることが出来ず左眼を斬り裂かれ、後退する。

「く……（左眼をやられたか…しかし、あの距離で俺が気付かないなんて、どんな竜だよコイツ！）厄介な奴が出てきたもんだな」

龍の持つ木刀では、竜に傷を付ける事は出来ないだろう。しかし、ここで逃げれば闘技場のみんなが危ない。龍は木刀で竜に斬りかかる。しかし、その強靱な鱗の前に木刀は一撃で折れ、龍にはなす術が無くなってしまった。

「チツ、ここまでか…」

立ち尽くした龍に巨大な爪が迫る。龍はこれからくるであろう痛みを眼を瞑り、歯を食いしばった。

「…………？」

ところが、その痛みは何時まで経ってもやっつてはこず、代わりに龍の目の前には木刀ではなく真剣で竜の爪を受け止めた雷光が立っていた。

「間に合ったね…………大丈夫かい？龍」

「つたく、余計な事を」

「あ、そういう事言う？君の命の恩人だよ？」

「…………ありがとう。助かったよ」

「君からその言葉を聞くことになるなんてね」

「バカ…お前が言わせたんだろうが」

龍は不機嫌そうに横を向いてしまった。

「龍は下がってて。此処は僕が」

「ま」

「おっと、反論は認めないよ？今の君は“役立たず”と言っても過言ではないからね」

「何だと!？」

「じゃあ逆に聞くよ 素手であの黒竜と戦うつもりかい？」

「ぐ」

どうやら雷光の方が口が回るらしい。龍は何も言えず黙りこくってしまい、拳を握り締めた。

「行くよ “蒼龍”」

雷光は蒼龍を構え、突っ込む。黒竜は容赦なしに攻撃を仕掛けてくるが、華麗ともいえる動きで全てかわし黒竜の腹に到達した。そして、

「必殺剣・蒼天波！」

例のごとく、蒼龍の刀身が蒼い光に覆われた。

蒼天波の当たった黒竜の腹が裂け、真紅の血が吹き出した。雷光は返り血を浴びながらも更にもう一発蒼天波を放つ。

「ギギヤアアア グ オオ オ」

「いくら鱗が堅くても内側に入れば脆いものだなあ」

「俺はまだお前より弱いけど、来年こそは追い付いてみせる」

「待ってるよ」

力無く倒れた黒竜へと視線を移した雷光はあることに気付く。黒竜の口に何かが集まっている。そして、その照準は龍であった。まだ黒竜は死んでおらず、抵抗を試みているようだ。龍は後ろを向い

ている。次の瞬間、黒竜の口からドス黒い炎が迸り、龍を襲った。

「龍！」

とつさに雷光は龍を庇い黒竜に背を向けた。

雷光の背中に黒い炎が突き刺さる。龍は何が起こったか分からずに啞然としていたが、血まみれになった雷光を見て事の重大さを理解した。

「雷 光？」

「君が 無事で 良かったよ」

雷光はその場に倒れ込んだ。

「おい！雷光！」

「へへ 僕の勝ち逃げ かな？結局、君は僕を超えられなかったね」

「逝くな！お前が居なくなったら俺はまた もう、俺を1人にしないでくれ！」

「大丈夫 コイツを僕と違って 持ってる」

そう言って雷光は血に染まった手で蒼龍を龍に渡した。

「少し早いけど、これが 僕から 君への 卒業 証書だよ」

「死ぬな！死ぬな雷光！治療すればまだ」

「僕に分まで　生きて。僕は先に“人生を”　卒業するよ」

「おい！」

「さよなら　龍」

雷光の瞳がゆっくりと閉じ、笑顔でこの世を去った。

「雷光？冗談はやめろ　眼を開けてくれ！」

いくら揺すっても雷光の眼が開くことは無く、龍の頬は大量の涙で濡れた。

「う　う　雷光　雷光おおお！」

叫ぶ龍の後ろでは、黒竜がちょうど起き上がっていた。龍の眼は黒竜を捕らえ離さなかった。

「お前は　お前だけは、許さない！」

龍は猛然と黒竜に向かって歩く。黒竜が爪を振り下ろしてくるが、龍はそれを刀ではなく片手で、素手で受け止めた。雷光に「素手で戦うつもりかい？」訊かれた時は答えられなかったが、今なら答えられる。

「ああ、そのつもりだ！」

掴んだ黒竜の腕を蒼龍で斬り落とし、それを踏み台に黒竜の頭まで

ジャンプ。

黒竜は来させまいともう片方の腕で殴りかかるが、龍は止まらない。もう片方の腕も斬り飛ばし、最後の1撃を放つ。

「これは親友の命を奪った報いだ！必殺剣・蒼天波あああ！」

蒼く光り輝く刀身で黒竜の頭を身体から切断。首から血が噴水のように吹き出し、今度こそ黒竜は息絶えた。その時、蒼龍の刀身には破壊の竜、つまり、黒竜の“力”が宿ったという。

「雷光 お前の願い、俺が受け継ぐ。お前の分まで生きて、そして必ずお前に会いに逝くからな」

- 2年後 -

剣術学校の卒業式。龍を含め卒業式には生徒全員が参列した。ただ1人を除いて……

霸道龍は他の誰にも追撃を許さない成績で学校を卒業。しかし、この場に居る者達は忘れていた。かつて霸道龍よりも強かった少年が居たことを 疾風雷光の存在を。

皆が忘れても龍は卒業するまでの2年間、片時も雷光の事を忘れなかった。いや、忘れてはいけなかった。

雷光によって自分は生かされているのだということ その意味を考える為に。

卒業式が終わり、龍は雷光の墓へと歩みを進める。墓に自分の花束を置く。

「雷光 見てるか？俺、卒業 したぞ。なのに、お前が 居ない」
龍の横顔はどことなく寂しそうだった。これから龍はこの傷を胸に抱いたまま今後を生きてゆく。自分で命を絶つことも考えたが、どうしても出来なかった。

龍に「自分の分まで生きて」と願いを託し、死んでいった雷光の為に、龍は生きなければならぬ。

龍は雷光の墓を後にし、向かうのは模擬戦を行っていた闘技場。いつもなら人の出入りは多いのだが、今日は何故か人1人居ない静かな闘技場だった。

「なんか気味が悪いな」

そう言いつつ、観客席の椅子に腰掛ける龍。龍の脳裏に雷光との模擬戦の思い出が鮮明に蘇ってくる。

「懐かしいな、雷光 ん？これは」

急に濡れた頬を拭くと、その手には一滴の涙。そして龍は自分の身体が震えている事に気付く。

「フ ここまでくると、もう呆れるよ」

今まで何度泣いたことだろう たった1人の親友を無くした少年の泣いた数は計り知れない。もう雷光は居ない。そんな事分かっていた だから

「生きてみせるさ 雷光 お前の為に 俺は死なない」

龍の見上げた空は雲一つ無い晴れ渡った空だったという。

番外編（後編）〜悲しみの卒業式〜（後書き）

番外編終わりです。

最後は龍の視点になってしまいました。黒竜を倒したから龍皇破が使えるようになったんですね。

次から本編に戻ります。では、また会いましょう。

本編第5話〜白銀の夢魔〜（前書き）

今回は大虎の視点です。お間違えの無いように。大虎の幼馴染みが登場します。凄く強いです。女性なのに……では、第6話をどうぞ

本編第5話〜白銀の夢魔〜

「大…さん！大虎さん！」

龍から鳩尾にパンチをもらい、気絶していた俺は、俺の名を呼ぶ声で目を覚ました。眼を開けるとサクヤの顔。

「こ…此処は…」

「城の外です」

「外？…」

見渡すと、空が広がっていた。確かに、外の様だ。

「…！こんな事してる場合じゃねえ！早く龍を…かはっ！」

必死に起き上がろうとした。しかし、先程のパンチが効いているのか、痛みで動く事が出来ない。

「大虎さん！無理をしないで下さい…私達に出来る事は龍さんを信じて待つ、それだけです」

「…くそ！」

拳を地面に叩きつける。自分の無力さに対する怒りと、ただ待つことしか出来ない惨めさで押し潰されそうになる。俺が拳を何回も地面に叩きつけていると、不意に城のてっぺんが砕け、そこから竜？だろうか…何やら黒い物が天に昇っていくのが見えた。

「あれは…竜？」

「まさか、最上級種族の竜があんな所に居るわけ無いじゃないですか」

この世界には人間、動物などの他に上級種族と最上級種族なるものが存在する。

まず、上級種族。

陸に住む1つ目鬼、サイクロプス天に住まう天馬、ヘガサス海に住処とする海竜の3つ。リヴァイアサン

そして、滅多にお目にかかれない最上級種族。竜と不死鳥の2つ。

1つ目鬼は上級種族の中で唯一人語が理解出来るため、昔、人間の戦争に協力させられその数を減らしていき、絶滅したと云われている。尤も、竜と不死鳥に至っては人前に姿を見せないから人語が理解できるかなんて調べようも無いのだが…。

そんな事を考えていると、俺とサクヤが脱出に使った扉から大勢の人達が次々と出てきた。そして、一番後ろには覚束ない足取りで歩いてくる龍の姿があった。

「龍！」

「龍さん！」

俺は痛みを忘れ、サクヤと共に龍へ駆け寄った。

「ちゃんと、生きて…たぞ…」

龍は今にも消えそうな声で言うと、その場に倒れた。

「龍！？おい、龍！」

「大丈夫。気を失っているだけですよ」

サクヤの言葉に心底ホツとした俺は、龍を担いだ。

「早く龍^{コイツ}を休ませてやろうぜ。こんな猛反発枕だらけの寝床じゃ寝れないだろ？」

と言って俺はアスファルトの床を見た。

「フフ…はい」

…その夜…

>アミラスくを救って国民達から讃えられた俺、龍、サクヤの3人は半ば強引に宴へ参加させられていた。しかし、その宴の席に龍は居ない。

「……………」

みんなが騒いでいる中、サクヤだけは相変わらず下を向いている。

「龍の事、心配か？」

そう聞いた途端、サクヤはビクツと一瞬震え顔を上げる。もの凄い速度だった。

「え、あ…はい、ちょっと…」

「行ってやれよ…龍の所へ」

宴のある広場では五月蠅すぎるので、適当な宿を借り、龍を寝室に寝かせていた。

「でも、大虎さんは…?」

サクヤが躊躇って聞くが、ここで「俺も行く」などと言ってサクヤの邪魔をする理由は無かった。

「俺は国民（この人）達ともう少し話してから来るからそれまで龍を診ていてくれ」

「じゃあ、お言葉に甘えて…先に失礼します」

サクヤは申し訳無さそうに立ち上がり、宴の場を後にした。

その後ろ姿を見送っていると、国民の1人が俺に話しかけてきた。

「なあ、あんた知ってるか?」

「何をだ?」

「最近、巷ちまたを騒がせてる奇妙な事件についてだ」

俺はその事件とやらに興味が沸いたため、訊いてみることにした。

「知らないな…詳しく聞かせてくれないか?」

「何でも、眠った人が起きなくなるって話だ」

俺は“起きなくなる”という言葉聞き、思い当たる節があったが、あえて言わなかった。

「それはここらで起こってるのかい？」

「まだ“この国で”起こったとは聞かねえけど、あんた達は旅をしてるらしいじゃないか…忠告のつもりだったんだが、余計だったかな？」

「いや、忠告ありがとう。気をつけるよ」

俺は席を立ち、国民に軽く会釈すると、サクヤと龍の様子を見に宿へ向かった。

>アミラスくの建物はどれもこれも豪華なものばかりだが、俺達の借りた宿は比較的質素だった。暗い階段を登り、寝室の前まで来る。そして、ドアノブに手を掛けようとした瞬間、

「やめろおおおお！」

龍の声らしき絶叫が寝室から、俺の耳をつんざく様に聞こえてきた。

「うおっ！」

龍に何かあったのか？でも、サクヤがついている筈…直ぐ我に返り寝室のドアを開け、部屋に入る。

「どうした！？何が…」

俺が見た時、龍は眠っていて、サクヤは床に座り込んでいた。近くに椅子が転がっているのを見ると、おそらく先程の龍の絶叫に驚いて椅子から落ちたのだろう。

「大虎さん…」

「サクヤ…何があったのか、説明してくれ」

「龍さんが突然絶叫しながら起き上がったと思ったら、また直ぐに寝てしまっただんです」

「やめろ”って、言っただよな？」

「はい…でも、何故そんな事を」

「悪い夢でも視てたんじゃ…まさか！？サクヤ！急いで龍を起こせ！」

「え！？」

「いいから早く！」

「分かりました…龍さん！起きてください、龍さん！」

サクヤが龍の身体を揺さぶるが、龍は動かない。これは…

「マズいな…」

「何が起きてるんですか？」

「最近、寝た人が起きなくなる事件が続いているって話をさっき聞いたんだ」

「それなら聞いた事があります。一度目を覚まして直ぐまた……ま

さか、龍さんは」

「そのまさかの様だな…だが、この事件は奇妙でも何でも無い」

「どづいう事ですか？」

「俺の推測が正しければ、今回の事件には刀が関与している。“夢を喰らう”刀：『獏』がな」

「“夢を喰らう”！？…そんな刀、聞いたこと無いですよ？」

「俺はその刀を見たことがあるし、持つてる奴も知ってる。兎に角、俺は一度>ラムド<へ引き返すけど、どうする？」

「私も行きます。龍さんの夢を取り戻しに…」

それから、俺とサクヤは夜の道を>ラムド<へ引き返した。冷たい夜風が身体に突き刺さるが、気にしている暇はない。

>ラムド<が幸い>刀<と>アミラス<の国境付近にある村だったため、それ程時間を賭けずに>ラムド<へ到着した。

>ラムド<は夜にも関わらず村の再建作業が進められ、村人達が忙しそくに走り回っている。

「どうしてその人が此処に居るって分かるんですか？」

「そいつは俺の幼馴染なんだよ…10年前、獏と共に“奴ら”に連れ去られてそれっきりだったんだ」

「“奴ら”って、まさか…」

俺はゆっくりと頷いた。それがソードハンターだということは言わなくても分かるだろう。当時はソードハンターの存在など知らなかったが、今になって考えると、黒いコートを着ていたことから予測はつく。

「よく2人で遊んだ場所があんだ…もしかしたら、そこに戻ってるかもしれないと思ってな」

並んで話していると、村の外れにやって来た。芝生の中に一カ所だけ石造りになつている床が目に残る。俺はその床を人差し指で軽く叩いた。すると、石の床がずれていき、隠し階段が現れた。

「この間も似たような事ありましたよね？此処が、その幼馴染みさんと一緒に遊んだ場所ですか？」

「そつだ…行くぞ」

最初の質問は見事に無視して2つ目の質問に答える。階段を降りると、刀や盾などの戦闘用の道具が無造作に置いてある部屋に出てきた。

「昔は誰も来ないこの場所でよく遊んだもんだ…!!」

俺の眼は目の前に居た人間に釘付けになった。

銀髪を長くのばしている女性で、身長は高い方だろう。その女性がゆっくりと此方を振り返る。

「麗装…」

「大虎…大虎なの？」

10年間、俺の捜していた姿がそこにあった。彼女は銀麗^{しろがねれい}装^{しやう}。歳は21で俺や龍の1つ上だ。

「やっと見つけた…」

「まさかあなた、10年前のあの時からずっと私を？」

「当たり前だろ？お前が居なくなったら、俺は何を頼りに生きていけばいいんだよ」

「そんなに私の事を？私、今ソードハンターなのよ？」

「だったら、俺達と共に行こう。ソードハンターなんか抜けてな？」

麗装を抱き寄せようとするが、麗装は俺から遠ざかってしまった。

「それは出来ないの」

「な、何故だ!？」

「両親が人質に捕られていて、ソードハンターを続けないと2人の命が。それに私は見張られている。だから此処に隠れてたの」

麗装は猿を抜いて俺に突き付けた。

「ごめんなさい。こうするしかないの」

麗装の綺麗な顔には一筋の涙。それを見ていられなくなった俺は、

「分かった。じゃあ俺が勝ったら、両親の居る場所を教えてください」

「え？」

「お前を泣かす奴らをぶっ潰す」

「私に勝てたらね」

「あの…私はどうすれば？」

横で聞いていたサクヤが疑問をぶっかけてくるが、俺はサクヤを危険な目にあわせたくなかった。

「お前は此处で見ててくれ」

「え　でも」

「はつきり言って、麗裳は俺とお前が力を合わせても勝てるかどうか分からねえ」

「麗裳さんってそんなに強いんですか？」

「ああ、少なくとも俺よりは」

「ならなおさら力を合わせて戦った方が」

「いいからそこにいろ！」

「う…はい…」

その時の俺の気迫によるものだろう…サクヤは圧倒され黙ってしまった。

「さあ、始めようぜ麗装…」

「ええ」

鋼虎を構えた俺は迷わず麗装に真っ正面から突っ込んだ。麗装が猊を鞘に収めつつ避けるのを横目で確認し、麗装の動きに合わせて鋼虎を振るう。ところが麗装は自分から鋼虎に身を寄せ、その刀身を指2本で“掴み”、俺の動きを封じた。

「な…！指で鋼虎を！？（相変わらずなんてセンスしてやがんだ）」

驚いていると、麗装は容赦なく足払いをかけてきた。間一髪跳んでかわしたが、余所見をしていた俺の顔に麗装の正掌付きが会心当たり（クリーンヒット）した。

「ほげえ！」

あまりの痛さに変な声が出てしまった俺は鼻を抑え、膝をついた。

「痛う〜」

「どうしたの大虎…まだ私は刀なんて使っていないわよ？」

「強い…刀を使わず大虎さんに膝をつかせるなんて…」

サクヤの顔には驚愕の色が浮かんでいたが、俺には「大丈夫」と言

える余裕はない。俺が一撃も与えられぬまま片膝をつかされたのだ。昔ならこんな事有り得なかっただろう。

「強くなつたな、麗裳」

「あなたが弱くなつただけじゃない？」

麗裳の冷たい視線が俺に注がれる。しかし、俺にはその視線が助けを求めている様にも見えた。

横で見ているサクヤに「絶対に入るなよ？」と目配せすると、サクヤは真剣な面持ちで頷いた。

「続きを始めましょう…大虎」

「…ああ、そうだな」

今度は麗裳の方から仕掛けてきた。俺は地面を蹴ってその勢いで麗裳の側面に回り込み、首を手刀で叩き気絶させようと試みる。しかし、麗裳は一度此方を見たかと思うと、身体を回転させて手刀を受け流し、それと同時に宙に浮いた右足で俺の頭にかかと落としを決めた。

「か…はっ！（ソードハンターのコートを着ているのにこの速さかよ…）」

反応出来なかった俺は勢い良く顔を地面に叩きつけられた。

「……私の体術の強さを忘れた訳じゃないわよね？」

「…つたりめーだ…なんでその綺麗さでそこまで強いのかねえ？」

そう…麗裳はかなり美人な方だ。道行く人々が必ず振り返るといっていい程。それ故に麗裳の美貌と体術は嘘だと思っくらいギャップが強い。

「これで終わりよ」

麗裳がやっと刀を、獏を抜いてくれた。

「幕引きにはちょうどいいタイミングだな」

「いつの間にそんな言葉覚えたの？」

「つい最近、な…」

麗裳と俺は同時に走り出した。麗裳の突きが迫るが俺は……受けることにした。

「！」

「ぐ…こいつぁ、痛てえな」

「何故…」

「しっ…このまま静かにしてろ…大剣獣・鋼の虎！」
フルメタル・ライガー

痛みに耐えながら、麗裳の後ろの壁に向かって鋼の虎を走らせた。すると、

「ぎゃああ…」

壁が崩れ、如何にも敵キャラらしい悲鳴を上げて中から人が出て来た。気絶してるのか…？

「どうして分かったの？」

俺は腹に刺さった獏を抜き、麗装に手渡しながら自分の推測を語った。

「お前が“此処に隠れてる”って言った時、思ったんだ。隠れてるなら俺に刃を向ける必要は無いから、どっかに監視してる奴が居るんだろうなって…それに、お前が一度だけその壁を見たる？何より眼が助けてって言ってたからな」

「…ありがとう！」

抱き付いてきた麗装を受け止めきれず、俺は押し倒されてしまった。

「お、おい！……まあ、いいか」

赤くなっているサクヤを後目に俺と麗装は暫くの間、抱き合っていた。そして、“あの事”を言ってみる

「なあ、その獏の能力を解除してもらえねえかな？」

「どうして？」

「俺の仲間が獏に夢喰われてるだよ」

「了解…静まる悪夢…スリープ・ナイトメアこれで解けた筈よ」

「ありがとな…それと」

「分かってる…両親の場所でしょ？」

「ああ」

「確か…>アミラスくの宿の地下にアジトが在って、そこに2人共居るって話を聞いたような…」

「地下、好きだねえ〜ハンターもどこぞの王も……！待てよ…麗袋、今どこにアジトが在るって言った!？」

「え…>アミラスくの宿の地下だけど」

「サクヤ!>アミラスくに行くぞ、急げ!」

「え?どうしてですか?」

「>アミラスくの宿の寝室には誰が寝てる!？」

「!龍さん!」

本編第5話〈白銀の夢魔〉（後書き）

タイトルと文体合ってませんね。しかも何か同じような文章ばかり使ってるし…（涙）

自分の文才の無さにうんざりします。最上級種族はこの後の話で使う予定はありません。

では、またあいましょう。

本編第6話「力の差」（前書き）

文章がやっぱり下手。だから、ポイントも付かず、感想もないんですよ。では、駄文をどうぞ？

本編第6話「力の差」

大虎とサクヤが麗装を仲間に加え、>アミラスくへ引き返している
ちよつどその頃。

・>アミラスくの宿・

「おい、本当にこの部屋に報告のあった剣士が居るのか？」

「ああ、間違い無い。この部屋だ」

龍の眠る寢室の前には、何やら怪しい人影。黒いコートを着ている
事からソードハンターだろう。

「確か、アイツは今夢を喰われて起きない筈。捕らえて連れて来い
と、ソルディアス様の命令だ」

ソルディアスという名前を聞いた瞬間、ハンター達の顔が強張った。

「そ、それはミスっちゃいけねえ」

「ああ、失敗したら俺達まで…殺されちまう」

「いいか？セーので一気に行くぞ……せええのおお！」

3人のハンター達は寢室のドアを突き破り、ベッドに刀を突き刺し
た。“白”がみるみる“紅”で染められて、真っ赤なベッドへと早
変わりした。

「よし！やった……」

「とでも思ったか？」

ハンター達は後ろからの声にギョツとして振り返ったが、その瞬間、蒼い光。

「蒼天波！」

轟音と共にハンター達は吹き飛ばされた。

「残念だったな……ハズレだ」

「そんな筈は…確かにベッドが紅く……！」

龍はベッドに歩み寄ると布団を剥ぎ取る。ベッドの上には裂けて紅いインクが飛び出したビニール袋が置かれていた。

「ほらな？……大体、刺したときに手応えが無かったの、分からないかったのか？」

龍は呆れた様な顔をしてハンター達に疑問をふっかけた。

「い、いや……何かおかしいと思ったけど」

「まあいい……それより、このまま俺と戦つか？」

「あ、当たり前だ！このまま帰ったらソルディアス様に……あ！」

思わずその名前を言ってしまったハンターは慌てて口を抑えるが、龍がそれを聞き逃すはずが無い。

「誰だ？そのソルディアスってのは……」

「く……！此処は一旦退くぞ！」

ハンター達はそれだけ言うと、一目散に寝室から走り出てしまった。

「何だったんだ？アイツ等……そんな事より、ソルディアスって……誰だ？」

龍が言った時、開いたままのドアから大虎が必死の形相で駆け込んできた。息が荒い所を見ると、相当走ったのだろう。

「龍！無事か！？」

「ああ、大虎にサクヤと……そっちの綺麗な人は？」

「麗装って言うんだ。俺の幼馴染み」

「初めまして、霸道龍君」

「こちらこそ。しかし、大虎には勿体ない程の美人じゃないか」

「何！？……ってそんな事じゃなくて！」

「ハンターなら来たぞ……俺を殺りにな」

「！……すまねえ……俺達がもっと早く着いていれば」

「“着いていれば”？……何処へ行ってたんだ？」

「>ラムド<へ戻ってたんだ…お前が起きなかった原因を調べに」

「そうか…苦勞をかけたな」

そう言うと、龍は大虎達に深々と頭を下げる。

「な、何だよ…かしこまって、調子狂うな」

大虎はくすぐつたい思いでポリポリと頭を掻き、苦笑した。

「とにかく、龍さんが無事で…良かった」

口を開いたサクヤが涙目になりながら龍に言う。龍もそれに答え、

「すまなかったな……サクヤ」

「麗裳、2人だけにしておこうぜ」

「ええ」

普段ならこんな事は言わない大虎だが、今回は何を思ったのか気の利いた台詞。そして、龍とサクヤを残し、麗裳と共に寢室を出た大虎はハンターのアジトを探し始めた。

地下に在るなら、その地下へ行くための方法が必要な筈である。大虎は暫く床や壁を調べていたが、何も見つからずお手上げの様だ。

「何処に在るんだよ！アジトへの行き方が全然分かんねえ……」

麗裳は暫く大虎の様子を遠くから見つめていたが、大虎が突然本棚の前で立ち止まって黙り込んでしまったのを疑問に思い本棚に近寄った。

「どうしたの？」

「なあ、この本」

大虎は棚の中段あたりにあった本を指差した。その本は他の本より少し前に出ている。

「もしかしたら……麗裳、さがっててくれ」

麗裳が無言で頷き、後ろへ退くのを確認した大虎はその本を棚へ押し入れた。すると、カチツという音がして本棚が横へずれていき、下へと続く階段が現れた。

「こんなばっかりだよな……最近」

「とにかく、行きましょう」

麗裳の言葉に背中を押され、大虎が階段を降りようとした時、

「待てよ、大虎。それに麗裳さんも……俺達をおいていくのか？」

「龍（君）！？いつから其処に？」

大虎と麗裳は声を合わせた。

「ついさっきだ。物がずれる音がしたがら来てみた」

「私には全然聞こえなかったのに、龍さんが部屋を出て行ったからついて来てみたんですけど、まさかこんな所に……………」

龍の後ろから顔を出したサクヤが納得した様に言った。

「ビンゴ…ってやつかな？」

「そつらしいな…………じゃあ、行くぞ。龍、サクヤ、はぐれるなよ」

「この一方通行で誰がはぐれるって？」

……………

「…………おい龍、俺達何でこんな事になってんだ？」

「さっぱり分からん」

大虎、麗裳、龍、サクヤの4人は降りていた階段がいきなり崩れ、前も後ろも分からない真っ暗な空間に放り出されていた。

「サクヤ、麗裳さん、居るか？」

「ええ、大丈夫」

「怪我はしていません」

龍は、比較的近くから聞こえたサクヤと麗裳の声に安堵の息を漏らし、頭に浮かんだ予測を整理する。

「これはハンター共の仕業、かな」

「何か仕込んでたつていうのか？」

「私も分かったわ。何段かに亀裂が入っていたから」

「でも、亀裂くらい何処にでもあるものじゃないですか？他の段にも入っていたかもしれませんし……」

「そこだ」

龍がサクヤの言葉を遮るように言う。

「え？」

「全ての段に亀裂を入れて脆くし、俺達が落ちる様に仕向けていたとしたら、どうだ？」

「！まさか……」

「その通り……俺達が此処を見つけて入ってくる事を読んだ奴が居るってことになる。少なくとも俺を襲った3人の中には皆無だな」

すると突然、目の前（だと思っ）からパチパチと手を叩く音が聞こえてきた。龍達4人は警戒態勢に入っている。

「素晴らしい。流石「先読みの龍」ですね」

「誰だ！何処に居る！？何故俺の昔の異名を知っているんだ！！」

「私の名前はソルディアス・リブラスエード…ハンターの幹部で、今はあなた方の目の前に居ます。そして、あなたの昔の異名を知っているのは、当時あの闘技場に模擬線を観に来ていたからです。他に質問は？」

「……（コイツがソルディアス…まさか、幹部だったとはな）」

本来なら「一度に質問するな」、という言葉が返ってくるのだが、こつも簡単に答えられてしまうとは思わなかった龍は一瞬言葉を詰まらしたが、直ぐに次の言葉を見つけ出す事に成功した。

「……幹部ということは、俺達の刀を奪いに来たということだよな？」

「ご名答……そういうわけで、あなた方の名刀を渡してください」

「誰が渡すか！秘剣・大獣爪！」

大虎は見えない筈の空間で一辺の迷いもなく大獣爪を創り出し、ソルディアスが居るであろう方向に走り出した。

- ギシイ -

「なっ！嘘だろ！？俺の大獣爪を素……」

鈍い音がしたかと思うと、大虎の言葉が途切れ、ドスツ…と、何かが肉に食い込む嫌な音がした。背筋に悪寒が走った龍は蒼龍を抜き、自然に身体が臨戦態勢へと移行する。

「黒斬大虎……“今は”あなたに興味は有りません。私の目的は、
霸道龍……あなたなのですから」

「チツ……（何故大虎の鋼虎を奪わない？そんなことより……戦うに
しても、ソルディアス（アイツ）の姿が見えないんじゃないや戦いようが
無い。大虎も心配だ……此処は）蒼龍四の方・紫龍閃！」

「！」

龍の放った紫色の閃光は壁を突き破り、真っ暗な空間に光を届けた。
光に照らされ、血にまみれ横たわる大虎の姿が龍の眼に飛び込んだ。

「……麗裳さん、大虎を」

「ええ、分かった」

大虎から視線を移した龍の前には、男が立っていた。肩まである白
髪、肌は白く、喋り方は紳士的だが、それとは裏腹に真っ黒な瞳が
何処か陰気な印象を与える。

「お前のその“眼”は何だ？暗闇でも見えるのか？」

「……これは鋭い……よく分かりましたね。この眼は“暗闇の眼”と
いいまして、暗闇“でも”見える眼なんです。黒斬大虎も同じ様な
眼を持っていたので、先に排除したのですが……」

「もうお前の強みは無くなったわけだ。対等な戦いが出来る」

「この程度で私と対等だと考えているのですか？不遜な事ですね」

「試してみるか？」

「良いでしょう…かかってきなさい」

龍は素早くソルディアスの後ろに回り込むと、蒼龍の刀身に蒼い光を纏^{まと}わせ、振り下ろした。

「蒼天波！」

「……やはり、この程度」

「ギシィ」

「!？」

ソルディアスは振り向きざまに蒼龍の刀身を鷲掴みにし、そのまま龍を投げ飛ばす。壁に激突した龍は何が起こったか分からないという様な顔になった。それも当然。ソルディアスが刀身を掴んだ瞬間、蒼天波が消えたのだ。

「蒼天波が……ゴルディールの時みたいに…消えた!？」

よく見ると、ソルディアスの腕は鋼で武装^{コージェイキング}されており、各所に血の跡が見受けられる。

「あんな輩と一緒にしないで頂きたい。この鋼は“^{フレイニング・メタル}吸収鋼”……中途半端な攻撃ではビクともしません。ゴルディールの吸鬼と違って」

「（蒼天波が効かないなら、紫龍閃も無理そうだな。となると“あれ”を使うしかない、か）…ならもつと強い攻撃はどうだ?……極

龍剣・龍皇……」

そこまで言いかけた時、突然ソルディアスが目の前に現れ、手刀を振り抜いた。蒼龍の刀身は折れて宙を舞い、地面に突き刺さる。

「！そ、そんな……蒼龍が……」

「龍皇破は“まだ”使ってはいけません。雷光君には悪いですが……あなたが龍皇破を完全にコントロールできるまで、蒼龍はお預けです
すね」

「！雷光の事も知ってるのか!？」

「ええ……しかし、それはまた次の機会に。……手に入れる筈の名刀を壊してしまいましたが、まあいいでしょう。あの王も少しは役に立ったということ……さようなら、霸道龍」

ソルディアスは龍の身体を斜めに斬り裂いた後、大虎と同じ様に腕を腹に食い込ませ、引き抜いた。

「かつ……は……！（俺は……また負けた。刀も使っていない相手に、こんな簡単に……ゴルディールなんかよりよっぽど強い……これがソルディアスとの力の……差……）」

薄れていく意識の中で龍が見たものは、何事も無かったように去って行く、ソルディアスの後ろ姿。龍は実質、2度目の敗北を喫したのであった。

本編第6話「力の差」（後書き）

毎回おんなじ事の繰り返しのような気がします。申し訳ありません。感想等待着つてます。

本編第7話「不規則な力（イレギュラー）」（前書き）

更新遅くてすみません。やっと一番語りたかった事が書けました。
でも、ちよつと短かいです。

最後は、再びあの人が登場します。ではどうぞ

本編第7話「不規則な力（イレギュラー）」

この世界には、“不規則な力”^{イレギュラー}という、人知を超越した力が存在する。才能云々（うんぬん）の問題ではない。訓練して身につけられる様な代物でも無い。ある日突然、“稀に”^{イレギュラー}開花し、その能力を^{ちから}使うことが出来る。しかし、“不規則な力”^{イレギュラー}の開花率は五分五分。普通の人間にとっては開花しない方がいいのかもしれない。“不規則”^{イレギュラー}を持つ者は、人として見られなくなる事が多く、妬み嫌われる。だがその一方で、戦いなどの場面では頼られる事が多い。開花する能力は人により様々で、必ずしも自分の役に立つものではなく、不安定。故に“不規則な力”^{イレギュラー}である。

「く……眼が……!!」

ソルディアスとの戦いに敗れた龍は、>アミラスくでの休養を余儀なくされていたが、急な眼の痛み^{うな}に驚^{うな}されていた。しかも、痛むのは13年前、あの黒竜に斬り裂かれて以来開く事の無かった左眼である。

「大丈夫ですか？」

看病しているサクヤが心配そうに見つめるが、龍は平静さを保ち、サクヤに尋ねた。

「ああ、俺の事はいい。それより、大虎は……」

「麗袋さんが別の部屋で看病してます。心配無いと思いますよ?」

「そうか……それにしても……くっ!また、眼が……」

龍は左眼を抑え、悪態をついた。

「ひよっとして、“不規則な力”^{イレギュラー}でしょうか…？」

サクヤが何気なく言った一言に龍は一種の納得を覚えた。“不規則な力”^{イレギュラー}が開花しかけているのかもしれない。

「だから、左眼（この眼）が痛むのか」

「あくまでも推測ですけどね」

「龍の“不規則な力”^{イレギュラー}か……見てみたいもんだな」

声と共に龍の部屋へ入って来たのは、麗裳に肩をかりた大虎だった。

「大虎……お前は“不規則な力”^{イレギュラー}が使えるのか？」

「ああ、俺の“不規則な力”^{イレギュラー}は『闇の司者』^{ブラックレス・オペレーション}。闇を操る事が出来る」

「……規模が大きすぎてしっくりこないな」

「闇は引力だろ？簡単に言うと“吸い込む”だ。例えば、ほら」

言って大虎は、部屋の壁に軽く手を触れた。すると、壁が黒く染められていき、大虎の掌に消える。染められて吸い込まれた部分に丸く穴が空いていた。

「……この“不規則な力”^{イレギュラー}はソルディアスと向かい合った瞬間に開花したんだ。ソルディアスの眼に反応したんだろっな」

「不利デメリットは無いのか？」

「当然有るさ。あまりに使い過ぎると自分自身が闇に飲み込まれてこの世から断絶され、自分の力では戻れなくなるんだ」

不安そうに語る大虎に、龍とサクヤは息を飲んだ。それでは不利デメリットが大き過ぎる。

「まあ、気にするなよ。使わなきゃ良いだけだ。お前達が心配する様な事じゃねえよ」

不安な顔から一変。明るく振る舞う大虎に龍は心苦しくなった。

「本人がそう言ってるんだから、大丈夫よ。きっと」

麗裳の言葉に黙って頷くと、龍は自分の“不規則な力イレギュラー”について考えた。

「（俺の“不規則な力イレギュラー”もそんなものなのか？）」

「他にも…覆う、なんて事も出来るけどな」

「覆う？」

「相手の視界を黒で覆うことが出来る。覆われたら、何も見えなくなる」

「色々な用途があるんだな…ところで麗裳さん、あなたには“不規則な力イレギュラー”はあるんですか？」

「ええ……私の“不規則な力”は『タイム・イーター』^{イレギュラー}と違って、対象物に事象が発生した“時”を喰らい、その事象を破壊する事が出来るの。対象物といつても、人間にしか効かないけどね」

「まるで神だな……」

「あら、そうでも無いわよ？^{デメリット}不利無しで使えるのは1日につき2回まで。3回目は自分の寿命を代償にして発動させなければいけないの」

「でも、とてつもなく強い。そうだろ？麗裳」

大虎が麗裳をフォローした。確かに無敵である。使いどころを見極めればだが……

「ええ、私の『時喰』^{タイム・イーター}は“不規則な力”^{イレギュラー}の中でも、事象干渉系だから」

「事象干渉系？」

「ああ、“不規則な力”^{イレギュラー}にも系統があるんだ。俺の『闇の司者』^{ブラックレス・オペレーション}は物質操作系の部類に入る。事象干渉系は“不規則な力”^{イレギュラー}の最高峰と言えるな」

「私の“不規則な力”^{イレギュラー}は確か……『加速』^{アクセラレート}だっただと思います。身体強化系の“不規則な力”^{イレギュラー}で、自分のあらゆる行動の速度を速くする事が出来ます。だから、使用者からすると周りが遅くなった様に見えるんです」

「サクヤも持ってたのか……！待て……「だっただと思えます」？……どういう事だ？使ったことは無いのか？」

「はい。でも、私の父が教えてくれました。父の“不規則な力”は『クリア・アビリティ力の解明』。『イレギュラー不規則な力』の事なら何でも分かる能力ちからでしたから、私の、これから開花するであろう“不規則な力”イレギュラーを予言してくれました」

「俺の“不規則な力”イレギュラーも見てもらいたいものだな」

「あ……その……父はもうこの世には、居ないんです」

「まさか……ハンター達が>オラルくを滅ぼした時に？」

「はい……私を守って、亡くなりました」

「済まない。嫌な事を思い出させてしまったな」

「いえ、大丈夫です。父の死を無駄にしないためにも、ハンターを倒さなきゃいけませんから」

サクヤの力強い言葉に、自然と身が引き締まる3人であった。

- ??? -

そこは、暗く広い空間。但し、1つだけ灯りが点いており、その光が照らす先には、玉座だろうか……かなり立派な装飾を施した椅子がある。そこに座っているのはソードハンターの黒いコートを着た男。

「ソルディアス」

「はっ… お呼びでしょうか… シリウス様」

カツカツと音を立てて、シリウスと呼ばれた人物が座る玉座に歩み寄ったのはソルディアスだ。ソルディアスは片膝をつき、頭を垂れる。

「メビウスは、どうしておるか？」

「相変わらず、ハンターの情報をかぎまわっていらっしやる様です」

「フ… あやつが何かしたところでどうということはないが、自分の息子に組織をかぎまわられるというのは、いささか気分が悪いな」

「処分致しますか？」

「まだよい。泳がせろ… それと、霸道龍達も同様にな」

「分かっております。では…」

ソルディアスは立ち上がると、玉座の間を後にする。玉座の間を出たソルディアスに話しかけてくる人物がいた。

「次は俺が出ようか？ソルディアス」

「ジーク… いや、あの方の元にはユーリを向かわせた。私の読みが正しければ、メビウス様があの方に接触される頃だ」

ジーク・ドラゴニアス。ソルディアスと並んでソードハンターのトップ3に入る強者である。短い黒髪に綺麗な顔立ちは、とても強者には見えない。

「いつもながら、頭は良いな。しかし、以前仕えた人の息子をあそこまでボロボロにしなくてもよかつたんじゃないのか？下手をすれば死ぬ程の重傷だ……」

「見ていたのか……あの程度で死んでもらっては困る」

「ならあんな事すんなって……じゃあ俺は寝る。出番が来たら呼んでくれ、参謀長さんよ」

「……………」

ジークの言葉には答えず、ソルディアスは黙ってその後ろ姿を見送った。そしてその背中が見えなくなる。

「……………その名で呼ぶな」

ソルディアスはジークから参謀長と呼ばれ、いつもからかわれている。こんな事が出来るのはソードハンターの中でもジークだけである。

「それはさておき……あの方の“不規則な力”はまだ開花してない。その役目は私にある様だな」

ソルディアスはそんな事を呟き、廊下の奥へと消えていった。その言葉を聞いている者は居るはずもない。

本編第7話「不規則な力（イレギュラー）」（後書き）

どうでしたでしょうか……龍達はチート軍団なんですね。自分で書いて“これはセコい”と思いました。

感想あればお待ちします。

本編第8話〈新たなる道〉（前書き）

ハンターの目的が判明し、新キャラが登場します。

では、ごきげん

本編第8話 新たなる道

「蒼龍……」

龍はベッドから起き上がり、自分の刀の事を考えていた。ここは>アミラス<。ソルディアスに敗れた龍と大虎が休養の為に留まっている大国である。

「ごめんな……俺にもっと力があれば、お前をこんな目に遭わせずに済んだ筈なのに……」

あの日……7年前、唯一の友だった雷光が死んだあの日から相棒としてどんな時も共にあった蒼龍に謝罪を述べ、折れた刀身を力一杯握り締めた。まるで、自分を戒めるかのように……。

「……」

龍の手から鮮血が流れ、床にポタポタと音を立てながら広がっていく。

「この痛みより、お前の方が余程痛かった筈だよな……」その後、部屋に入ってきたサクヤに無理矢理手を包帯で巻かれ、出血多量になるところを免れた。

「どうして刀身を掴む（あんな）事をしたんですか？ 一歩間違えれば……」

「分かっている。でも、蒼龍に申し訳が立たなくてな」

その言葉を聞き、サクヤが不意に立ち上がる。そして龍に真剣な眼差しを向けた。

「そんなので蒼龍が喜ぶと思いますか？」

「！」

「今の龍さんに必要なのは、前を向いて歩き続ける事、今を生きる事じゃないんですか!？」

「サクヤ……」

「償いは何時でも出来ますが、命には代えられないでしょう? 蒼龍だって、龍さんに生きてほしい筈です……」

「……」

「あ、ごめんなさい……ちょっと、口が過ぎました」

サクヤが慌てて口元を抑える。

「いや、良いんだ。おかげで目が覚めたよ……ありがとう、サクヤ」

「い、いえ……」

サクヤは照れ隠しをすることもなく、“照れていた”。

「話は纏まとまったのか？」

突然、ドアを開けて入ってきたのは大虎と麗裳。龍はそれに驚くこ

とはしなかった。

「ああ…俺達は進む。前に、な」

「そうと決まれば、早速ハンターのアジトを探しましょう。この付近にも、いくつかが在る筈だから」

「その必要は無いよ」

「！」

不意に聞こえた、龍でもサクヤでも大虎でも麗裳のものでもない声。振り向いた先には、少女が立っていた。歳は10代前半といったところだろうか。

「誰だい？君は」

「私はユーリ…ユーリ・ハドレシアって言うの。よろしくね」

「ユーリ!？」

麗裳が驚愕の色を露わにし、もう一度ユーリの名を呼ぶ。

「麗裳さん、知ってるのか？」

「彼女は……ユーリは、ハンターの幹部よ」

「何!？」

「一度だけ、話したことがあるわ……」

「久し振りね…麗裳」

「あまり表に出て来ない貴方が、何の用かしら？」

「あの人はまだ来ていないようね……“今は”あなた達を見に来ただけ…じゃあね」

「お、おい！」

大虎の呼び掛けを無視して、ユーリは寝室から姿を消した。

「幹部が出てくるとはな……しかもあんなに小さい子が幹部なんて」

「ユーリの強さは本物よ。あなた達が、いえ、正確には龍君が倒したゴルディール・ロルカノフより強いかも」

「かもじゃないよ。強いんだ……ユーリは」

「！」

またもや4人以外の声。茶髪の癖っ毛で、紫色をした瞳が印象的な青年が、寝室のドアの前に立っている。

「またお客さんか…？お前は誰だ？」

大虎がうんざりしながら質問するが、青年は質問を無視して龍の方を向いた。

「やあ。去年以来かな…龍」

「メビウス…なのか？」

「他の誰かに見えるかい？」

「龍、知り合いか？」

「ああ…彼は」

「おっと、いいよ龍…自分でやるから。僕はメビウス・ザ・シユラーク。龍の友達だよ」

「え、ええええ！シユラークって、まさか…」

サクヤが大声を上げる。が、場の空気を読まなかったせいか頬を赤らめ、静かになった。

「そう…メビウスは「伝説の剣士」^{ソードマスター}の1人、シリウス・ザ・シユラークの息子で、俺が剣術学校を卒業してから初めての友達だ。」

「でも、そんな凄い人と、どうして龍君が知り合いなの？」

「麗裳、知らないのか？ソードハンターだったのに…龍の父親も「伝説の剣士」^{ソードマスター}の1人なんだぜ？」

「え！？じゃあ霸道って」

「そうだ…龍の父親は、>刀<の現国王で「伝説の剣士」^{ソードマスター}の、霸道剣聖。つまり、龍は「伝説の剣士」^{ソードマスター}の息子兼>刀<の王子って事だ」

「初耳…ね（です）…」

「ハハハ、そういえば話してなかったな」

サクヤと麗袋の息の合いように思わず苦笑してしまう龍。

「状況が状況なら、話す事も出来ない相手ね」

皆が話で盛り上がっていると、メビウスが場を制する。そして、

「龍、単刀直入に言う。僕も君達の仲間に加えてくれないか？」

「どういう事だ？」

「ソードハンターを倒して、あの馬鹿親父を止めたいんだ」

「まさか…ハンターのボスって」

「僕の父、シリウス・ザ・シュラク。父を止めるために力を貸してほしい」

「しかし、俺の父さんは5年程前に「伝説の剣士」ソードマスターが滅ぼしたと言っていたが」

「最後の詰めをやったのは僕の父なんだ。倒した風を装い、残党を匿って復興の時を狙っていたらしい」

「そういう事だったのか…：分かった、力を貸そう。俺達の目的もハンターを倒す事だしな。みんな良いか？」

「OKだ。戦力は多い方がいい」

「それにメビウス君が何らかの情報を持つてるかもしれないものね」

「ありがとう、これから宜しく……ああそれと、みんなには僕の“イレギュラー不規則な力”を紹介しておきますね」

そう言うとメビウスは一瞬で龍の姿へと“変わった”。

「コイツはすげえ」

大虎が感心した様な声を上げて龍の姿に変身したメビウスへ歩み寄った。

「僕の“イレギュラー不規則な力”は『メタモルフォーゼ突然変異』。身体強化系で、見たものになら何にでも変身する事が出来る」

「一度見たら良いのか？」

「まあね……なら、これはどうかな？」

「！ソルディアス……」

今度はソルディアスの姿へと変わるメビウス。それを見た龍の眼が怒りに燃えるが、今はどうすることも出来なかった。冷静さを取り戻し、

「メビウス……お前、ハンターの情報を持つてるよな？」

メビウスに情報提供を求める。

「そうだね……まずは奴らの目的から話そう。ソードハンターは名
刀の力を使って五元の竜を呼び覚まそうとしてるんだ。」

「五元の竜？」

「地上、天空、海洋、冥界、そして天界を統べることの出来る最強
の竜んだけど、地、天、水、破壊、創造を司る5匹の竜の力によ
って封印されていたんだ。しかし7年前、破壊の竜が何者かに倒さ
れ、封印のパワーバランスが崩れかけている。ハンターはそこを狙
っているみたいだね」

「！破壊の…竜…」

「何か知ってるね？龍」

「7年前にその竜を殺^やつたのは……他でもない、この俺なんだ」

「おい龍、それは本当か？」

「ああ…親友を殺されて、何も見えなくなった俺は気付いたら、そ
の竜の頭を吹き飛ばしていたんだ」

自分を凝視する大虎に、龍は目を合わせようとしなかった。

「仮にそうだとしても、可笑しいわね。最上級種族の竜が人里に出
て来るなんて…」

麗裳が考え込んでいるが、その沈黙を破ったのはメビウスだった。

「誰かが差し向けた、としたらどうか？」

「そんな事出来る奴が居るってのか？」

「まだ分からないけど、それ以外可能性が無いのも事実じゃないかな……竜が好んで人前に来るわけがないからね」

「確かに……そうだけだな」

「その話は後々考えれば良さ……他に情報は無いのか？」

「幹部は全部で7人居るらしい。ゴルディール・ロルカノフ、ソルディアス・リブラスエード、ユーリ・ハドレシア……僕が知ってるのはこの3人。後の4人は見たことが無いんだ。その証拠に『メタモルフォーゼ突然変異』でも変身出来ない」

メビウスが一通り話し終わると、ユーリへと話題が移行していった。

「ところであのユーリって子、見に来ただけって言ってましたよね？」

「次は何か仕掛けてきそうだが、メビウス、お前はどう思う？」

「さあね……あの子は近くに居ても全くと言って良い程何を考えてるか分からないんだ……！？みんな伏せる……！」

メビウスの合図で全員が床に伏せる。その瞬間、何処から現れたのか、無数の刃が宿の壁を串刺しにした。

「……………」

「これは……間違いない、ユーリの刀『連刃』だ」

「当たたり、流石メビウスだね。まあこのくらいは避けきれると思ってたけど」

穴だらけになり、崩れ落ちた壁の向こうから聞こえる少女の声。

先程寝室に来ていたユーリ・ハドレシアである。

「見に来ただけじゃなかったのか？」

“今は”って言ったに聞こえなかったの？

大虎の問いにユーリは淡々と答え、連刃を構えた。

「僕が引き受ける。だから、みんなは此処から離れて」

その言葉を聞いた瞬間、龍にはメビウスと雷光の姿が重なって見え
てしまった。離れていくメビウスの背中を見つめながら、龍は思う。
「また、俺を1人残して去っていくのではないか」、と……

本編第8話〈新たなる道〉（後書き）

次は、戦闘になります。

番外編もそろそろ新しいのを考えなければ…

感想あればお待ちしております。

本編第9話「痛み」(前書き)

最近、本人視点じゃなくなっていますね。
まあ良いでしょう。

では本文をどうぞ

本編第9話 痛み

龍達の避難後、メビウスとユーリはしばしの間、無言で見つめ合っていた。

「手合わせするのは初めてかな？」

「かもね。楽しくなりそ」

「油断してると足元掬われると思うけど？」

2人の両脚に力が入る。

「それなら…心配ないわよ！」

「どうかな！」

風をきつて走り出すユーリとメビウス。先に仕掛けたのは、ユーリだ。刀身の短い連刃を片手に持ち、確実にメビウスの急所へ突きを繰り返す。だが、メビウスはそれを全て紙一重でかわし、一瞬の隙について自分の刀を抜き、ユーリの肩を斬りつける。

「……………」

ユーリの肩から紅い液体が降り、手をつたって地面にパタパタと落ちていく。だがユーリは傷口を抑えようとはせず、顔色1つ変えない。

「（えらくあっさり一撃を加える事が出来た……でも）」

「やるじゃん」

「どうも」

「でも、これはどうかな？連刃乱槍！」

ユーリが連刃を前へ突き出す。すると、連刃の刀身が増えていき、勢いよくメビウスに向かって伸びてきた。

「成る程これは凄い……じゃあ僕もこの刀、『桜火』を使わせてもらおうかな」

メビウスが桜火と呼ばれた刀を両手で持つ。

「火炎舞闘！」

桜火の刀身から無数の炎の触手が現れ、連刃乱槍に走っていった。触手と連刃乱槍がぶつかり合い、相殺。この結果にユーリは納得いかない様子で顔をしかめた。

「私の連刃乱槍が相殺、か……ちよつと、悔しい。じゃあ今度はこれ！連刃乱槍・跳遠拡！」

先程の連刃乱槍が伸びる。そして刀身がメビウスの周りで屈折を繰り返す、メビウスを刃が取り囲む形になる。

「これは、マズイ……かも」

「どう処理する？」

メビウスを取り囲んでいた刃が迫り、地面に突き刺さる。

「あらら……もしかして、死んだ？」

ユーリが少々心配気味に言うが、

「いや、まだだよ」

メビウスの声。その声はユーリの後ろから聞こえてきた。

「！」

反応出来なかったユーリはメビウスの攻撃を避けられず、横腹を桜火で貫かれてしまった。

「いつの間に、後ろに……？」

「君が連刃乱槍を放った時あたりかな」

「え？……だつてさっきまで私と話してたでしょ？」

ユーリは横腹に刃が刺さったまま、淡々と質問をする。

「僕の“不規則な力”は『イレギュラー』イレギュラーは『突然変異』メタモルフォーゼ。でも、この『突然変異』メタモルフォーゼにはもう1つ能力があつてね。」

「もう1つ？」

「プラス・アバター分身変異”……自分の分身を突然変異で創る事が出来て、その分身には僕の意味が反映されている。君は連刃乱槍を使うと、刃数

の多さで僕の姿を捉える事が出来なくなる。違つかい？」

「確かに……その通りだけど」

「だから僕は、火炎舞闘で連刃乱槍を相殺しているときに地面に変異して、機会を伺ってたつてわけ」

「それでさっき、跳遠拡を見ても微動だにしなかったわけ。頭いいわね」

「（さつきから、横腹を刺されているのに、この子は痛くないのか？）」

「ねえメビウス？」

「何だい？」

「私の“不規則な力”……知ってるう？」
イレギュラー

ニヤリと不適に笑うユーリ。その瞬間、メビウスの横腹から血が吹き出した。

「が……あ！？（コレは、何だ）」

メビウスは、一旦ユーリから離れ、状況を確認する。別に攻撃を加えられた訳でもない。しかし、横腹から血が出ている。

「（何が起こった？全く分からなかった！）」

「キャハハ、何が起こったか分からないって顔してるね」

見事に考えを読まれた。しかし、何もしいままではユーリを倒すことなど不可能。

「(だったら)」

メビウスは走り出し、桜火で今度はユーリの腕を斬り裂く。すると、

・ブシィ・

という音と共に、ユーリの腕から鮮血が迸るが、メビウスの腕からも血が出る。

「な!」

「何やってるの〜? 自滅う〜?」

「(僕が斬った所と血の出る箇所が同じ……彼女の“不規則な力”^{イレギュラー}ってまさか!?)」

「そろそろ教えてあげようかな。私の“不規則な力”^{イレギュラー}は『^{ペイン}痛みの操者』……痛みを操るの」

「痛みを……操る、か……やっぱり」

「説明すると難しいから、実際にやってみよう。同等の痛み(トレス・オブ・ペイン)!!」

言ってユーリは自分の腹を連刃で斬り裂く。ユーリが口から血を吐き、その場にゆっくりと倒れた。

「おい、何をやって……！」

メビウスの腹も同時に斬れ、力無く倒れ込んだ。

「かはっ！」

「どう？これが同等の痛み（トレース・オブ・ペイン）……あなた
の“身体の状態”を私と同じにする」

「くっ……！しかし、君は痛く……ないのか！？」

「ぜんぜん。『痛みの操者』^{ペイン・ルーラー}のもう1つの能力、消す痛み（キル
ペイン）で“私の痛みだけ”を消してるからね」

「なんて性悪な……能力だ……ハア……ハア」

痛む腹を抑えながら必死に立ち上がるメビウスとは裏腹に、ケロツ
として立ち上がるユーリ。

「私を攻撃すれば貴方も傷付く。これをどうやって覆す？地面と同
化したり、痛みを感じない身体に変身したって、攻撃の時は元に戻
るんでしょ？意味ないよ」

「（さっきの一撃だけで、そこまで分かっていたのか！？）へえ、
よく見てるじゃないか」

「見直した？」

「見下してたつもりはないけど……」

「あらそう？まあ良いや。此処で貴方は終わりだかんね」

「勝負は最後まで分からないものだよ」

「負け惜しみを！」

「可能性と言ってほしいね！」

また2人は対峙する。ユーリの突きを桜火で受け流したメビウスは、足払いをかけてユーリを転ばせる。“身体の状態”を同じにするだけなので、ユーリが転んでもメビウスは平気なのだ。しかし、脚に若干の痛みは残る。転んだユーリを地面に押さえつけるメビウス。

「……ねえ、誤解を招く様な事はしないでくれるう？」

「君こそ勘違いしないでくれ……君が自分の身体を傷付けるのを止めさせたただけだ」

「へえ、それでこれからどうするの？」

「どうするのさ！火炎舞闘！」

メビウスはユーリを押さえつけたまま、火炎舞闘を使った。すると、先程投げ捨てられ地面に転がっていた桜火から炎の触手が現れ、ユーリの傷口を焼いてふさがぎ始めた。

「ぐ……あ……ああ……！！」

「何をしてるの！？」

ユーリは痛みを感じないが、メビウスは別。痛みで気絶しかけている。

暫くして、ユーリの傷が完全にふさがれた。

依然としてメビウスはユーリを押さえつけたままである。

「どうして傷を？」

「あのままじゃ、2人とも出血多量で死んだからだよ。痛みを感じなくするから、そういう事が分からなくなってしまう」

しばしの沈黙。そして

「フッフ……アッハハハ！参った参った。私の負けえ」

「！………どういっ」

「私、実は貴方の実力を試しに来たの。うっん、試しに行かされたと言った方が良いのかしらねえ」

「誰に？」

「それはまだ教えられない。因みに、^{ちな}貴方のお父様じゃ無いからね」

「つまりその人は、僕が龍達に接触すると読んでいたのかい？」

「そういう事になるのかなあ……メビウスが龍達の仲間となるに相応しいか判断して帰って来いってさ」

「で、僕は見事合格ってわけか」

「あんまり便利な能力ちからじゃなさそうだけど」

「子どもには分からんさ」

「じゃあ分かんなくて良い」

「何だ、つまらん。私は龍を追うからもう行くぞ」

「行かせないって言ってんの……鋼刃こうじん牢！」

連刃の刃が重なり合い、巨大な牢となつてゴルディールの動きを封じる。

「！まだこんな技を」

「動けないでしょ？それ！」

ユーリが手を振り下ろす。牢が地面に叩きつけられ、崩壊する。その残骸の中にゴルディールは倒れていた。ユーリはゴルディールに歩み寄る。すると、ゴルディールが突然起き上がり、刃が“ちゃん”と付いている”吸鬼でユーリの胸を刺した。

「油断したな」

「それでも無いよ〜ん。同等の痛み（トレース・オブ・ペイン）」

ゴルディールの胸にも穴があき、血液が散布した。

「！」

「まさか、忘れたの？私の……“不規則な力”！」
イレギュラー

身を翻してゴルディールの蹴りをくらわせる。

「くっ……」

「連刃乱槍……」

ユーリは連刃乱槍を創り出すと、その刃を4本折って地面に倒れているゴルディールの四肢に突き立てる。

「……！」

「これで動けない………終わりねえ」

「ま、待て！もうお前の前には現れぬ！だから……」

「死ねえ」

心臓の在るあたりを一突き。

一瞬身体を硬直させ、ゴルディールは動かなくなる。返り血を頬に浴びたユーリの顔は、ひどく冷たかった。

「任務は果たしたわよ、ソルディアス。後は、彼等次第……」

力無く座り込んだユーリは誰にも聞こえないように、そう呟く。
この時、ゴルディールの口元が吊りあがっていたのにユーリが気付く筈も無かった……。

本編第9話〜痛み〜（後書き）

どうでしたか？

誤字脱字あれば指摘お願いします

では、また会いましょう

番外編〜名刀の眠る国（前編）〜（前書き）

今度はサクヤの番外編です。名前が漢字ですが、どうしてカタカナになったかは後編で語ります。では、どうぞ

番外編／名刀の眠る国（前編）／

「灯夜さん、この子の名前、何にする？」

「そうだな……」

灯夜と呼ばれた男性は、女性が腕に抱き抱えている、産まれたばかりの赤子を暫く見つめる。そして、

「裂夜、というのはどうだろうか？」

「裂夜？」

「私の名は春風灯夜。夜を照らすという意味を込めてつけられた名だ。君の十六夜の名の意味は『総ての夜に、陰ることなく在り続ける』だ。この子は先の見えない夜も、孤独な夜も斬り裂いて進んで欲しいという願いから、裂夜」

「いい名前ね」

19年前、>オラル<で春風灯夜と春風十六夜の間子どもが産まれた。名を裂夜。

これから語るのは、サクヤが龍達と出会う1年程前の物語。サクヤが18歳まで成長した頃の話である。

裂夜の故郷、>オラル<。当時は遺跡や文化財等が多数点在し、重要な国として世界の注目を集めていた。そんな>オラル<で、祝賀会が開かれていた。その名目は、裂夜の実兄、終夜の「伝説の剣士」就任祝い。史上最年少の22歳で「伝説の剣士」となった終夜の

祝賀会には>オラルく中から人が集まり、会場は大盛り上がり。裂夜もまた祝賀会に参加していた。

「兄様は何時になつたら会場に来られるんでしょうか……」

灯夜、十六夜と共に会場に来ている裂夜が心配そうな表情で、会場内を見渡す。その中に終夜らしき人影は無し。

そんな中、会場の扉が突然開き、軍服を着た男性が入室。辺りをキョロキョロと見回し、裂夜を見つけると、裂夜の元へ歩み寄ってきた。

「終夜君の妹の裂夜さんですね？」

「はい。そうですが、何かあったのですか？」

すると男性は裂夜の耳元で、

「今、>オラルくヨプリンに小鬼の一族が入り込もうとしていて、終夜君が赴いています。ですから貴女もきてください。伝えたい事がある、と終夜君からの伝言です」

「……？……分かりました。直ぐに向かいます」

裂夜は会場を飛び出し、>オラルく郊外サイドマスターへ向かった。一見危ないよ
うな気もするが、そこは「伝説の剣士」の妹。兄には及ばないもの
の、相当なセンスを有しているのだ。向かう途中、何匹かの小鬼ヨプリンと
出くわした。

「見つけてしまった……」

「ん？なんでこんなところに人間が居るんだ？」

「えーと……貴方達を倒しに来ました」

「ほお、お嬢さんが言うねえ。しかし、舐めるな！」

小鬼ゴリリンが棍棒を手に、一斉に飛びかかってくる。裂夜は後ろに跳び下がってかわし、小鬼ゴリリンが棍棒を振り下ろした一瞬の隙を縫って懐に踏み入ると、全ての小鬼ゴリリンの首筋を手刀で叩き、気絶させた。

「が……！」

「まあ、こんなものでしょうか。あ、いけない！兄様！」

裂夜は走った。兄を探して走った。

終夜が居たのは、>オラル<の外れ。丁度、最後の小鬼ゴリリンの首を斬り落として命を奪ったところだった。吹き出した血を見つめる終夜の表情は少し悲しそうにも見える。裂夜は“いつもの事だ”と肩をすくめ、終夜に歩み寄った。

「終夜兄様」

「裂夜……来てくれたのかい？」

「はい。で、伝えたい事とは何なのですか？」

「実は……この国に眠っている名刀についてなんだ」

と、終夜は声を潜めて言った。

「名刀……ですか？」

首を傾げる裂夜。それも当然、この国に生まれて18年、裂夜はそのような事は全く知らされずに育ってきたのだ。

「ああ……此奴が強力すぎる刀でね。前の持ち主が封印したんだ。」

「何処に封印されているのですか？」

「>オラル<の遺跡の何処か、らしい。俺は小鬼達ゴブリンがその名刀を狙って>オラル<に入ろうとした事を知り、祝賀会の会場に行くのの後にして、此処を守ってたんだ」

「一体、誰が小鬼達ゴブリンにその情報を与えたのでしょうか？」

「まだわからないけど、必ず見つけ出すよ。それより……」

終夜が言いかけた時、何処からか、轟音が鳴り響いた。

「何だ！？」

「兄様！遺跡が！」

裂夜が指差した方向には、崩れ去っていく遺跡。それも1つではなく、遺跡が崩壊すると同時多発的に幾つもの遺跡が地面に沈んでいく。

「まさか、敵はもう仕掛けてきたのか！？」

「それにしても早すぎますよー！」

「とにかく、俺は遺跡を見てくるから、お前は会場の皆を避難させるんだ」

「分かりました」

「それと、これを」

と言って終夜は裂夜に1本の刀を手渡した。

「これは護身用の刀だ。地面に突き立てると結界を張ることが出来る」

「しかし、兄様は？」

「心配無い。俺にはこの名刀『天龍』てんりゅうがあるのを忘れたのか？」

終夜は、刀身が透き通るような空色をした刀を鞘から抜き、裂夜の前に突き出した。

「そうでしたね。私は避難誘導を済ませたら直ぐに向かいますので、それまで」

「ああ」

裂夜は終夜に背を向けると、会場の在る方向へ走り出す。

.....

息も絶え絶えになりながら走り続ける裂夜。

漸く会場が見えてきた。

「皆さん！急いで逃げ……ッ！！」

その扉を勢い良く開けた裂夜の眼に飛び込んできたのは、辺り一面血の海と化した祝賀会場だった。

会場の飾りには血がこびりつき、床には人の形を成していない肉塊もたくさん転がっていた。

「これは……ウツ！！」

あまりの悪臭に裂夜は口元を抑えてしゃがみ込む。そして、目の前に倒れている人物に眼が止まる。それは裂夜の父、灯夜であった。

「父上！」

慌てて灯夜を抱き起こす。

「うっ……さ、裂夜……なのか？」

灯夜は今にも消え入りそうな声で話し始めた。

「はい！私です！一体何があったのですか！？」

「小鬼^{ヨリン}が……此方に……やってきて……1人を除いて、全員……このざまだ」

「え！？しかし、小鬼^{ヨリン}は兄様が退治した筈。なのにどうして！？それに、その除いた1人とは誰なのですか？」

「あの小鬼は……陽動だったらしい。終夜を……あちらに足止めしておくための、な……そして……十六夜だけは……私が……此処から……逃げた。無事なはずだ」

「母上は無事なんですね……良かった」

裂夜が安堵の息を漏らしたのも束の間、重傷の灯夜を何とかしなければならぬ。

「父上、今から応急処置を……」

言いかけた時、不意に灯夜が裂夜の腕を掴んだ。

「裂夜……私の事は良いから……十六夜だけでも……護るんだ」

「そんな！父上を残して行くなんて出来ません！」

「聞き分ける、裂夜……お前だって……分かる筈だ。この傷なら……もう少しくらい持つ……とな」

「！……しかし……」

「頼む……十六夜を……護ってくれ！」

「……分かりました。でも、必ず戻って来ます！」

裂夜が会場を後にしようと立ち上がった時、背後から1匹の小鬼が現れた。

「もらったぁ！」

「！」

裂夜は思わず防御の体勢をとり、眼を瞑る。

しかし、衝撃はやって来ない。眼を開けた裂夜が見たもの。それは、裂夜の盾となり、小鬼ゴブリンの攻撃を防いだ灯夜だった。

「ぐ…ふ！」

力無く床に倒れ込む灯夜。それを見た裂夜の心は憎しみと怒りで一杯になった。

「あ…あ…あ…うわあああああ！」

我を忘れ、護身用の刀で小鬼ゴブリンを八つ裂きにする裂夜。両腕と両脚を落とし、身体を半分に斬り裂いてから首を吹き飛ばし、転がった頭を刀で突き刺して息の根を止めた。

「ハア…ハア…」

血で真っ赤に染まった両手を見つめながら、裂夜は驚愕の表情を浮かべた。

「私が…」

「さ、さ…く…や」

「父上！」

「良く…やった。それだけの戦闘が…出来れば、もはや…私が

言うことは無い。安心して……逝ける……」

「駄目！嫌です！逝かないで下さい！」

眼に涙を溜めて叫ぶ裂夜を、灯夜は笑顔で見つめていた。

「そつだ……お前に……言っておくべき事が……ある。静かに……聞いてくれ」

「？」

灯夜の気迫のこもった声に、裂夜は自然と黙り込んでしまう。

「お前の……特殊能力に……ついて、な」

「私……の？」

「お前には……『加速』の力が……備わっている。何時……出てくるかは……分からないが……きっとお前を……助けて……くれるだろう」

次第に声が薄れる灯夜。

「父上！もう喋らないで下さい！」

「ああ……もう“喋らない”よ……」

その言葉に引つかかっていた裂夜は、何かを察したように眼を丸くした。

「父上！」

番外編く名刀の眠る国（前編）く（後書き）

どうだったでしょうか？展開が龍と似たり寄ったりだと思っただ方、多いと思います。

感想あればお待ちしております。

番外編く名刀の眠る国（後編）く（前書き）

後編です。

サクヤは殆ど活躍しません。半分以上終夜の話になっています。

ではどうぞ

番外編〜名刀の眠る国（後編）〜

裂夜さくやの母、十六夜いざよひは小鬼ゴブリンに襲われた会場から少し離れた茂みに身を隠していた。

「灯夜さん……」

自然とその名前を、愛した人の名前を呟いてしまう十六夜。暫く息を潜めていると、会場の扉が開き、中から血まみれの灯夜を抱えた、血まみれの裂夜が姿を現した。

「裂夜！」

十六夜は慌てて裂夜に駆け寄る。

「何があったの!？」

「父上が……亡くなりました」

十六夜の問いに裂夜は短く答えると、既に息絶えた灯夜を十六夜へと手渡した。

「!……灯夜……さん」

十六夜は眼に涙を浮かべ、抱きかかえた灯夜を見つめる。そして、

「お疲れ様……ゆっくり、休んでください」

送り出すように笑顔で語りかけ、十六夜と裂夜は灯夜を>オラル<

に在る平原の中心に埋めるのだった。

「母上…1つ聞きたい事があるのですが」

敬愛すべき父親の墓から視線を外した裂夜は十六夜へと向き直る。

「何？」

「私に備わっている特殊能力についてです」

「『加速』の事？」

全てを見透かした様な十六夜の言葉に、裂夜は思わず息を飲んだ。

「…知っていたのですか？」

「ええ、その事は灯夜さんから聞いたわ。あの人には、そういう能力ちから…『力の解明』クリア・アビリティがあるの…」

一旦言葉を切り、また口を開く十六夜。

「あなたに備わる日が何時になるか分からないけど、その能力ちからを使えば、あなたの行動は“一時的に超速になり、周りの人間が遅くなつたように見える”らしいのよ」

「私に、そんな力が……」

「でも、決して私が教えたと言っではいけませんよ？」

「何故です？」

「私にはそういう能力ちからが無いから、嘘を言っていると思われるだけ……能力ちからを持っていたあの人が言ったとなれば、皆信じる筈だから」

「分かりました」

其処まで言っつて、裂夜は何かを決心した様に口を開く。

「……母上」

「……？」

「私はこの裂夜という名をを封印します。これからはカタカナで“サクヤ”で生きます」

「！……それはどうして！」

十六夜は驚きを隠せない。何故なら、自分と灯夜が付けた名前を封印されるのは心が痛いことなのだから。

「裂夜の名前は“夜を斬り裂いて進む”という意味で2人から付けていただいた名です。しかし、私は今から、夜だけじゃない。人を、生き物を斬り裂きに行きます。だから……この名前は捨てなければいけないんです」

今まで見たこともない裂夜の形相に、十六夜は思わずたじろいでし

まう。

「しかし、必ず此処に戻ってきます。待っていて下さい」

平原に十六夜を残すと、サクヤは一目散に遺跡に向かって走り出す。十六夜は険しい表情から一変、優しい表情その背中を見送っていた。

「灯夜さん、見ていますか？…私達の娘はあんなに強い…」

- >オラルくの遺跡・内部 -

サクヤは沈みかけていた遺跡に入り、ひたすら階層を下へ下へと進んでいた。途中小鬼と出くわす。

「だ、誰だお前は!？」

「どけええええ!」

サクヤは無言を言わず、すれ違い様に小鬼の脚を刀で斬り落とす。

「ギヤアア!あ、脚がああ!」

小鬼の悲痛な叫びを無視して、サクヤは駆け抜ける。頬に付着した
返り血を拭うこともせずに……。

- 数分後 -

漸く中間地点と思われる場所へ到着した。壁に取り付けられた数本

の松明たいまつが小さく燃え、僅かに明るい石室である。そして、其処にはサクヤの兄、終夜が居た。

「兄様！」

「裂夜……会場の皆は無事か？」

「……いいえ……母上を残し、全員……亡くなりました」

「……！」

サクヤがいくらか言いにくそうな表情で告げた現実には、終夜は驚くしかなかった。

「……ということは、父上も……！？」

「はい」

「くっ！俺があんな所で足止めをくらっっていないければ！」

「兄様の責任では有りません。お気になさらずに……ところで、情報ほうほうを流していた輩は見つかったのですか？」

「今、怪しい人影を見つけて追いかけて来たんだが、見失った」

「捜しましょう。まだ近くに居る筈です」

「その必要は無い」

何処からともなく発せられた第三者の声こゑに2人は振り返る。目線の

先には、黒いコートを着た人物が数人。

「誰だ、お前達は」

終夜が天龍を抜く。臨戦態勢に入っている様だ。

「我等は名刀を狩る者、ソードハンター。貴様の名刀、『天龍』は我等がもらい受ける」

「そういう台詞は…」

「俺を倒してから言え」か？」

その言葉をあらかじめ予想していた様にハンターが自分の刀を抜いた。

「その通り!」

終夜は言葉を言い終わる前に走り出し、ハンターの1人に天龍を振るう。

「せいてんしょう聖天焼!」

天龍の刀身が真紅に染まり、ハンターの持つ刀に触れた瞬間、一帯を巻き込む大爆発が起きた。

「な、何!?ぐあああ!」

ハンターの驚いた声は、爆発の中へと消える。

「兄様……」

サクヤは終夜の身を案じたが、その心配は杞憂に終わる。終夜はしつかりとした足取りで爆風の中をサクヤの方へ歩いて来ていた。

「サクヤ、無事か？」

「勿論。私を誰の妹だと思っているのですか？」

「そうだったな。さて、お前等、まだやるか？」

「僕がいこうか」

そう言っ出て来たのは、ハンターの中でも一際細い体格をした人物。声が無ければ男性か女性か判らない。終夜はこの人物から言い知れぬ恐怖感を覚えていた。

「サクヤ」

「はい？」

「お前は名刀を探しに行け。此処は俺が何とかする」

「え？しかし……」

「先に見つけられ、持って行かれるより良い。名刀を守るのが先決だ。分かってくれ」

「……分かりました。ご無事で、兄様」

サクヤは遺跡の奥へと走っていき、やがて暗闇の中に姿を消す。それを確認した終夜は男の方に向き直った。

「春風終夜……流石は史上最年少の「伝説の剣士」ソードマスター。格が違うね」

「そう言うお前は誰なんだ？」

「僕はソードハンターの幹部、あまの・みかど天帝……幹部の中では強い方なんだ」

帝はフードを脱ぐ。金髪に紅い瞳をした少年だった。

「そんな事聞いてないんだがな」

「それは残念。さて、早速手合わせ願おうかな」

帝は刀を抜き、構えた。

「泣いて謝っても、許してやらないからな」

「心配はいらないよ。君は僕の前に平伏すしかないんだからね」

「戯れ言を！」

終夜が天龍を抜きつつ帝の顔に向かって斬りつけた。帝はその一撃を刀で受け止めると、天龍の刀身に自らの刀の刀身を絡めるように回転させて、すくい上げるように天龍を上へと弾いた。

「何!？」

「まだまだこれから、だよな?」「伝説の剣士」ソードマスター「春風終夜さん」

「当たり前だ!」

ジャンプして天龍をキャッチした終夜は、そのまま帝へ急降下。そして、

「聖天焼!」

刀身が真紅に染まった。帝はこれを刀で受け止める。爆発が起こると分かっているにもかかわらず。

巨大な爆風で遺跡全体が揺れ、もう内部崩壊しても可笑しくない状態である。

「少しは効いたか?」

「少しね」

「!」

帝は何もなかったかのように終夜の前に立っていた。流石に驚いた終夜は間合いを離し、距離をつくる。

「（確かに聖天焼は直撃した。なのに、何故あいつは殆ど無傷なんだ!?!）」

「さて、そろそろかな」

「?」

「兄様！」

終夜が振り返ると、其処には護身用の刀の他にもう1本、見慣れない刀を手にしたサクヤが息を切らして立っていた。

「見つけました！この国に眠る名刀！」

「サクヤ逃げろ！早く！」

「もう遅いよ」

帝の威圧感が増したかと思った瞬間、終夜とサクヤは床に貼り付くように倒れ、身動きがとれなくなっていた。

「な、何だ！これは……」

「うご…けない…！」

帝は終夜の横を通り過ぎ、サクヤの前でしゃがみ込む。

「これが『震籠』^{しんろう}。良いものを見つけたよ…じゃあ、またね」

「ま、待て！」

帝は終夜の言葉を無視して遺跡の奥へと消えていくのだった。

・>オラル<平原・

「すみません。兄様……私のせいで」

「気にするな。それに帝の目的は名刀じゃないようだったしな」

「でも、あの名刀を持って行きましたよね？」

「それなら俺の天龍は何故奪われなかったのか、という事になる」

「確かに……」

「貴方達、此処に居たのね」

この声は2人の母、十六夜のものだ。

「母上」

「母上……あの、父上の事は……」

「良いのよ終夜。あの人はあなたを恨んだりするような弱い人じゃないから」

「はい、ありがとうございます。それと、1つ相談があります」

「何かしら？」

「俺はこの国を出ようと思います。斬風きりかぜと名前を変えて」

「そう言っていたわ」

「では早速旅立ちます。母上、元気で」

そう言つと、終夜はわきめもふらずに走り出し、あつという間に見えなくなった。

「……」

「サクヤ、貴女も行きたいのでしょうか？」

「え……あ……はい」

緊張したようにサクヤは言つが、その瞳は決意に満ちている様に、十六夜には感じられた。

「なら行きなさい。貴女の母は、何時でも此処で待っていますよ」

「はい！」

サクヤは終夜と違って、ゆっくりと歩き出す。そう、これがサクヤの偉大なる一歩。

遺跡が沈み、家屋が崩壊して何もなくなった。オラルくの風景は、何故かサクヤの心に暖かい光を灯していた。

番外編〜名刀の眠る国（後編）〜（後書き）

次からまた本編に戻ります。

では、感想などお待ちしています

本編第10話 巨人の住む山 (前書き)

第10話です。登場する種族に若干違和感を覚えると思いますが、ご容赦下さい。

本編第10話 巨人の住む山

「なあ、龍」

先程から険しい表情で何やら考え事をしている龍が気になり、大虎は声をかけていた。

「おい、龍」

「……………」

「返事がない。只の…」

「屍か？」

「てめえ、ちやつかり聞こえてんじゃねえかよ。何をそんなに考え込んでるんだ？」

「ん？…ああ、竜の事を、考えていたんだよ。俺のせいで封印のパワーバランスが乱れてしまったと思うと、何か複雑な気分になってしまつてな」

「起きた事は仕方がない。だから、今出来る事を考えよう」

後ろから聞こえた声に聞き覚えのあった4人は振り返った。

「メビウス…お前、無事だったのか」

「無事じゃないなら此処には居ないって。そうだろ？」

龍の問いにあっさりと答えるメビウス。そこへ、大虎が割って入ってきた。

「確かにそうだよな。んで、あのユーリとかいう子ども（ガキ）はどうしたんだ？」

「ああ、あの子は僕を試しに来たらしい」

「試す？どういうことですか？メビウスさん」

「ユーリは、僕が龍達の仲間になるに相応しいか、確かめに来させられたと言っていたよ」

「誰に？」

「そこまでは教えてくれなかった。でも…」

「見事合格して此方に合流した、というわけか」

「ご名答。それはそれとして、君達は何処へ向かっていたんだい？」

「これとってあても無く、ただ真っ直ぐ歩いていただけだ。別にハンターの情報を持ってるわけでもないからな」

「なら、>ヴェニキア<に行こう」

「>ヴェニキア<…って、あの雪国のことか？」

>ヴェニキア<というのは大虎の言とおおり、北方の雪国である。

季節が変わっても、ヴェニキア<の雪は溶けることがなく、一年中雪景色を拝むことが出来る。

「あそこには、五元の竜にまつわる伝説が残っているんだ。それに僕の知り合いに腕の立つ鍛冶屋がいる。もしかしたら龍、君の蒼龍も直るかもしれない」

「それは嬉しいんだが、>ヴェニキア<へ行くには山を1つ越えなくてはならない筈」

「ああ、^{シャイアント}巨人の支配する>カブル連山<を越えた先に、>ヴェニキア<はあるって話だぜ？」

「そう。今からその>カブル連山<に向かう」

「どうやって行くんだ？この>アミラス<から>カブル連山<まではかなり距離があるぞ？ちょっと歩いたくらいじゃ到底辿り着けない」

「その点に関しては心配無用。忘れたのかい？僕の“^{イレギュラー}不規則な力”を」

メビウスの身体がゴキゴキと音を立て、翼の生えた馬へと変化した。

「『^{メタモルフォーゼ}突然変異』で^{ベガサス}天馬に変身したのか……やけにデカいな。変身出来る、ということはお前は^{ベガサス}天馬を見たことがあるんだな？」

「うん。さあ、早く乗って。4人なら何とか運べる筈だから」

龍、大虎、サクヤ、麗装の4人は、天馬ベガサスに変身したメビウスの背中に乗り、>カブル連山<を目指していた。

「メビウス、ちょっといいか？」

「何だい？龍」

「空が飛べるのなら、山をショートカットすることは出来ないのか？」

「4人乗せてる上に、>カブル連山<周辺の空は酸素濃度が低いから、元が人間の僕じゃ息が保たないんだ」

「なら仕方がない、か……………お、話してる内に到着みたいだな」

龍達の前方には、天を突かんばかりの高さを誇る>カブル連山<がそびえ立っていた。

「あれが>カブル連山<……………もの凄い威圧感ですね」

「行くうぜ。此処で立ち止まっても始まらねえ！」

大虎は、ぶっきらぼうにそう言い放ち、山の中へと歩みを進めていた。それにつられて、龍達も自然と大虎を追いかける。

- 数時間後 -

「あーもう！何だよこの山は！全っ然山頂が見えねえじゃねえか！」
遂にしびれを切らした大虎が激怒するが、その声は遙かな空の果てへと消えていくのだった。事実、“登っても登っても頂上が見えてこない”というのは、大虎を始め全員の意見でもあった。

「なあ、俺達って今どのくらいの所に居んのよ？」

「分からん」

大虎の問いに即答した龍は後ろを振り返る。

「（なんだ？……さっきからつけてられている様な気が）」

「どうしたんですか？龍さん」

「あ、いや……ちょっとな」

「？まあいいですけど……あ、待つてくださいよ！大虎さん！メビウスさん！」

サクヤは先へ先へと進む大虎とメビウスを追いかけていく。それを見送った龍が顎に指を当てて考えていると、

「誰かが、いえ、何かが後をつけてきているんでしょ？」

「！」

不意に、麗裳が龍の隣に立った。

「気付いてましたか」

「多少はね……でも可笑しくはない？」

「ええ……この山には巨人ジャイアントが居るはずなのに、今まで1匹も現れなかった。それどころか、生き物すら見ていない」

「それに尾行するにしても、尾行する目的が分からない。様子見だけならともかく、あそこまで気配を殺す必要は無いもの。普通の人には十分すぎる程の気配の殺し方だったわ」

「それって、俺と麗袋さんが普通じゃないと言ってる事になりますけど？」

「あら、その通り。だって……私達は化け物でしょ？」

笑顔で言う麗袋に、龍も自然と顔が綻ほころびてしまう。

「事実、麗袋さんが最も化け物じみてますけどね」

「その言葉、誉め言葉として受け取っておくわね。>刀<の王子様」
「？」

「お好きにどうぞ」

とりとめない会話を交わした後、龍と麗袋が歩き出した、ちょうどその時、

「龍さん！麗袋さん！こっちにきてください！早く！」

遠くの方で、自分達をしきりに呼んでいるサクヤの姿が見えた龍と麗裳は、サクヤの元へと急いだ。

「何があつたんだ？」

「見て下さい…これ」

サクヤが指差した方向にあつたものは、バラバラに斬り裂かれた巨^{ジャイ}人^{アント}だつた。

「！一体、誰がこんな事を！？」

麗裳が驚愕の声をあげるが、その時、麗裳自身も言葉の間違えに気付かなかつた。この状況では、“誰が”ではなかつたということに。

「……切り口がまだ新しい上に、刃物の切り口ではない……それにこれは、菌型か……思ったよりも面倒な事になってきたな」

肉片を調べていた龍が立ち上がり、辺りを見回すが、それをやったと思われる様な輩は見つからなかつた。まあ当然の事だろう。このようなことをしてかしておいて、“その現場に留まる”なんて馬鹿な行為を誰がするものか。それが人成らざるものならば話は別だが。

「龍君、これをやつたのは…」

麗裳に問いかけられた龍は、自らの推理を語り始めた。

「ええ、だいたい想像はつきます。巨人^{ジャイアント}を斬り裂くなんて馬鹿な真似、人間は絶対にしない。いや、人間には出来ない。だとすれば、

ジャイアント
巨人を食料としている種族がこの山に最近住み着いた、ということ
でしょうね」

「まさか……その種族って」

「……鉤爪悪魔」

「「「「「」」」」」」

今まで、龍の話に全く興味を示さなかった大虎、サクヤ、メビウスの3人が、鉤爪悪魔ガーゴイルという名を聞いた瞬間、此方をもの凄い勢いで振り返った。

「龍、今」

「鉤爪悪魔ガーゴイルって」

「言いましたか？」

大虎、メビウス、サクヤの順に言葉を並べて、龍に疑問を投げかける。3人が驚くのも無理はない。鉤爪悪魔ガーゴイルはこの世界において、凶暴さに関しては1、2を争うほどなのだ。それだけならまだ良い。更に鉤爪悪魔ガーゴイルは攻撃力も高く（鉤爪なんてものがあれば当然だが）、飛行能力も兼ね備えている。それになんといっても、鉤爪悪魔ガーゴイルは恐れを知らない。見る生き物何にでも襲いかかっていき、殺してしまうのである。

「ああ……巨人ジャイアントを食う奴なんて鉤爪悪魔ガーゴイルくらいしかないからな」

「じゃあ、私達をつけてたのは……」

「おそらく鉤爪ガーゴイル悪魔でしょう。仲間を連れて戻って来るのも時間の……」

麗姿の言葉に付け加えて、龍がそう言いかけた時だった。

「ギャシャアア!!」

「チツ……もう来たのか……仲間を連れてくるとは思ったが、ここまでの団体さんでお越しとは……温泉旅館の女将さんもびっくりだな」

大気を震わす金切り声で唸りを上げたのは、人間に似た真つ赤な身体に翼と鉤爪を持つ、数百匹は居るかと思われるくらいの鉤爪ガーゴイル悪魔の群れだった。

本編第10話 巨人の住む山 (後書き)

どうでしたでしょうか。次は戦闘に入るので頑張って書きます。
ではまた会いましょう

本編第11話〈鉤爪悪魔（ガーゴイル）討伐戦〉（前書き）

戦闘シーンが少し短いですがご容赦下さい。ではどうぞ

本編第11話〈鉤爪悪魔（ガーゴイル）討伐戦〉

「こりゃあ、不味いな」

「非常口は……何処ですか？」

「ある訳ないよ。そんなもの」

鉤爪悪魔の大軍を目の前に、言葉も無く立っている龍と麗裳を後目に、残りの3人は“緊張感が”無い様子である。

「こっぴなったら……」

「やるしかなさそうね」

「ギギイ……ギギヤアアア！」

数百匹の鉤爪悪魔が間髪を入れずに、一斉に飛びかかってきた。

「固まるな！2対3になるように別れるんだ！」

龍の指示で4人は一瞬にしてバラけ、それぞれの方角へと、鉤爪悪魔を引き連れて走り去っていった。龍と麗裳、そして大虎、サクヤ、メビウスの3人だ。

- team 龍 -

龍と麗裳は、鉤爪悪魔を、開けた場所に誘導した。森の中では、飛行能力を持つ鉤爪悪魔の方が有利になってしまふからだ。

「ちょっとは少なくなったかしら？」

「そうですね。では……」

「「行きますかあ！」」

龍と麗装は同時に叫び、鉤爪ガーゴイル悪魔の群れの中へ飛び込む。龍は自分に向かつてのびてきた鉤爪の1つを真天で受け止め、その鉤爪ガーゴイル悪魔の腕をつかんで振り回し、周りの鉤爪ガーゴイル悪魔に当てて数匹を蹴散らした。

今度は背後からの攻撃。しゃがんでかわし、後ろを振り返ると同時に真天で鉤爪ガーゴイル悪魔の腕を斬り飛ばして腹に蹴りをいれる。後ろに居た鉤爪ガーゴイル悪魔が何匹か一緒に吹き飛んだ様だった。

鉤爪ガーゴイル悪魔数匹による同時攻撃も、龍はものともしない。一旦ジャンプしてかわし、鉤爪ガーゴイル悪魔が重なり隙が生まれた所へ、真天の技を叩き込む。

「真天・氷塊雨！」

空がたちまち曇天と化し、氷の塊が鉤爪ガーゴイル悪魔の上へのしかかり、押し潰した。

「まあ、こんなも……ッ！」

不意に背後からのびてきた鉤爪ガーゴイル悪魔の鉤爪が龍の脇腹に突き刺さる。空中では避けられなかったのだらう。

「ギギギイイ！」

歓喜の声（？）を上げる鉤爪悪魔^{ガーゴイル}。だが、その声はすぐに疑問の声へと変わる。

「ギー!？」

・ガッ・

という音と共に、龍が鉤爪悪魔^{ガーゴイル}の腕を掴んで動きを封じたのだ。鉤爪悪魔^{ガーゴイル}は必死に逃れようとするが、龍の指が腕に深く食い込んでおり、どうしようもない。

「こんなもので、俺を倒せるとでも思っただのか？」

龍が眼を鋭くして睨んだかと思うと、真天で鉤爪悪魔^{ガーゴイル}の脳天を突き刺し、息の根を止めた。

絶命した鉤爪悪魔^{ガーゴイル}が、ドスンと音を立てて地に墮ちる。それと同時に龍も他の鉤爪悪魔^{ガーゴイル}達の前に降り立った。

「さて……ここからが本番だ！」

龍は、引け腰になりつつある鉤爪悪魔^{ガーゴイル}の群れの中へ、再び飛び込んでいくのだった。

一方の麗裳は、刀を使わずに、体術だけで鉤爪悪魔^{ガーゴイル}を圧倒していた。

「こんなものかしら？ 鉤爪悪魔^{ガーゴイル}の力は」

一直線に迫ってきた鉤爪を横にズレてかわし、鉤爪悪魔^{ガーゴイル}の腕を手ではたき上げると、軽くジャンプして鉤爪悪魔^{ガーゴイル}の顔に回し蹴りを決める。

ゴキーンツ、と骨の砕ける音がして、鉤爪悪魔ガーゴイルは息を引き取った。

しかし、次の鉤爪が迫る。麗裳は近くに居た鉤爪悪魔ガーゴイルを掴むと、そいつを自分の前に持ってきて盾とする。鉤爪悪魔ガーゴイルは自分の出した爪を止める事が出来ずに仲間の胸を貫いてしまった。

「ほら、隙あり！」

麗裳は、盾にした鉤爪悪魔ガーゴイルと攻撃してきた鉤爪悪魔ガーゴイルを獺で串刺しにすると、腹に刺さった獺を横になぎ払う。緑色の血が麗裳の頬を濡らし、一本の線を描きながら地面へと落ちていった。

- 数分後 -

「後半分くらい……そっちはどう？」

「こっちも半分くらい片付けましたよ」

その言葉に答えたのは、麗裳と背中合わせに立った龍だった。10匹程だった鉤爪悪魔ガーゴイルも、もう50も居なくなっていた。

「この数ならいけそうだ……麗裳さん」

「何かしら？」

「じつとしてくださいね。動いたら、多分死にますから」

「……分かったわ」

頷いた麗裳に龍も頷きでかえすと、真天を空高く掲げる。

「真天・豪水剣！」
しんてん・こうすいけん

その言葉を詠唱した瞬間、先程氷塊雨で出現させた雨雲から、刀の形に“凝縮された”雨が降ってきた。無数の刀となった雨は、周りの鉤爪悪魔ガーゴイルを次々に捕らえ、地に突き刺さっていく。それも、龍と麗裳を避けながら。

「これで……終わりですね」

豪水剣に捕らえられ、無様に地面に伏し、息絶えている鉤爪悪魔達ガーゴイルを横目でチラツと見てから、龍は脇腹の傷を押さえて言った。

「後はお前達だけだ」

- t e a m大虎 -

大虎達は龍達とは違い、剣技や“不規則な力”イレギュラーを駆使し、森の中で戦っていた。

「秘剣・大獣爪！」

「火炎舞闘！」

「風流刃・鎌鼬！」

鋼虎の爪が、桜火の炎が、雷風の風が鉤爪悪魔ガーゴイルと共に、周囲の木々を次々に蹴散らしていく。

「さあ！どつからでもかかって来やがれ、ってメビウス！やたらに

炎を使うな！山火事起こしてえのか！？」

「ああ、ごめん。まあそれはおいといて、僕としては、何処からてもってというのは勘弁して欲しいけどね」

“おいとくなよ”と、大虎は心の中でツツコミを入れた。

「私は良いですよ？何処からでも。誰も私には触れませんから」

龍達とは別の意味でノリノリな3人。サクヤの“触れない”という言葉聞いたのが、鉤爪カゴイル悪魔がサクヤを取り囲み、一斉に飛びかかった。

「サクヤ！」

「大丈夫です。雷風秘技・護風陣！」
らいふうひじ・ごふうじん

そう言つて、サクヤが雷風を地に突き立てると、サクヤの周りに風の刃が現れ、全方位をカバーする盾となった。その盾に触れた鉤爪カゴイル悪魔が切り刻まれて肉片となり、周辺に飛び散る。

「わお、眼に悪いな」

「全くだね」

大虎とメビウスが肉片を見ながら言っていると、背後に黒い影が2つ。鉤爪カゴイル悪魔である。発達した鉤爪をそれぞれの定めた目標へと向かわせるが、

「頼んだよ。分身」
アバター

メビウスは『メタモルフォーゼ突然変異』で出現させた分身アバターを盾にして鉤爪悪魔ガーゴイルの攻撃を防ぎ、分身ごと鉤爪悪魔ガーゴイルの首を斬り裂いて戦闘を終わらせた。そして大虎は、咄嗟に後ろを振り向き、鉤爪悪魔ガーゴイルの両腕を掴んだ。

「そんなトロい攻撃で俺を捕らえられなくても思ったのか？ いや、これが攻撃かどうかすら疑わしいな……」

大虎の手が黒く染まりだした。

「さあ、無の世界へご案内だ！ 閉闇！クロース！」

大虎の掌から黒いものが溢れ出し、鉤爪悪魔ガーゴイルを包み込んだかと思うと、鉤爪悪魔ガーゴイルが跡形も残さずに消え失せてしまった。

「さあて、次は何奴だ？」

まだ掌から闇にわが溢れている腕を前に突き出し、鉤爪悪魔達ガーゴイルの目前に迫る大虎。

「ギ……ギイイイイ！」

大虎の周りを囲んでいた鉤爪悪魔ガーゴイルがいつぺんに飛びかかる。数で押しせば勝てると思ったのだろう。

「ちったあ考えるつてことを知ってるんだな……だがしかあし！ それでも、俺の『闇の司者』ブラックレス・オペレーションには勝てねえよ……黒覆！ブラックホール！」

「ギ？……ギギイイ！」

突然、大虎の周りに居た鉤爪悪魔ガーゴイルが両腕で眼の辺りを押さえてもがき苦しみだした。

「相手の視界を闇で覆う」……これが黒覆ブラックホールだ。何も見えねえだろ？
じゃあ、みんな仲良く死ね……奥義・鋼虎連撃波おつぎ・こうこれんげきは！」

大虎は近くにあった木を蹴って宙に舞い、上から鋼虎を鉤爪悪魔ガーゴイル共に向けて突き出した。すると、鋼虎の刀身から鋼フルメタルの虎が無数に出現し、眼の見えなくなつた鉤爪悪魔ガーゴイルに飛びかかり、喉を爪で斬り裂く。声も出せずに死んでいく鉤爪悪魔ガーゴイルを、大虎は冷えた眼差しで見つめていた。

「漸く片付いたな。メビウスー、サクヤー、そっちは終わったかー？」

「ええ」

「終わったよ」

鉤爪悪魔ガーゴイルの死体の山を背に、メビウスとサクヤが大虎の方へと歩いてきているところだった。

「そんじゃ、早速龍達と合流しなくちゃだ」

「でも何処に居るんでしょうか……2人共」

「……此処だ」

「ふえ！？」

突然後ろから聞こえた龍の声に、サクヤは思わず声色を裏返す。

「りゅ、龍さん！？何時から其処に！？なんで私達の場所が分かったんですか？」

「あれだけ暴れられれば嫌でも気付く。それにしても、可愛い声を出すんだな」

笑顔で言う龍を前に、サクヤの顔は一瞬にして紅潮した。

「か、からかわないで下さい……」

「本音だったんだが……まあいい。それにしても、よくこれだけのガーゴイル鉤爪悪魔が住み着いたものだな」

「うん：ガーゴイル本来鉤爪悪魔は魔界に居る筈。住処を追われたのか、自分達の意志なのか」

「どっちだって良いだろ？とにかく、邪魔者は片付けちまったから、早えとこ山を登ろうぜ？」

「でも油断は出来ない。慎重に進みましょう」

合流したら5人は頂上を目指し、歩き続けた。そして日が完全に落ち、辺り一帯にに夜の帳が降りた頃、やっとの思いで頂上へ到達。邪魔をする者は……いなかった。

「疲れたあゝ、今日は野宿といこうぜ。お休みい」

ゴロンと地面に寝転んだ大虎はそのまま夢の中へと落ちていくのだ
った。

「俺が見張っておくから、寝て良いぞ？」

「分かりました。お休みなさい」

「後は頼んだよ、龍」

「ああ」

皆が寝るのを確認した龍は、静かにその場を後にした。

仲間達が休んでいる森を出て少し歩いた所にある巨大な木。名を大
樹バロールという(らしい)。この>カブル連山<に古くから生え
ているものである。龍はその木の根元に腰掛け、満天の星空を眺め
ていた。すると、

「どうしたの?こんな所で」

聞こえてきた声に、龍は振り返ることなく続けた。

「麗袋さんこそ」

「ただの散歩よ」

「そうですか…では俺もただ星を眺めていただけ、と言っておきま
す」

「嘘。何か考え事してたんでしょ？」

そう言つて麗裳は龍の隣に腰を下ろした。

「ハンターの事？」

「やっぱり分かりますか……………あいつ等は五元の竜を復活させて何をする気なんだ……………」

やや小声で呟くように言つた龍に麗裳は答える。

「世界を支配するつもりでしょう？」

「でもそんな代物が人に操れるとは思えない」

五元の竜は天、冥、地、空、海の全てを支配出来る竜なのだ。馬鹿みたいに強大な力を持つ化け物を人間が操るなどという事は到底無理。

「確かに無理でしょうね……………ただの人間”には」

「……………ただの人間”？」

「“不規則な力”^{イレギュラー}があれば可能かもしれないって事」

「ああ、そういう事ですか……………ところで、大虎の傍に居なくて良いんですか？」

これ以上考えるのが嫌になったのか、龍は唐突に話題を変えてきた。

「大虎は最近……サクヤちゃんと一緒に居ることが多くて」

「へえ……まあ、あの2人なら気が合いそうですからね……もしかして、嫉妬ですか？」

「そうかもね」

「冷静なんですね。もっと取り乱すと思いましたが」

龍がやや意外そうな表情を麗裳に向けるが、麗裳は軽い笑顔であしらってしまった。

「……だから龍君の傍に……来たの」

そう言って、麗裳は龍の肩にコトリと自分の頭を乗せて眠ってしまった。

「やれやれ……今日は俺、眠れないかもな」

夜空に瞬く無数の星達が、龍と麗裳を見つめていた。

本編第11話〈鉤爪悪魔（ガーゴイル）討伐戦〉（後書き）

なんかテイルズシリーズみたいになってますね。技名とか物語とかその他諸々。感想やアドバイスあればお願いします。次もお楽しみに

本編第12話〜似て非なる能力（ちから）〜（前書き）

12話です。設定が色々難しい（汗）。たまにあらすじを入れることにしました。
ではどうぞ

- あらすじ -

蒼龍を直すために雪国>ヴェニキア<へと向かっていた龍達。途中の>カブル連山<において鉤爪ガーユール悪魔との戦闘になるが、見事勝利し、山を越えるのであった。

本編第12話〜似て非なる能力（ちから）

「な、なんじゃこりゃあー！」

大虎が大声をあげるが、無理もない。>カブル連山<を越え、ヘガサス天馬に变身したメビウスに乗って>ヴェニキア<へ来たのは良いのだが、メビウスが言うその場所には、雪が在るばかりで町が何処にあるのか全く認識出来ないのだ。

「おいメビウス！これはどういう事だ！辺り一面真っ白じゃねえか！なんも無いぞ！？」

「ん？ああ、言ってなかったけど>ヴェニキア<は雪の下にある地下国家なんだ。魔物を警戒したお偉いさん方が地面の下に国を築いたんだよ」

「また地下かよ」

と大虎。

「でも、>ヴェニキア<は人間と小人ドワーフに妖精エルフ、そして竜人リザードの4つの種族が共生していると聞いたことがあるわ。小人や妖精ドワーフはともかく、リザード竜人は人に危害を加えかねない魔物よね？」

麗裳の質問に大虎とサクヤが頷くが、龍だけは眼を閉じて黙っていた。

「そう。なにせ、その計画を発案したお偉いさんは当時の竜人族リザードの

長だったんだから」

「どつという事ですか？」

サクヤが首を傾げると、龍が補足説明を付け足した。

「つまり、人間や小人^{ドワーフ}、妖精^{エルフ}と共に住ませてもらう代わりに、町を守る役目を背負った、というところか……大方人間に助けられた竜^{リザード}人が恩返しを買って出たんだろっ」

「そうだったんですか」

「竜人^{リザード}の中にも穏健派つてのが居るんだな」

「気性が荒い奴らばかりではないという事だな。さ、早く入ろう。このままじゃ氷付けになって愛地^{イデ}?博に移送される」

「でも、どつやって入るんですか？」

「まず入口を見つけないとちやね。火炎舞闘！」

桜火の刀身から炎^{イハ}が迸り、周囲の雪を溶かし始めた。

暫くして、雪が溶けた地面に鉄の扉が出現し、メビウスは扉を開けて中へと入って行く。

「此処が入口だよ」

「どつりで見つからないわけだ」

延々と続く階段を下りた一行を待っていたのは、地下とは思えない

程明るく、活気のある街だった。全体的にレンガ造りの建物が目立つ洋式の街並みで、あちこちに小人^{ドワーフ}や妖精^{エルフ}の姿が見受けられる。

「こいつあすげえ」

「地面の下にあるからもつと暗いと思ったけど、そうじゃないみたいね」

街の様子に感心しながら歩いていると、2体の竜人^{リザード}が立場たかった。竜の顔に、人の身体を持つ少数派種族である。

「外から来た者達だな……>ヴェニキア<に何の用だ？」

2体の竜人^{リザード}は自分の持つ斧を交差させて行く手を阻んでいる。

「勝手に入って申し訳ない。首都>オルウエーダ<の鍛冶屋に用がありません。前に一度来たことがあるから、オルウエーダ市長に確認してもらえれば分かります」

「分かった。それでは確認をとる。しばし待っていてくれ」

- それから -

首都>オルウエーダ<の外れにある小さな建物。見た目はお化け屋敷に見えなくもない其処が、鍛冶屋らしい。市長に確認もとれ、竜人^{リザード}達の検問を抜けた龍達は、メビウスの案内で>オルウエーダ<へ来ていた。

「凜さーん、居るー？」

メビウスは、何の躊躇いもなくその建物の中へ入って行き、それにつられて龍達もメビウスの後を追う。

建物の中には沢山の刀や盾が所狭しと立て掛けてあり、鉄を叩く金槌が散乱している。熱せられて赤くなっている鉄が在るのを見ると、少し前まで誰かが此処に居たことが分かる。

「相変わらずの散らかりようだな……」

「あら、お客さん？」

メビウスの声に応えるように建物の奥から出て来たのは、女性だった。長い黒髪に翡翠の瞳をしていて、歳は20代後半といったところか。

「あら、メビウスじゃない。久し振り」

「うん、久し振り。みんな紹介するよ。この人が僕の知り合いの……」

「泡沫凜よ。うたかた・りん宜しく」

「霸道龍です」

「春風サクヤと言います」

「私は銀麗袋」

「黒斬大虎ってんだ。それにしても、鍛冶屋って女だったのか」

「あゝ違う違う。鍛冶屋は私の父、うたかた・そうき泡沫鎗鬼の事。私は只の刀好き
「よ」

「見るからに怖そうな名前ですね。って泡沫鎗鬼といえば「伝説の
ソートマスター剣士」の1人ですよね!？」

サクヤがまた1人で暴走し、周りの反応に気付いて縮こまる。どうやら知らなかったのはサクヤだけらしい。といっても、斬風終夜（改め春風終夜）がサクヤの兄であることは誰も知らないわけだが。

「父に用なら遅かったわね。たった今「伝説の剣士」ソートマスターの召集会議に行ってしまったわ」

「いや、今日は凜さんに用があって」

「私に？」

「うん。この刀を“直して”ほしくて……折れてるんだ。いや、正確には折られたんだけど」

メビウスが龍の手にある蒼龍を指差す。すると、凜は眼の色を変えた。

「それって、まさか……蒼龍!？」

「そうですが……それがどうかしましたか？」

「此が蒼龍……一度見てみたかったのよねえ〜!〜!」

凜は龍の手に握られている蒼龍に、眼を輝かせている。

「よく鐔の装飾だけで分かりましたね」

そう、メビウスは凜に“この刀”と言っただけで、蒼龍とは一言も言っていないのだ。にもかかわらず、鞘に収めたままの刀を鐔の装飾だけで蒼龍と判断してしまうのだから大したものだ。因みに、蒼龍の鐔はひし形の4つの先端が欠けたような形をしている。

「そりゃ有名な刀だもの。刀好きのくせに知らない方がどうかしてるわ……で、これを“直せば”良いのね？それなら“私に”ではなくて私の“不規則な力”^{イレギュラー}に用があるって言わなきゃ駄目よ？」

「バレてたか。とにかく、お願い」

「分かったわ……じゃあ蒼龍を抜いて。巻き戻し（ロール・リバー
ス）！」

凜が言うと、蒼龍の刀身が淡く輝きだし次の瞬間には元の、刃が折れる前の蒼龍へ戻っていた。

「これでどうかしら」

「完璧に直ってる……ありがとう」

「どうぞ致しまして」

「凜さんの“不規則な力”^{イレギュラー}って何なんですか？」

サクヤが先程から訊きたくてしようがなかった疑問を口にした。

「私のは『巻き戻し（ロール・リバース）』……“形状変化した物を本来の形状に戻す事が出来る”の。詳しく言うと、その物体の時間軸を形状変化する前に戻すの。系統は事象干渉系よ」

麗裳の『時喰』と少しだけ似てはいるが、此方は破壊ではなく“復元する”能力。というところが、麗裳の『時喰』との大きな違いだろう。さらに、発動条件が少なく、形状変化した物ならどれだけ時間が経つていようと復元出来る。“所有者の頭の中に元の形状の映像が残っている”というのが唯一の発動条件である。裏を返すと、“所有者が死んだり、記憶喪失に成るなどして映像が消えれば、この能力は無意味なものと成ってしまう。それに、元から所有者が居ない物など論外である。”

また、人に使うことが出来ないという事も、『時喰』との違いとして挙げられる。麗裳の『時喰』は対象物を“人”としているが、凧の『巻き戻し（ロール・リバース）』は“形状変化した物”のみを対象物としている。つまり、この2つの“不規則な力”は似て非なるものなのだ。

「私の『時喰』と似てる……」

「でも、この2つは似て非なる能力……ということとは分かるわよね？」

「ええ……まあ」

凧の言葉には他者を寄せ付けけない棘が、少なからずも含まれているように麗裳は思えた。

「そういえば、この前も刀を直してほしって頼みに来た人がいたわね。名前は確か……ゴル……ゴラ……」

「まさか……ゴルディールでは!？」

「そうそう、其れよ。知り合い？」

「敵……ですね」

場にしばしの沈黙が流れる。その沈黙を破ったのは、意外にも大虎だった。

「で、これからどうするよ?ゴルディールを追うか？」

「いや、そっちも心配だけど、今は>オルウエーダ<市長の所へ行って五元の竜について聞こう」

鍛冶屋を後にした龍達は凜を連れ、>オルウエーダ<の中心にある市長の屋敷へと向かっていた。市長の屋敷までは鍛冶屋から長い長い一本道となっており、滞りなく辿り着ける……筈だった。

「チィ……此処には魔物は入らねえんじやなかったのか!？」

大虎が舌を打ち、鋼虎を抜いた。市長の屋敷へと続く一本道には、巨大な体をした狼が3匹。肉食獣、^{フェンリル}大狼である。

「地下に在るだけだから全く入らないって訳じゃない。^{フェンリル}大狼の鼻は誤魔化せないのよ……これが>ヴェニキア<の問題点なの」

凜が悔しそうな表情を浮かべて唇を噛む。問題点と言ったというこ
とは、これが初めてではないのだろう。

「とにかく、此奴らを蹴散らして市長の屋敷へ急ぐぞ」

そう言つて、龍が直つたばかりの蒼龍を抜刀した。龍の手に握られ
た蒼龍が、まるで主人の呼びかけに応える様に鼓動を打っているの
が、大虎には分かつた。

「（やっと龍と共に戦えるんだな。蒼龍……思う存分暴れてこいよ。
俺と鋼虎も暴れるからな）」

「サクヤ、麗裳さん、凜さんを連れて屋敷へ向かえ！突破口は俺達
3人で切り開く！」

「分かりました！」

「了解！」

本編第12話〜似て非なる能力（ちから）〜（後書き）

この後戦闘になるので、中途半端なところで切りました。

考えてみたら、龍達って殆ど休みなく戦ってますよね。

これ読んで面白いと思った方がいらっしやれば、他の方へ紹介して頂ければ幸いです。

では、また13話で会いましょう。

本編第13話〈推参！泡沫鎗鬼！〉（前書き）

13話です。少し短いですが、ご容赦ください。

・あらすじ・

蒼龍を直すことに成功した龍達は、五元の竜の伝説を知るため、>
ヴェニキア<の首都>オルウエーダ<にある市長の屋敷へと向かっ
ていた。その途中、大狼の大群フェンリルに出くわすのだった。

本編第13話 推参！泡沫鎗鬼！

龍、大虎、メビウスの3人が駆け出すと同時に、大狼達も駆け出す。フェンリル
徐々に距離が縮まっていき、そして大狼が刀の射程範囲に入る。フェンリル

「蒼天波！」

「大獣爪！」

「火炎舞闘！」

3人の一斉攻撃による衝撃で街道を構成していた石がめくれあがり、粉々になる。これで勝負は決まったかに思えた。しかし、土煙の中から現れたのは、無傷の大狼フェンリルだった。

「嘘でしょ!?!」

「おいおいマジかよ……傷1つついてねえぞ」

「当たる瞬間に俺達との距離をあけたんだ。優秀だな……あの3匹（しかし、なんて反応速度だ……それに3つの技を避ける程の脚力。凄まじいな）」

龍が感心していると、3匹の大狼フェンリルは動揺している隙を狙い、一気に距離を詰めた。

「く……!!」

襲いかかる爪を蒼龍で受け止めた龍はその爪を受け流しつつ姿勢を

かがめ、受け流した勢いを利用し身体を入れ替えて大狼の懐へと入り、下から大狼の腹に狙いを定める。

「穿て！蒼き龍の牙よ！蒼穿龍牙！」

龍の力と蒼穿龍牙の威力を、その刀身に乘せた蒼龍の突きが大狼の腹を穿つ。しかも、その突きは的確に大狼の急所を捉えており、大狼は一瞬で楽になれたのだらう、もう息をしていないようだった。

「ごめんな……」

龍の、許しを請うような言葉が既に息絶えた大狼に届くはずもなかった。龍が大狼に踵を返して歩き出した、その時

「龍！後ろだ！」

突如として重なって聞こえてきた大虎とメビウスの声に振り返ると、1匹の大狼が龍の目の前まで迫っていた。龍は反射的に半歩かわしたが、大狼の爪は龍の胸を多少なりとも抉り、鮮血をしぶかせた。

「くう……！」

意識が吹っ飛びかけ、大きく体勢を崩した龍に、大狼の次なる攻撃を避けることは不可能に近かった。揺らぐ意識でふと周りを見回した龍は、3匹だった大狼の数が膨れ上がっている事に気付く。

「これじゃ、鉤爪悪魔の時とあまり変わらないな」

呟いていると、大狼がグオオンと一声鳴き、龍に飛びかかった。大虎とメビウスは他の大狼の相手をしていて、サクヤと麗装は非戦闘員である凜を守っているため龍に手を貸せる筈も無い。動くことも

ままならない龍はこれから来るであろう痛みに眼を瞑った。しかし、

- ドカッ -

痛みの代わりに、鈍い音が龍の耳へと入り込む。恐る恐る眼を開いた龍の視線の先に在ったもの。それは、吹き飛ばされて床に叩きつけられた大狼と、フエンリルそれを行ったと思われる1人の男性だった。

「大丈夫か？坊主」

「あ…あなたは？」

その問いに、男性は龍へと向き直る。どこぞの屈強な戦士のような身体をした、それでいて細身な男。上半身には衣服を纏っておらず、寒くないのかと訊きたくなくなってしまふ程だ。

「俺あうたかた・そうき泡沫鎗鬼。其処にいる凜の……まあ、馬鹿親父だよ」

「（この人が泡沫鎗鬼……「伝説の剣士」の…）」ソートマスター

「父さん！会議に出席しに行ったんじゃない……」

「行く途中に大狼が走ってくのが見えたんで追ってきたら、何だこの状況？ってなわけだ。それにしても、なんてやられ方しようとしてやがんだ？これじゃあ剣聖の野郎が悲しむぜ」

「……確かに、そうかもしれませぬね」

「まともにとらえられると複雑なんだが…」

こうやって話している間にも、大狼の大群はじわじわと距離を詰めてくる。龍が立ち上がり、蒼龍を構えて前へ出ようとすると、鎗鬼が腕を挙げて制した。

「おっと、此処は俺様に任せてもらっぜ？」

「し、しかし……」

「市長のおっさんのところへ行かなきゃなんねえんだろ？ さっさと行きやがれ！」

龍を遮る様に言葉を被せる鎗鬼。口調はきついものの、その顔には微笑が浮かんでいた。

「分かりました。此処は任せます。鎗鬼さん」

龍は大虎等を引き連れて、僅かに開いた大狼と大狼の間を抜け、屋敷へと走り去っていくのだった。それを追おうと走り出した大狼達の前に、鎗鬼が立ちはだかる。

「ったく……世話の焼ける奴らだ。これは貸しにしとくぞ？ ソルデアス」

鎗鬼に行く手を阻まれた大狼は、機嫌を損ねたのかグルルルと喉を鳴らしている。

「あん？ やんのかコラ」

鎗鬼が自分の武器を手に取る。しかし、その武器は刀ではなく、鎚であった。短い持ち柄に鎖が付いており、鎖の先には棘の付いた鉄

球。その鉄球からはパリパリと、雷が絶えず放出されている。

「これが俺様の武器……雷鎚“ミヨルニル”。しっかし、「伝説のソードマスター剣士」なのに武器が鎚ってどうよ？なーんで俺様が選ばれちまつ……最後まで言わせるよ」

1匹の大狼フェンリルが鎗鬼に迫り爪を振り下ろすが、鎗鬼はそれを正面から片手で受け止める。そして、隙が生まれた大狼フェンリルの顔を、渾身の力を込めた拳で殴り飛ばした。

「人様の台詞はちゃんと聞くもんだろ！」

力無く横たわる大狼フェンリルには目もくれず、鎗鬼は大群の中へ飛び込みミヨルニルを振るう。

「おらおらおらおらあああああ！」

激しく回転するミヨルニルに、大狼フェンリルは1匹、また1匹と、なす術も無く吹き飛ばされる。鉄球をまともに喰らうだけでも相当なダメージになるが、ミヨルニルは雷というオマケがついてくる。

「そら、もう一丁！」

飛び上がった鎗鬼はミヨルニルを地面へと叩きつけ、更に多くの大狼フェンリルを蹴散らす。辺りの建物という建物が崩壊していくが、住民は既に避難した後だったため、気にする事もない。

「これで止めえだ！轟く雷鳴の衝撃！ライトニング・インパルス！」

鎗鬼が再度ミヨルニルを地に叩きつけると、ミヨルニルから放出さ

れていた雷が衝撃波となつて大狼へと襲いかかった。大狼は必死に逃げようと背中を向けて走り出すが、雷は即ち光。光の速度に適うはずもなく、その雷波へと吞まれていく。進む稲妻。そして自分等を見下す様に佇む1人の男。それが大狼の見た最後の光景であつた。

「格の違いを……思い知つたる？だが済まねえなあ……本気出せなくてよ？」

大狼の死骸で溢れかえつた街道を、鎗鬼はミヨルニルを引きずりながらゆつくりとした足取りで去つて行くのだった。これを『圧倒的』と言つのだらうか。この言葉がこれ程似合う男はそうそう居はしないだろう。

- ????-

「ありがとう、助かりました。泡沫鎗鬼さん。大狼が入り込むとは予想外でしたが、あの方が……龍様が生きていらっしやるならそれで良い」

どこぞとも分からない場所で呟いたのは、ソルディアスだった。

「おーい、ソルディアスウー、何時まで俺つちの動物共を使つつもりだよ？」

「レヴンか……お前の操る動物共は監察役に適しているからな。もう少し使わせてもらおう」

レヴンと呼ばれた人物は小さく笑つと

「ソルディアス……あんた、嬉しそうだな」

普段無表情なソルディアスを気遣ったのか、言葉をかける。

「そうか？」

ソルディアスは意外そうな表情でレヴンを見た。

「そう見えるぜ。じゃあ、終わったら返せよ」

レヴンは踵を返して立ち去った。その場には、ソルディアスが1人残されているだけだった。

本編第13話 推参！泡沫鎗鬼！〜（後書き）

泡沫鎗鬼……FFを知っている人は気付いたかもしれませんが、この人はFF？のジエクトを元にしてあります。

では次回をお楽しみに

〈登場人物案内書（キャラクターズガイド）〉（前書き）

そろそろ人物紹介しておこうと思い、載せました。一部抜けているキャラクターも居ますが、とりあえず今出て来たのをまとめました。

〈登場人物案内書（キャラクターズガイド）〉

名前：霸道龍 はくどうりゅう

歳：20

武器：蒼龍 そうりゅう

部類：刀（名刀） いれきゅうら

不規則な力：「?????」

主な技：蒼天波、紫龍閃 そうてんは しりゅうせん

プロフィール：真つ青な長髪に濃紺の瞳をした本作の主人公。冷静沈着な性格で、取り乱すことがあまりなく頭もキレる傑物。ノリは悪い方に分類される。13歳の時、左眼に傷を負い、以来その左眼は閉ざされていて開いた事は無い。身長は176?。また、高い戦闘力と判断力を有しており、魔物に囲まれて戦ってもひげをとらない程。

名前：黒斬大虎 くろぎり・たいが

歳：20

武器：鋼虎 こうこ

部類：刀（名刀） いれきゅうら

不規則な力：「闇の司者」 ブラックス・オペレーション

主な技：大獣爪、鋼の虎 だいじゅうそう フルメタル・ライガー

プロフィール：黒髪に黒い瞳をした、何もかもが黒い青年。今のところは龍の好敵手 ライバル となつて居るため、戦闘力は龍と互角と考えられる。荒くれの物言いが玉に瑕だが、人情に厚く困つてれば人だろつが魔物だろつが助ける良い奴。

名前：春風サクヤ（はるかぜ・さくや）

歳：19

武器：雷風 らいふう

部類：刀（名刀）

イレギュラーアクセラレイト

不規則な力：『加速』

ふうりゅうじん

主な技：風流刃、風流刃・鎌鼬

ふうりゅうじん・かまいたち

プロフィール：名刀『雷風』を操る、>オラル<の生き残りの1人。白髪のショートにオレンジの瞳が特徴。「伝説の剣士」である斬風終夜を兄に持ち、自身も武才を持ち合わせている。殆ど見せることは無いが、意外と天然な性格。

名前：銀麗裳

しろがね・たごみ

歳：21

武器：獾

ぼく

部類：刀（名刀）

イレギュラータイム・イーター

不規則な力：『時喰』

主な技：????

プロフィール：最強クラスの“不規則な力”、『時喰』を持つ。大虎の幼馴染みで、銀色の長髪が特徴的な女性。名刀『獾』を持っているものの、素手で大虎を倒してしまう程、体術が恐ろしく強いため殆ど使わない。頭の回転も早いので、戦闘においては今のところ、5人の中では最強と思われる。

名前：メビウス・ザ・シユラーク

歳：20

武器：桜火

おつか

部類：刀（名刀）

イレギュラーメタモルフォーゼ

不規則な力：『突然変異』

かえんぶとう

主な技：火炎舞闘

プロフィール：茶色の癖っ毛に紫色の眼をした青年で、「伝説の剣士」の1人、シリウス・ザ・シユラークを父に持つ。『突然変異』の能力で、見たものに変身する事が出来る。剣の腕も確かで、剣は、父親のシリウスから教えてもらっていた。

名前：覇道劍聖はどうけんせい

歳：43

武器：???

部類：???

不規則な力：イレギュラー『???'』

主な技：???

プロフィール：龍の父親で、「伝説の劍士」ソードマスターの1人。自分から戦おうとはしないためその能力は謎であるが、刀の国>刀<の現国王として君臨し、>刀<を発展へと導いた実力者。

名前：シリウス・ザ・シユラーク

歳：44

武器：???

部類：???

不規則な力：イレギュラー『???'』

主な技：???

プロフィール：メビウスの父親にしてソードハンターのトップ。「伝説の劍士」ソードマスターの一角を担う強者で、今のソードハンターを立て直し、再構成した。強さは未知数。

名前：ソルディアス・リブラスエード

歳：27

武器：???

部類：???

不規則な力：イレギュラー『???'』

主な技：???

プロフィール：白髪に黒い瞳をした、ソードハンターの幹部。参謀ブレインング・メタルを務め、一番シリウスに近い存在と言われている。腕を覆う吸収鋼で魔力や力を吸い取る。龍を監視し、気にかける様な発言も度々。

普段は陰険だが、戦闘になると……。

名前：ジーク・ドラゴニアス

歳：26

武器：???

部類：???

不規則な力：イレギュラー『???'』

主な技：???

プロフィール：短い黒髪に藍色の瞳をしたハンターの幹部。歳が1つ上のソルディアスと共に行動する事が多く、ハンターの中でもトップクラスの實力を持つ。サバサバした性格で、寝ることが好き。嫌いなものは、面倒な事。

名前：ユーリ・ハドレシア

歳：13

武器：連刃れんじん

部活：刀（名刀）

不規則な力：イレギュラー『痛みの操者』ペイン・ルーラー

主な技：連刃乱槍れんじんらんそう、鋼刃牢ことうじんろう

プロフィール：最年少のソードハンター幹部。一見可愛らしい女の子だが、腹黒く、ひねくれた性格。その最たるものが、彼女の“不規則な力”『痛みの操者』ペイン・ルーラーではないかと思われる（知らない方は第9話を参照）。刃の数を増やし、伸縮自在な名刀『連刃』れんじんを武器に戦う。

名前：泡沫鎗鬼うたかた・そうぎ

歳：45

武器：雷鎚“ミヨルニル”

部類：鎚（伝説の武器）

主な技：ライトニング・インパルス

プロフィール：「伝説の剣士」ソードマスターの1人で一番の年長者だが、強大で圧倒的な強さを誇る。おそらく、そこら辺の魔物が束になってかかろうとも、一瞬で蹴散らしてしまうだろう。伝説の武器の1つ、雷鎚“ミヨルニル”を持ち、普段は鍛冶屋の店主をしている。

名前：泡沫凜うたかた・りん

歳：25

武器：無し

部類：無し

不規則な力：イレギュラー『巻き戻し（ロール・リバーズ）』

主な技：無し

プロフィール：黒い長髪に翡翠の瞳をした泡沫鎗鬼の娘で、事象干渉系の“不規則な力”『巻き戻し（ロール・リバーズ）』をもつ。これは、“形状変化した物を元の形状に戻す”能力ちからである。詳しくは対象物となる物の時間軸に干渉する（弱点などに関しては、12話にて公開）。戦いは好まず、自身も戦う事を嫌っている。

名前：ゴルディール・ロルカノフ

歳：31

武器：吸鬼きゅうき

部類：刀（名刀）イレギュラー

不規則な力：イレギュラー『乗りこなす者』グラインド・ライダー

主な技：暗黒斬あんこくざん

プロフィール：ソードハンターの幹部だが、龍に敗北し、ユーリに一度殺され、暗黒斬も『乗りこなす者』グラインド・ライダーも、登場した中では一度しか使えず、“殆どかませ犬”のレッテルを貼られた悲しき人物。

く登場人物案内書（キャラクターズガイド）く（後書き）

どうだったでしょうか？自分的には詳しく書いたつもりでしたが。

では次回をお楽しみに

本編第14話〈真実〉（前書き）

ものすごく期間開きまして、すみません。今回は話が多いです。
ではどうござ

本編第14話 真実

泡沫鎗鬼の助けにより、窮地を脱した龍達は、市長オルウエーダの屋敷へと来ていた。市長に会いたい、と言っただけで、6人は屋敷の客室に通され、来客用の椅子に腰掛けて待つている状態。これから会うのは、首都に名を使われる程の人物。

「一体どんな奴なんだ？市長とやらは」

大虎がメビウスに疑問を投げ掛けるが、メビウスの答えはこうだ。

「さあ？」

「……はあ！？」「」「」

メビウス以外の4人が素つ頓狂な声を上げ、席から立ち上がりメビウスを凝視する。しかし、凜だけは、意味ありげな笑みを浮かべて座っている。

「おいおい…前に来たことがあるって言うてただろう？現にそれで入国させてくれたんだぜ？そのお前が知らねえってどういう事だ？」

大虎は正論を言っている。確かに知りもしない輩を通す程、此処の市長は馬鹿では無い……筈。いや、4人は気付いていないのだろう。

「何を聞いていたのかな？僕は、さあ？とは言ったけど、知らないなんて言ってないよ？」

「な、何？」

「言葉遊びは止めなさい、メビウス。あなたは何時もそうやって屁理屈を言うわよね?」

そう言っただけ現れたのは、長い銀髪に碧眼の女性。外見は麗姿に似ていなくもない。

「これはこれは市長。だって、仕方無いでしょう? 何て言えば良いか分からないんですから。」

「私が変人か何かと言っている様に聞こえるのだけど?」

「それはすみません」

「この子達が、あなたのお友達ね? 初めてまして。市長のオルウエーダ・シルヴェニカよ」

「え…」

その声に反応したのか、市長は龍を振り返る。

「どうしたの?」

「いえ、話を聞く限りでは男と違ってたんですが」

「私の父ねそれ。父が引退したから、私が現市長ってわけ」

龍の疑問も解けたところで、この国に伝わる五元の竜の伝承が、市長によって皆に伝えられた。

「五元の竜は、全てを支配できる存在。その余りに強力な力故に、

天、地、水、破、創の力を持つ5体の竜によって封じられていたのけれど、7年前破壊の竜が消え去ってから封印が緩んでいるの。ソードハンターは其処を狙っているのね」

「……………」

相変わらず龍は目線を落とし、俯いたままである。自分が原因で招いた事態なのだから当然と言えば当然なのかもしれない。

「それともう1つ。ハンターは“名刀を狩る”って言ってる様だけど、封印を解くのに必要な刀は、たった5本だけで良いの」

「！まさか……」

龍の眼がこの上なく見開かれ、市長を見つめる。

「そう。あなたの持つ蒼龍もその1つ。後、破壊の“轟龍”、空の“天龍”水の“青龍”地の“震龍”が必要になるわ。これらは五元竜シリーズと呼ばれているの。ハンターは名刀を狩る事によって本当の目的が五元竜シリーズだということを隠していたのね」

「待て…水が青龍なら、蒼龍の属性は何だっただよ？」

「創造。総てを作り出す力よ」

オルウエーダとメビウスだけが平然としており、後の4人は顔を見合わせた。

「それなら、その五元竜シリーズを守れば良いんじゃないですか？」

「誰が持ってたか分かってんのか？」

麗裳や凜はともかく、龍とサクヤには、大虎の問いに思い当たる節がある。

「俺の父さんは轟龍を持っていた」

「私の兄が天龍を……あ！」

サクヤの突然の大声に、皆が振り返りサクヤに視線を注がせる。何時もの暴走が始まらなければ良いのだが。

「どうしたんだよ」

「震龍を持つてる人の名前、思い出しました。その人の名前は……」

「天帝だろ？」

更なる別声が響き、客室の窓枠に寄りかかる1人の人物が目に残まる。

「に、兄様!？」

この声はサクヤのものだ。サクヤも兄、斬風終夜の突然の登場に驚いたらしく、狼狽率が著しく上昇している。

「いよう、久しぶりサクヤ。1年ぶりか？」

斬風終夜^{きりかぜ・しゅつじや}。サクヤの兄にして史上最年少23歳の「伝説の剣士」^{ソードマスター}だ。しかし、サクヤの知る終夜とは幾らか雰囲気が違う。去年までは生真面目だったのだが、何というか……その……サバサバした性格

になっていた。

「兄様、どうして此処に？」

「決まってるだろ……愛しの妹を見に来たんだよ」

「ふえ！？」

こんなシスコンみたいな事も言わなかっただろう。赤面するサクヤを見る終夜の顔が真剣なのを見ると、冗談を言っている訳では無い様で、どうやら本物のシスコンになったらしい。

「……………」

会場全体の静寂。龍や他の面々の“何だこのシスコン野郎”という顔を気にもせず、終夜は涼しい顔をしている。この空気を打ち払ったのは、いつも通りに大虎の役目だった。

「って！こいつがサクヤの兄貴だあ！？」

「斬風終夜だ。よろしくう！」

明るくなったのは良いが、人は1年こつきりでこれほどまでに変わるものだろうか。まあ、其処はスルーといこう。

「天龍を持ってるって言ってたみたいけど？」

「これか？」

麗裳の問いに天龍を抜いて見せる終夜。その刀は、1年前にサクヤ

が見た時と同じく、透き通る様な空色をしていた。

「で、誰なの？その天帝って」

麗姿の問いに答えたのは終夜だった。一度戦った事もあり、そして負けた相手の名前を、簡単に忘れる程終夜の記憶力は軽薄ではない。

「ハンターの幹部の1人さ。俺は彼奴に負けちまったから、良く覚えてる……あの金髪に紅い眼を思い出すと、悔しさが心の底から湧き上がって来んだよ」

静かに語る終夜だが、その拳は堅く握られ、今にも血が滲みそうな勢いである。

「なら今すぐにも父さんに知らせないといけない、か……」

「そんなこつだろうと思って、剣聖には俺が通達しておいたから安心しな。それに、あの馬鹿強えおっさんがハンターなんかにはやられつかつての」

それを聞いて、自分の心配は杞憂に終わった、と安心し、龍は心の中で胸を撫で下ろす。

だが肝心なのはこれからで、ハンターの目的が分かった事は良しとしよう。それをどうやって守るかだ。ただ一言に守ると言っても漠然とし過ぎているし、幹部クラスが出て来ればあっさりと崩されてしまうかもしれない。

「あの……兄様」

「どうした！愛しのサク……フガッ！」

サクヤの正拳が終夜の顔面に吸い込まれてめり込む。顔面陥没にでもなりそうなめり込み方であるというのを、この場に居る誰もが思ったのは言うまでもない。サクヤの額に浮かぶ血管マークを見れば、手加減なしということがお分かり頂けるだろう。

「会議の方は…どうしたのです？」

「ブホツ……あゝ、なぐんか俺らのリーダーが中止とか言って放り出したんよ。で、お開き。そんな時たまたま剣聖と一緒にだったから、この事を報告したってワケだ」

自分の顔からサクヤの拳を抜いた終夜は何事も無かった様に話す。これもシスコンの特徴と言って良いのか、妹がしたことを咎める事はしない。だが、人としての道を踏み外そうとすれば全力で怒る（という話）。

「じゃあ父さんは…」

「俺と別れた後、刀くに帰ってつたよ」

「そうですか」

「さて、と…本題に入る前に…てやつ！」

終夜が持っていた天龍を、いきなりメビウスに向けて振り下ろした。流石に驚いたらしいメビウスは、間髪を容れず髪床を転がってかわす。近くにあったテーブルと花瓶が2つに斬れ、床に落ちる。その花瓶から漏れ出た水が客室の真っ赤な絨毯を濡らし、天龍によって斬り裂かれた床の隙間に入っていく。

「な、何を!？」

龍だけではない。サクヤも大虎も麗袋も、オルウエーダや凜までもがそう思った。

「なあ市長さんよ…この町に大狼フェンリルが入るのって何回目だ？」

「え?何故そんな…」

「いいから早く答えろ……」

何を訳の分からない質問をするのかと問いたくなくなった市長だったが、終夜の有無を言わさない気迫オーラを目の当たりにし、聞けなくなってしまう。

「に…2回目だけど」

「2回ともメビウス(こいつ)が来てた時じゃねえか？」

「!」

ギクリと身を震わせたメビウスを振り返る終夜。

「なあ?…メビウス・ザ・シユラーク。シリウスの奴と仲間ゲルになつて何企んでやがったんだ？」

終夜の視線の先には、驚愕の顔で佇むメビウスの姿があった。

「な、何言ってるのさ。僕は龍の」

「友達のフリしてました、か？」

終夜に言いくるめられてしまい、何も喋れなくなってしまいうメビウス。だが次の瞬間、

「フッフ…アツハハハ！良くできましたあゝ。でも王手チエック・メイトには後もう少し足りなかったみたいだね……火炎舞闘！」

「「まちやがれメビウス！」」

メビウスは客室を破壊して外へと飛び出して行き、終夜と大虎が後を追う。それを無言で見つめる龍の顔は、どこか寂しそうでもあった。

- メビウス…何故だ…何故お前がシリウスさんと……それは俺のせいでもあるのか？俺は…お前が裏切っただけが構わないし、それはお前の自由だ。但し道を間違えないでくれ。もし道を踏み外した時は、俺がお前を…… -

本編第14話〜真実〜（後書き）

メビウスが裏切っていました。どのタイミングで裏切らせようかと思いましたが、ちょうど良くスコンになった終夜が出て来てくれたので助かりました。
ではまた次話で

本編第15話「探し求めていた安息」(前書き)

メビウスの話が中心の15話です。ではどうぞ

本編第15話 捜し求めていた安息

- 皆さんこんにちは。

シリウス・ザ・シユラークの子息、メビウス・ザ・シユラークです。
今日は僕の事についてお話しますね。

そうだなあ、皆さんは僕の“不規則な力”はご存知ですよね？

いやあ、この『メタモルフォーゼ突然変異』、中々に便利でして。

“相手を騙す”事に関しては他に類を見ない強さなんです。

例えば、例えばですよ？今僕は^{イレギュラー}大虎と終夜さんから追われているんですが、そう、もうお分かりでしょう？僕がどちらかに化けて出ていったら……どうなると思いますか？-

- >ウエニキア< 郊外 -

「チィ！何処行きやがったんだ？メビウスの野郎……」

終夜と共にメビウスを追って屋敷を飛び出した大虎だったが、入り組んだ住宅街に逃げ込まれ、メビウスを見失ってしまっていた。

- まさか、あいつが裏切るとはな……龍の奴、落ち込んでなけりゃいいが……メビウス、真実を話してもらうぜ……-

考えながら走っていると、路地裏の角に怪しい人影が1つ。

「！」

抜いた鋼虎を、その影の首筋へ持って行き寸止めする。その影も自分と同じ動き（モーシヨン）をとる。この影正体とは……

「大虎……」

「な、何だ終夜かよ。驚かせやがって」

この時、大虎は気付かなかった。終夜の持っていた刀が天龍では無い事に。

「大虎、メビウスは見つかったか？」

「今搜してる」

「そうか、なら挟み撃ちが効率的だ。俺は西から回り込むから、お前は東から行ってくれ」

「分かった」

大虎が身を翻し終夜に背を向けた瞬間、刃が大虎の背中を一閃した。鮮血がしぶき、そのしぶいた鮮血がレンガにべったりと付着し、流れ落ちる。

「が……！て、てめえ……」

必死に手を伸ばしその足を掴もうとするが、今少し足りない。遠ざかる意識の中、大虎が見たもの。それは……返り血を浴びて赤い斑点がいくつも出来ているメビウスの顔だった。

「先ずは1人……」

「どうでしょうか？」
突然変異^{メタモルフォーゼ}にはこんな使い方も在るんですよ。
これが“相手を騙す”つまり“欺く^{おそむ}”という事ですよ。でも、鋭

い人なら話し方とか癖で直ぐバレちゃいますから、そこのところは慎重に。あ、良い子は決してマネをしないで下さい。僕みたいな歪んだ人間に成りたくなければ、ね。それから……

- ドスツ -

「…え…？ドスツ？」

瞬間、メビウスの口の中には血の味が広がり、目線を下に落とすと、心臓の辺りから突き出ている蒼い刃。メビウスはゆっくりと後ろを振り返る。

「へへ…：見つかったか…：流石は…：龍だね」

藍色の髪をした青年は、無表情でメビウスの眼を見つめ、視線を外そうとはしない。

「お前のやりそうな事くらい分かる。それよりも、何故手を抜いた？あの時なら大虎を殺す事も出来た筈だ」

「見られてたのか…：さあ…：何で…：だろう…：…：ねえ」

「答えに成ってないぞ」

龍の眼からは、涙が一筋。メビウスにはその理由がどことなく理解できていた。

たった5年だけの付き合いだったとしても、例え偽りでも、友達だった者を殺す時の罪悪感に苛まれて^{さいな}いる眼だ。

- ああ、知っているよ、龍、その眼。

僕も何度そんな人を殺して来たんだろう。

あの馬鹿親父から命じられるがままに意味のない殺戮を繰り返して……僕は生まれながらにして戦闘兵器として育てられた。でもそんな僕にも、友達が出来たんだ。

そう、それが龍。兵器として見られていた僕をあつさりを受け入れてくれた。やっと、本当に仲良くなれると思ったのになあ……

「そう…だね…僕が此処で…死ねば、あの馬鹿親父の…計画に…少しでも…障害が…生まれると…思ったから…かな」

「そんな事ために、お前は」

「早く…行くんだ、龍。僕なんか…放っておいて」

「仲間の不始末は俺が点ける」

尚も強い口調で話す龍に、メビウスは笑顔を崩さない。薄れゆく意識の中で精一杯の笑顔である。

「此処までできてまだ“仲間”だなんて…甘いな君は」

「その甘さもひっくりかえして、全てが俺の強さだ」

「やっぱり…君には…か…なわな…い…なあ」

- 7年前 -

僕は龍達が剣術学校に通っている間、戦闘の訓練をさせられていた。休む事は許されず、倒れれば鞭を打たれ、朝から晩までひたすら訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練訓練

てくれた。

更には住む場所まで提供する始末で、これが本当に15歳の事か、と疑問に思ってしまう程。

そして僕が20歳はたはになった頃、父がソードハンターを復活させた事を知り、>ワーミストくを訪ねるが、父の姿は無く>ワーミストくは壊滅させられた後だった。

その後1年間、僕はソードハンターの情報を集めて周り、父との接触に成功した。だが父は、またもや僕に命令を下す。

「霸道龍を監視せよ」

逆らえなかった。

幼い時より身体に染み込んでいた軍人思考に適う筈も無く、仕方なしに龍を追って父の元から離れた事が記憶に新しい。

*

- 思えば、あの『死の制裁事件』が終わった時から、僕は死に場所を求めていたのかもしれない。得られる筈もない無形の安息、幸せを求めていただけかもしれない。

それが、漸く手に入るんだ。

思い残す事は……沢山あるなあ。

シリウスを、あの馬鹿親父の顔をぶん殴ってやりたかったし、計画を邪魔したかった。

あの親父が悔しがる姿を見たかった。

あ、ユーリにも誤らなくちゃ。でも、それは龍に任せよう。

「大虎には……ごめん……って……言……て……お……い……て。自分で……言えそうに

…ないから。それから…ハア…ユーリに会ったら…騙してて…悪
かったって…言ってるね。君達を…騙してたけれど…ハア…ハア…親
父の計画を…止めたいのは…本当だったんだ。後は…任せたよ」

「ああ…ああ…分かったよ。最高の仲間として、最高の友達として
の最後の挨拶だ。さようなら…安らかに、な」

言っただ龍は蒼龍を引き抜く。今まで立っていた事が嘘のよう、糸が
切れた操り人形の様に地に倒れ伏すメビウス。

- さようなら龍…次に会うときは…もっと、良い人間に成って
るから、さ…ハハ、そんな顔しないでよ龍…こっちまで泣きたく
なるじゃないか…僕は今から旅立つんだから、祝ってよ。

やっと…初めて命令違反が出来たんだからね。逆らえなかったあ
の親父に命令違反を犯すなんて、命がいくつあっても足りないよ。
おっと、そろそろ時間切れ、かな…でも、もう少しだけ、この世界
で生きたかったなあ -

本編第15話「捜し求めていた安息」（後書き）

なんか書いてて感動しました。龍の、全てを許す発言はかつこよか
つたです。メビウスよ安らかに…

番外編『死の制裁事件』(前書き)

番外編新しいの作りました。ではどうぞ

番外編『死の制裁事件』

- こんにちは。前話で亡くなりました、メビウス・ザ・シユラークです。皆さんにはあの事件を、『死の制裁事件』の事をあまり詳しく話していませんでしたね。

これからお話するのは、『死の制裁事件』の全貌と、その裏に隠された真実です -

- 7年前 -

「魔物など一掃すれば良いではないか！」

両手でテーブルを叩き、立ち上がる人物が1人。メビウスの父、シリウス・ザ・シユラークだ。当時は37歳。

メビウスの故郷、ワーミストクには「伝説の剣士」ソートマスターが集結し、これから起こり得る『死の制裁事件』についての会議が開かれていた。

因みに、『死の制裁事件』という名前はこの戦いが終戦した後につけられたら名のため、今のところは戦争と称させて頂こう。

「シリウス」

「何だ剣聖」

隣の席に座る霸道剣聖がシリウスに声をかける。

この2人は昔からの親友、いや戦友で、様々な戦場を共に戦い抜いて来た猛者だ。

「魔物側には不死鳥と竜、2つの最上級種族と上級種族がついてい

る。ましてや、此方は人間のみな上に、戦える者は私達「伝説の剣士」^{マスター}だけときた。この状況をどうやって覆し、魔物を掃討しようというのだ？」

「そ、それは…」

シリウスは言葉に詰まってしまう。

魔物の序列において、最上級種族と上級種族の存在は絶対である。それらを敵に回すということは、世界そのものを相手にする様なもの。

終夜が「伝説の剣士」^{マスター}入りを果たす6年前のため、この時は4人。

「で？結局どうすんだよ？」

テーブルに足を乗せて面倒くさそうに言うのは、泡沫鎗鬼。

元々の性格上もあるのだろうが、鎗鬼はあまりこういう事が好きではない。早く終わってくれ、といつも心の中で呟いている。

「どうするのだネフィル。お前がリーダーなのだぞ？決めるのはお前だ」

剣聖の視線の先には、短い金髪をした少女（！？）が静かに座っていた。飛び出たアホ毛が触覚の様に見えるくもない。

歳は剣聖やシリウスよりもずっと若々しく、此処だけの話、6歳だ。

……今、嘘だと思った人、これは真の真実である。

「伝説の剣士」^{マスター}主席、ネフィル・ミラ・ルインベルト。

女性、しかも年端もいかない子どもでありながら、「伝説の剣士」^{マスター}に就いており、さらにはリーダーという大役まで担っている。

しかも、ネフィルは表に出ては来ないために、その存在は同じ「伝

説の剣士ソードマスター」しか知らない秘密。
そもそも、「伝説の剣士ソードマスター」を作ったのがネフィルなのだ。（わお！
マジかよ！）

故に、終夜が最年少で「伝説の剣士ソードマスター」“入り”を果たしたという事は、嘘ではない。

そのネフィルがゆっくりと口を開いた。

「先ずはあつちのリーダーと話し合う事が先決でしょ？つというわけだえ……」

ネフィルはシリウスへと視線を移す。

「シリウスちゃんが行ってきてね」

「ネフィル！それは……」

剣聖が何か言おうとするのを、ネフィルが制した。意味ありげな笑みを、その顔に浮かべたまま。

「剣聖ちゃん、いいから……頼んだよ？シリウスちゃん」

「分かった」

扉をゆっくりと開け、シリウスは会議室を後にした。残ったのは、ネフィル、剣聖、鎗鬼の3人。

「ネフィル、何故シリウスを行かせた？あやつが魔物を毛嫌いしているのを知っていながら」

「そこだよ」

「何？」

「シリウスちゃんは魔物が嫌い。

敵のリーダーを倒せばこの戦いが終わると思ってる筈でしょ？

ならば間違い無く、シリウスちゃんはリーダーを叩き潰しにかかるだろうね……でも、シリウスちゃんじゃ魔物達を統べる、竜王バハ

ムートには勝てない、それを分からせるためだよ。

どうせ、魔物との対決は避けられそうにないしね」

「……………」

沈黙する剣聖。明らかに顔が強ばっている。

何時もの事ながら、ネフィルの思慮深さには驚嘆すべき点が沢山多数存在しているのだ。

全く、何処にこんな思慮深い子どもが居るといえるのか。

世界中探しても、ネフィルだけ……いや、もう1人居る。7歳にして天才軍師と呼ばれている規格外の傑物が。

化け物が。

その話はまたの機会にしよう。

しばしの静寂の後、突然立ちあがるネフィル。

「さあて、シリウスちゃんは今回の戦いで何を悟るのかな？楽しみ

っ！じゃあね、剣聖ちゃん、鎗鬼ちゃん。また今度、生きてたら会

おう！」

ネフィルは意気揚々と、会議室から“消えていった”。そう、“消えた”のだ。それも、一瞬にして。

ここで、彼女が“消えた”からくりについて説明しよう。
これは、もう気付いたかもしれないが“不規則な力”^{イレギュラー}である。『存^マ在意義』^{イライフ}という彼女の“不規則な力”^{イレギュラー}は、“自分の存在を周りに認識させたり、させなかつたりする”^{ちから}能力。
つまり、好きな時に、自分の存在を点けたり消したり出来るわけだ。系統は身体強化系である。

「はあ… やつと終わったぜ… 剣聖、ちと手合わせしねえか？ 最近戦つてねえから腕が鈍つちまつてそうだよ」

「うむ、私も丁度同じ事を考えていたところだ。付き合おう」

「そこなくちな」

この後、2人の手合わせで>ワームストくの街が半壊したのは、言うまでもない。

- 数日後 -

『我と戦つと申すのか？』

威圧感のある声を響かせたのは、魔物を統べる竜王バハムート。
此度の戦いにおいて、魔物軍の大将を務める竜族の長である。
漆黒の身体に、紅き眼を持つ竜の中の竜。
通常、魔物は人語を話すことは出来ない。だが、バハムートは次元が違つ。

「お前を此処で倒せば、実質「伝説の剣士」^{ソートマスター}の勝ちは決まるようなもの。ならば、決着は早い方がよかるう？」

その言葉にバハムートは若干の怒りを覚えた様で、口から黒炎が烽火の様に上がっている。

え、それではここで一旦状況を整理しよう。

魔物側のリーダーと話し合うため（シリウスにとっては、殺り合うため）にシリウスがやって来たのは、バハムートの根城、>ワーミストくから西、最果ての地『煉獄の門』である。

この現世と地獄を繋ぐ門で、バハムートはこの門を自在に開閉出来るというから驚きだ。

『人間風情が我に、竜王バハムートに勝てると思っているのか？』

「弱い犬程よく吠える、と言うぞ？」

『ほう…ならば、弱い犬たる我を葬ってみるが良い！』

挑発にあえて乗ったバハムートが、黒炎を吐き出す。標準は、シリウスだ。バハムートの吐き出したそれは、さながら地を這う大蛇の様にうねりながら、シリウスを目指して進む。

シリウスは物怖じせず、武器を手取る。長い柄の先に付いた白刃。

攻撃範囲は刀や剣のそれよりも、圧倒的に長い。

シリウスの武器は、どうやら槍の様だ。

「行くぞ…神槍“グングニル”よ…我が槍術、受けるが良い！」

シリウスの槍はかつて主神オーディンが用いたとされる必殺の槍グングニル。

全てを貫くその攻撃力は、全武器の中でも随一。この槍をもって、

シリウスは幾多の戦場を生き延びてきたのだ。
シリウスがグングニルを一振りすると、黒炎が跡形も無く消し飛ぶ。
流星は主神の槍というだけのことにはある様で、黒炎を浴びても傷
つ付いていない。

『フム……封印状態では、本来の黒炎の威力は出せぬ、か。それにしても、それが噂に名高いグングニル。全てを貫く槍とは……大き
く出たものだ』

バハムートは何故かグングニルを知っている様な口振りで話すが、
シリウスは気にもとめない。
今のシリウスにとっては、バハムートを倒す事が重要なものだから。

「貴様の黒鱗も貫いてみせよう」

『……やってみる』

言っ**て**バハムートはゆっくりと自分の腕を持ち上げた。
此処へ打ち込んでこいということらしい。
シリウスは迷わずグングニルの矛先をバハムートの腕へと向け、放
り投げる。

「ゴッド・スティングァー神の眼光！」

神々しい光をその身に纏まとい、グングニルはバハムートの腕へと一直
線に空を斬る。

そして、見事にバハムートの腕を穿ち、穴を開けた。

「どうだ？これが神の槍の力だ」

勝利を確信したシリウスだったが、バハムートは高笑いをするだけで、その確信を不安へと変えてしまう。

『ハツハツハツ！確かに素晴らしい威力だ。だが、忘れたか？我が“何”であるかを』

「何？」

次の瞬間、グングニルによって穿たれた穴がみるみるうちに塞がっていき、元の腕へと形状を立て直した。

これにはシリウスも度肝を抜かれた様で、額から冷や汗が。

『我は五元の竜、竜族の長、竜王バハムート。』

全てを支配する存在だ。今は封印でこの門に繋がれているが……。

確かに主の槍は全てを貫く神の槍。

しかし、どんな神といえど、不死は貫けまい？』

“不死は貫けない” こればかりは動かしようの無い真実である。

グングニルは全てを貫く槍。

だが、貫くだけではバハムートには勝てない。

何せ不死。

再生してしまうのだから。

「貴様が五元の竜、だと？そんな馬鹿な事があるものか！五元の竜は門に閉じ込められていた筈……出てくるなど……有り得ない」

『誰か知らぬが、破壊を司る竜を退けたらしい。故に我は、この破壊の黒炎を吐けるのだ。』

元々は我が創り出した5体の竜の1体なのだからな。

破壊の力が我に戻って来たに過ぎぬ』

確かによく見ると開いた『煉獄の門』から鎖が無数に伸び、バハムートの身体のいたるところに巻き付いている。

シリウスは絶望に打ちひしがれる結果となった。不死の、それもまだ未開封状態のバハムートに、グングニルは容易く打ち砕かれてしまった。

打ち砕かたというのは勿論比喩である。

ネフィルの言っていた事はこういう意味だったのだ。敗れた。

適わないと分かせて、勝手な暴走を抑制するという、ネフィルの巧妙な心理戦に、シリウスは敗れたのだ。

『我は直接戦闘には参加せぬが、もしまた此処に来ることがあれば相手をしてやるう。せいぜい足掻くが良い。人間』

「勝てない……のか？」

冷たく閉じた『煉獄の門』の前にはシリウスが立ち尽くすのみであった。

番外編『死の制裁事件』(後書き)

何か結構色々なところから持ってきてますよね？(バハムートとか特に)

後半もありますので、お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0789p/>

光龍記 ~ The Shining Blader's ~

2011年10月8日07時46分発行